
そして彼は月夜に笑う

塔城 虚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして彼は月夜に笑う

【Zコード】

Z2678G

【作者名】

塔城 虚

【あらすじ】

魔術、それは世界を捻じ曲げる力。魔法、それは世界に干渉する力。根源を同じくしながら、決して交わるはずのない力が重なる時、世界はどうなるのだろうか？

プロローグ

プロローグ

薄暗い部屋の中、蠅燭の明かりの中に三つの人影があつた。

「お父様、準備が整いました。」

そう言つたのは十代前半と思われる少女。
その表情は感情を感じさせない無表情であるものの、よく見れば悔しげに唇を噛み締めているのが見て取れる。

「やうか……」

お父様、と呼ばれた四十代半ばの男はもう一つの影へと視線を転じた。

そこに立つていたのは、漆黒の長髪を頭の後ろで縛り、黒曜石のような瞳を持った青年。

その足元には複雑な紋様の魔法陣が描かれており、青白い燐光を放つてゐる。

「準備はいいか?」

青年は軽く頷くと頭を下げる。

「何から何までりがとうござります

「気にすることはない、君は私の弟子だ。それに、私には君に礼を言わせる資格などない。私にもっと力があれば、君を教会から守る

「とも出来たのだから。私が不甲斐無いばかりに……」

悔しげに拳を握りしめる男に、青年は首を横に振つて答えた。

「俺は、貴方の弟子であったことを誇りに思つています。貴方に出会わなければ、俺はとうの昔に死んでいたでしょうから。」

青年はそう言つて視線を少女へと転じた。

「アリア、師匠を頼んだぞ。この人は誰かが見張つてないとすぐに無茶するんだから」

アリアと呼ばれた少女は小さく頷き、兄弟子の姿を目に焼き付けようとしてしっかりと青年と視線を合わせた。

魔法陣から放たれる燐光は輝きを増し、蠟燭の頼りない明かりに照らされた室内は今や青白い光に満たされている。

その神秘的な光景は別れの時を嫌というほど感じさせた。

「そろそろ時間だ」

男の言葉に青年は頷き、じつと自分を見つめる少女を安心させるよう、に、笑顔を浮かべた。

「それじゃ、そろそろ行きます。アリア、俺が無事に転移出来るよう祈つてくれよな?」

「それは私の術式が信用出来ないということかな?」

「い、いやだなあ、そんなわけないじゃないですか」

二人の間の抜けたやり取りに、深刻な顔をしていた少女は薄く微笑んだ。

それを見た一人は、少女からは見えない位置で親指を立ててニヤリと笑う。

室内に満ちる燐光は、目を開いているのが困難なほどに輝く。

その中にあっても、三人は目を閉じることはない。

旅立つ者は、自らの生きた世界を、それを知るもの記憶に焼き付けるために。

残る者は、共に過ごしてきた家族の旅立ちを見送るために。

「師匠、アリア、行ってきます」

青年の言葉が引き金となつたのか、舞い踊る燐光が渦を巻き、すべてを呑み込まんとする濁流のように猛り狂う。

光の奔流が青年の姿を覆い隠し、世界が白銀に塗り替えられた。

さよならは言わない

音のなくなつた世界で、少女は確かに聞いた。

兄弟子であり、淡い初恋の相手であつた、誰よりも臆病で、そのくせ困つている人を放つておけないお人好しの青年の口癖。

青年の過去がどんなものだつたのか、少女には分からぬ。

それでも、彼が『さよなら』というたつた四文字の言葉を何より嫌つてゐることは知つてゐる。

だから、さよならは言わない。

世界に音が戻り、光が收まつたとき、そこに青年の姿はなかつた。

青年がどんな世界に転移したのかは分からぬ。

もう一度と、彼に触れることも、声を聞くことも叶わない。

少女に出来るのはただ祈ることだけ。

故に、少女は祈る。

彼の生きる新たな世界が、彼にとって、優しい世界であるように。

第一話

「う……」

後頭部に感じる鈍痛で目が覚めた。

体を起こして触れてみると、指先に感じる腫れ。

振り返つてみると、ちょうど頭の位置に大きめの石があった。どうやら、こいつが原因らしい。痛みの理由が分かったところで立ち上がり、周囲を観察する。

「どうだ？」

周りに見えるのは雪の降り積もった大地と無数の木々。

枝の隙間から光が射していることからまだ昼間だと思われるが、頭上を覆う密集した枝のせいで大半が遮られており、辺りは薄暗い。森の中であることはわかるが、こんなところに来た覚えはない。何があつたのか思い出そうとして、近付いてくる人の気配に気が付いた。

「ちょうどいい、ここがどこなのか聞いてみるか。」

そうと決まれば善は急げ、だ。

気配の方へと近付いて行くと、突然、空気が変わった。この空気は知っている。

敵意。

そもそもどうか、と嘆息する。

誰だつて、森の中で近付いて来る気配があれば警戒するだろう。どうしたものかと考えていたところで、先ほどから感じているものは比較にならない、明確な殺意を感じ、慌てて後ろへ飛ぶ。

見れば先程まで立っていた場所に巨大な氷柱が突き刺さっている。明らかに自然のものではない。となれば、考えられる可能性はただ一つ。

「魔術師か……」

魔術師。

魔力を用いて神祕を成すもの。

科学の発展した現代においては、空想上の存在である。しかし、確かに魔術師は存在するのだ。

今し方攻撃を仕掛けてきた人物然り、そして、自身もまた、魔術師と呼ばれる者の一人。

「ちひ、めんぢくせえ……」

とにかく、今は身の安全を確保することが最優先。躊躇つている暇などない。

「リリース・アクセル・イグズイウス」

身体強化と同時に牽制の魔弾と共に走り出す。相手の位置は分かっている。

一気に距離を詰めて無力化するのが最善。

木の幹を蹴りつけながら相手の背後に回り、魔力を乗せた右拳を叩き込むべく、振り被る。

相手もこちらに気付いて振り向くが、もう遅い。

「なつ」

とてつもない衝撃を感じ、木の葉のごとく吹き飛ばされながら必死

に体を捻り、なんとか足から着地する。

今のは、一体……？

相手の攻撃ではないだろ？ 完全に不意を突いていたのだから、そんな余裕はなかつたはずだ。

対してこちらの拳は確かに相手をとらえたように見えた。

視線を巡らせると相手は十メートルほど離れたところに倒れていた。警戒しながら近付いて驚いた。そこに倒れていたのは十四歳程の少女。どうやら気絶しているらしい。

ポケットから取り出した煙草に火をつけながら先ほどの戦いを反芻する。

それにして驚いた。おそらく先ほどの衝撃は対物理障壁を殴ったためだろ？ が、この若さであれほどの結界が張れる魔術師がいたとは。

同じ魔術師として気になるところではあるが、今はそれどころではない。とりあえず近くの町へ行かなければ何も出来ないのだから。そのためには彼女を起こして尋ねるのが手っ取り早い。

そう考へ声をかけようとしたところで、少女が目を覚ました。

「おーい、大丈夫か？」

そう声をかけると、少女は思わず拍手をしてしまった。その身のこなしで距離をとつた。

綿糸のように艶やかな金髪が風になびく。どうやらかなり警戒されているらしい。深く澄んだ碧眼は油断なくこちらを睨みつけている。

「……貴様、一体何者だ？」

「人に名前を聞くときは、自分から名乗るのが礼儀じゃないのか？」

「うるせーー貴様黙つて答えればいいんだ！」

うん、あれだ、黙つていたら答えられないよな。

しかし、いちいち突つ込んでいては話が進まない。ここは素直に答えた方がよさそうだ。

「俺は鷹司統也、魔術師だ」

「貴様の目的は何だ？」

「目的？何のことだ？」

「とほけるなーー」の時期に結界を破つて侵入したんだ、何をするつもりだ！

結界？この時期？何のことだろ？

「あー、ちょっとといいか？話が全く見えないんだが……」

「……貴様、本当に何も知らんのか？ならば質問を変えよつ。貴様はどこから来た？」

「どーからつて……。ちょっと待つてくれ、今思い出す。」

そつ言えば、なんであんなところにいたんだ？その前に何をしていた……？

「……ああああつー」

「あやつ」

可愛い悲鳴に少女の方を見ると、尻餅をついて呆然とこちらを見ていた。どうやらあの悲鳴は彼女のものらしい。しばらく呆然としていた少女だがその顔が羞恥に赤く染まっていく。

「と、突然大声を出すな！」

誤魔化すように大声で叫んでも、過去は消せない。からかってやるうかとも思ったが、流石に大人気無いのでやめておく。

「ああ、すまん。それより、思い出したぞ」

いつの間にか燃え尽きていた煙草の吸殻を携帯灰皿にしまいながら何事もなかつたように受け流すと、少女は先程までと同じ高圧的な態度を装い、続きを促してきた。まだ赤みを帯びている顔でそんな態度をとられても、少しも怖くないのだが。

「あー、そのー」

「いいからせつと話せ

絶対信じないよな、と思いながらも出来る限り真剣な表情を作つて口を開く。

「……俺は、この世界の住人じゃない。」

「……」

「……」

「……ふざけてこるのか？」

「ほらね、やっぱぱぱじてなー。」

「ふざけてなんかいない。事実だ。俺はこの世界とは違う世界から来た。」

「ふ、ふざけるなー世界の枠を飛び越えただと? そんなことが出来る訳が無いだろ?」

「だから事実なんだって。俺だってこんなこと言ひて信じてもしかえるとは思ひてねえよ。」

俺の言葉にて、少女は何かを考えるよつなかぶつを見せず、探るよつな視線を向ける。

「ふん、ならば証拠を見せてみろ」

「証拠?」

「貴様が異世界から来たとこつ証拠を見せろと書ひてこるんだが」

「そんな都合の良い物がある訳ないだろ?」

「……貴様、先ほど魔術師だと言つたな?」

「ああ、それがどうかしたのか?」

少女は、うむ、と頷いた。

「『』の世界では私たちのような存在は『魔法師』と呼ばれる。そして、魔法師の扱う術を魔法と呼ぶ。貴様の言つことが正しければ、魔法と魔術の間には体系的に差異が生じるはず。それを見せりと言つていいのだ」

「つまり、俺が魔術を使えばいいのか？」

「そう言つて『』だらうが

確かに可能性はあるかもしない。魔術と魔法が別物だとするなら、違いがあつて当然。ルーツが同じだったとしても、世界が違う以上全く同一であるはずがない。

立ち上がり、少女に背を向ける。

「リリース・アクセル・イグズイウス」

幻想を結び、神秘を成す。それが魔術。つまり、魔術の本質は自己暗示。すべての答えは『』が内にある。

「焼き矢くせ」

頭上にかざした手の先に直径一十センチほどの火球が出現し、振り下ろされた腕に従い飛翔する。

着弾。

轟音とともに爆風が吹き荒れ木々がざわめく。大量の雪が蒸発したことにより生じた水蒸気が晴れると、着弾した地点には直径一メートルほどの穴が開いていた。

振り返ると、少女が目を丸くして呆然としている。ギギギッ、と音のしそうなぎこちない動作でこちらを見た。

「なつ……」

「な？」

「な、なんだあれはー！」

「うおひ

「うやく喋ったと思つたら胸倉を掴まれた。そのつま容赦なくがくがくと揺さぶつてくる。

「これが貴様の言つ魔術か！ふざけるのもいい加減にしろー。たつたあれだけの詠唱での威力だと？私をバカにしているのかー！」

「ちよ、おい、落ち着けつ……ー」

流石に苦しくなつてきたので頭を叩いてやめさせむ。強く叩き過ぎたのか頭を押さえて蹲つてしまつた。

「ぐ、ぐう……。な、何をするつ……」

目に涙を浮かべて上目遣いで睨みつけるその姿に、途轍もない罪悪感に苛まれ、とりあえず頭を撫でてみた。

大人しく撫でられていた少女だったが、しばらくすると手を放つて立ち上がつた。

「子供扱いするんじゃないー！」

「へいへい、そりや悪かつたな

腕を組みジロリと見ら見つけてくる少女。その様子に知らず笑みがこぼれる。

「ふん、まあいい。とりあえず貴様の言う魔術といつもの魔法とは別ものだということは分かった。それで、貴様は何のためにこの世界へ来たんだ?」

この世界に来た理由、か……。

新しい煙草に火をつけ、その先端から立ち上る紫煙を眺める。

「話したくないなら別にいいがな」

黙り込んだ俺に氣を使つたわけではないだろうが、どうでもいいといわんばかりの口調で言つた。

「でも、いいのか?自分で言つのもなんだが、俺は不審人物だぞ?」

「私をバカにするな。貴様がその氣なら、私はすでに五回は死んでいるはずだろ?演技でない確証はないが、何かするつもりならそんなリスクの高い真似はせん。違うか?」

「確かにそうかもしけないが……」

「これでも人を見る目には自信があつてな。それとも何か?貴様は私に疑われたいのか?」

にやりと笑いながら、ん?、と詰め寄つてくる少女には敵わない。

「分かった、降参だ」

その言葉に勝ち誇ったような笑みを浮かべ、満足そうに頷いた。

「つむ。しかし、この世界の住人でないと、住む場所もないのだろう?」
「つむりだ?」

「まあ、適当に仕事を探して何とかするわ」

「……」

黙り込んだ少女を不審に思い様子を窺うと、何やらぶつぶつと呟いている。そして大きく頷いたかと思えば物凄い速さで顔を上げた。嫌な予感がした。

こちらを見たその目が、獲物を見つけた狼のような、何かを企んでいるときの妹弟子のような光を湛えていたのだから。

「よし、私が仕事を紹介してやるつー。」

「い、いや、そこまで迷惑をかけるわけには……」

身の安全を確保しようとしたものの、

「遠慮するな、私に任せてくれ」

などとこれ以上無い位の嬉しそうな笑顔で言わわれては断れるはずもなく。

「私は『ディアナ・K・ブリュンヒルデ』。偉大なる吸血鬼の真祖だ。ついで来い、鷹司統也」

上機嫌で歩きだすティアナについて行く」としか出来なかつた。

第一話

ディアナに連れられてたどり着いた場所は、レンガ造りの建物だつた。

道すがら聞いた話によると、ここは日本の関東地方にある国内最大級の学園都市であり、『霧生市』といつらしい。幼等部から大学院まであり、生徒の総数は八千人を超える。さらに、国内最大の靈脈が流れ、日本魔法協会の本部も置かれているという。

この建物は中等部の校舎らしいが、とんでもなく広い。普通の学校の三倍はありそうだ。

そんなことを考えていると、目の前を歩いていたディアナが突然立ち止った。

目の前には大きな扉。

その上にあるプレートには『学園長室』の文字。

ディアナは僅かの躊躇もなくその扉を開き、中へと入つていく。

「爺、面白い奴を連れて來たぞ」

おい、学園長を爺呼ばわりかよ……。いや、ディアナは四百年以上生きているつて言つし、いいのか？

ディアナに続いて扉をくぐると、かすかな違和感を覚えた。

それを無視して視線を巡らすと、重厚なデスクの向こうに目が細く、豊かな白髪を蓄えた、禿頭の小柄な老人の姿があつた。穏やかな微笑を湛え、好々爺然とした雰囲気を漂わせながらも、その根底には確固たる強い意志の光が見える。

ディアナの説明を聞くその様子にかつての師匠の姿が重なつた。

「おいつ、聞いているのか！」

ディアナの大声で我に返ると、一人の視線が俺に集中していた。デ

イアナの不機嫌そつた様子から察するに、何度も俺を呼んでいたらしい。

「ああ、悪い悪い。」

目の前にあつたディアナの頭を撫でる。

「ひ、子供扱にするなと言つてこりがつがー。」

「あ、悪い、つゝ癖でな」

「どんな癖だー。」

「まつほつほつ、お主が鷹司統也か。『ディアナにそんなことをするなど命知らずじやな。恐ろしくてわしこそとても出来んわい。わしは円森孝造じや、』の学園の学園長をしておる。」

穏やかに笑いながら言つ老人に氣勢を削がれたのか、ディアナはそつぽを向いて黙り込んでしまった。

「お主もわかつておるとは思うが、今のお主の存在は非常に怪しいものじや。ディアナは心配はいらんと言つておるし、それを疑うわけでもないんじやが、万が一とこりともあるからのう。いくつか質問をさせてもらつや?」

当然の処置だらう。

学園長といふことは、この学園都市の最高責任者だということ。

突然現れた素性のわからない男を放置しておくわけにもいかないだらう。

「構いませんよ。自分が不審人物だといつては理解しますから」

「つむ。では最初に聞くが、お主が異世界の人間であるところ証拠は？」

「そんなものある訳がないでしょう。この世界のことも知らないのに、どうやって証明しようとこうんですか？」

「では、君の世界について、話してはくれんか？」

探るような視線に晒されながら、俺の世界の歴史や、魔術の位置付け、その体系などを話す。しばらく黙っていた学園長だったが、姿勢をただすと深々と頭を下げた。

「疑つよつな真似をしてすまなかつたの。お主の言葉に嘘はないよつじや」

そこで最初に感じた違和感の正体に気付いた。

「虚言探知、か……」

「その通りじゃ。それにしても、よく分かったの。いつから気付いておつた？」

「これから違和感はあつましたけど、気付いたのは今ですよ

「して、ティアナよ、わしにどうぞ」と、学園長は流口じゅうのじゅうへ

「して、ティアナよ、わしにどうぞ」と、学園長は流口じゅうのじゅうへ

「ふざけた奴だが、実力は確かだ。広域監査員としてでも雇つてやれ」

「確かに実力はあるよ」ひじゅし……よからひ、手続きませいかひでしておぐが、構わんかの？」

何やら俺の知らないところで話が進んでしまつてこるようだ。とはいえ、内容もわからないような仕事をするのは流石に遠慮したい。

「広域監査員？」

「分かりやすく言えば警備員のようなものじや。生徒同士の喧嘩の仲裁が主な仕事じやが、それはあくまで表向きのものでな。お主も知つての通り、此処の地下には大規模な靈脈がある。それを狙つて現れる魔物の類を迎撃することが本来の目的じやな。」

まあ、向こうでも似たようなことをやつていたわけだし、別にいいか。

「分かりました。そちらがよろしければお願ひします」

「では、明日もう一度来なさい。その時に正式に契約するからの。それから、念のためにしばりへ監視をつけることになると思つが、構わんじゅう？」

「妥当な判断ですね」

「では、ディアナ、頼んだぞ。統也君、しばりへはティアナの家に住むといい

学園長が言つたが早いか、ディアナは踵を返して理事長室を後にした。色々言いたいことはあつたが、仕方なくディアナの後を追おうと振り返つたところで、理事長に呼び止められた。

「ディアナはああ見えて寂しがり屋じや。なにせ、人生の殆どを一人で生きてきたからなのつ。良ければ、話し相手になつてやつてくれんか？」

その言葉に頷くことで答え、ディアナの後を追つた。

ディアナと合流し、ディアナの家へと向かう。時刻は午後四時を回つており、辺りは徐々に暗くなつてきていたが、広々とした道の両側には沢山の店が並び、人通りも多い。俺の暮らしてきた街は、どこもこの時間には閑散としていたから、この雰囲気は新鮮だ。あたりを見回しながら歩いていると、不意にディアナと目が合つた。

「そんなに珍しいのか？」

ディアナにとつてはこの風景が日常の一部なのだろう、不思議そうに聞いて来る。

取り出した煙草に火をつけてから答える。

「ああ。俺は向こうじゃいろいろと訳ありでな、こんな賑やかな街に居た記憶がほとんど無いんだ。」

ディアナは、そうか、と呟いて黙り込む。

悲しげに揺れる碧眼は何を見ているのだろうか。

もしかしたら、ディアナにも似たようなことがあつたのかもしれない

い。

向こうの世界でも、吸血鬼は存在そのものが認められていない。教会に見つかれば問答無用で殲滅されるのだ。

こちらの世界でも似たようなものだろう。見つかつたら最後、生き残るためにには戦わなければならぬ。そんな生活を続けてきたのだとしたら……。

「考えるだけ無駄か……」

「ん? 何か言つたか?」

「いや、なんでもない」

いくら考へても答えが出ることのない問題を思考の外に追いやる。考えるのをやめると空腹を感じた。目覚めたのがこちらへ来てすぐだとしてもぼぼ丸一田何も食べていない。

「なあ、ディアナ」

「なんだ?」

「お前、飯とかどうしてるんだ?」

「食べるに決まっているだの!」

お前はバカか、と言わんばかりにため息をつくディアナに、バカはお前だ、と言いたくなるのを堪える。

「いや、そうじゃなくてな、自分で作ったりするのか?」

自分の勘違いに気付いたティアナの顔が羞恥に赤く染まる。

「そ、そんな訳ないだろ？ なぜ私がそんなことをせねばならんのだ！」

あまりの豹変ぶりに思わず苦笑すると、睨まれた。

ティアナの頭をわしゃわしゃと撫でながら考える。ティアナが妹弟子と同じくらいの見た目だからだろ？ か、なんとなく放つておけない。

まあ、そんなことばっかりでもいい。

「よし、じゃあ、今日は俺が作ろう」

俺の手を払いのけようと睨っていたティアナを見ると、呆気こじられたような顔をして固まっている。

周りを見回すと、ちょうどいいところにスーパーを見つけた。

俺の腕を掴んだままになっていたティアナの手を掴んでスーパーへと向かう。

落ち着かない様子のティアナを引き連れて買い物を済ませた後たどり着いたのは、意外なことに元々でもあるようなごく普通の一軒家だった。

鷹司統也。

黒の長髪に黒の瞳、黒い長袖のシャツに黒のパンツ、黒い外套を纏つた黒一色の男。

年の頃は二十前後だらうか、見よひによつては高校生くらこにも見える。

長身瘦躯、眉田秀麗、男にしては珍しい長髪と、一度見れば記憶に強く残るだらう。

魔術師を自称し、両手首にかなり高度なアーティファクトと思われる革のリストバンドをつけている。

異世界の住人であると主張し、今現在私の目の前に緊張の面持ちで座る不審人物。

更に付け加えるなら、やけに料理が上手い。

「どうした？ ひょっとして口に合わなかつたか？」

黙り込んだ私に不安を感じたのか、オロオロし始めた。

それは私に対するあてつけか？

とてもではないが、私にはこんなに美味しい料理は作れん。

「まあまあだな」

そう答えてやると、心底安心したような笑みを見せる。わからない。

この男は相当過酷な生活を送つてきたのだらう。森での一件がそれを証明している。

あの時私が叩きつけた殺氣は、そじらの奴ならまともに動くことも出来なくなるレベルのものだ。

にもかかわらず、この男は咄嗟に飛び退つてこちらの攻撃をかわし、あまつさえ逆に奇襲を仕掛けってきた。

その上、最後の一撃の時、攻撃を受ける直前まで全く気付けなかった。

殺氣すらも、だ。

それに、過去に触れるような話題が出た時の反応も気になる。懐かしむような遠い目をするのだ。寂しそうな、自嘲するような微笑を浮かべて。

これだけの情報があつて気付かない方がおかしい。

まあ、気にする必要はないのかもしれない。こいつは異世界の住人だ。この世界へ来た以上過去のしがらみなどどうでもいいことだらう。

そこまで考えて気が付いた。私はなぜこんなことを考えていたのだろうか？

「ティアナ？ どうかしたのか？」

どうやら考え込んでしまつていたらしい。

「いや、なんでもない。それより、お前の使つ魔術とはどういったものなんだ？」

そう尋ねると、腕を組み、天井を見上げた。

「うーん、そうだな。簡単にいえば自己暗示だな」

「まつ

「自分の持つ魔力を練り上げて、指向性を持たせて打ち出す。その時に属性が生じる。上級魔術師になると相反する概念を無理やりね

じ込むなんてことが出来る奴もいる」「

ふむ、なるほどな。道理で魔法に比べて詠唱が短いわけだ。魔術における詠唱は、自「」改変の為のトリガー、といったところか。

「やつ言えば、さつき詠唱がどうのとか言つてたよな?」

「うむ。こちらの魔法はそちらの魔術とは根本的に違う。魔法は詠唱によつて世界に呼び掛け、精霊の類の力を借りることによつて神秘を成す。答えを自らの内に求めるか、世界に求めるか、という違いだな」

「なるほど、そうなると戦闘時には魔術の方が使い勝手は良さそうだな……」「

「それだ!」

あの程度の詠唱であれだけの威力があるのなら、戦闘時、特に近接戦闘においては大きなアドバンテージになるではないか。

「統也つ、私に魔術を教えろ!」

テーブルに身を乗り出し詰め寄ると、統也は気まずそうに視線をそらした。

「あー、悪いんだが、それは無理だ

「なぜだつ?」

「俺は、ほとんど魔術が使えない……」

は？

今こいつは何と言った？

魔術が使えない？

魔術師ではなかつたのか？

「ビリビリ」とだ？

低い声で齧すよつて言つて、統也は冷や汗をかきながらのけぞつた。

「ビ、ビリヤ、俺には魔術の素質が無いみたいでさ。使えるのは身体強化といくつかの攻勢魔術だけなんだ。は、はははは……」

顔を引き攣りせながら乾いた笑い声を上げる統也に、がつくりと肩を落とす。

「その、すまん……」

申し訳なさそうに謝られて、柄にもなく罪悪感に駆られた。
一つ息をついて心を落ち着かせる。

統也の方を見ると、私が呆れているとでも思つてゐるのか、情けない顔で視線を床に落としていた。

「まあ、初めからあまりあてにしてない。第一体系から違つのだ。
魔法に慣れている私に魔術が使えるとも思えん」

それに今までも私は強いからな。と付け加えると、統也は苦笑した。

「しかし、勿体無いな」

そつ呴くと、統也は「何がだ？」と言わんばかりに首をかしげた。

「お前のその魔力だ。見たところ、並みの魔法師よりも遥かに強い魔力を持っているようだが、魔術が使えんとなると宝の持ち腐れもいいところだな」

そこでいふことを思いついた。

おそらく今の私は獲物を見つけた狼のような笑みを浮かべているに違いない。

統也のひきつった顔を見れば一目瞭然だ。

「よし、統也、お前に魔法を教えてやろう」

嫌がる統也を戒めの魔法で拘束し、地下室へと向かつ。
誰かに魔法を教えるの初めてのことだ。
さて、まずは何からこいつか……。

「そつ 僕の魔力がどつとかいつてたけど、僕の魔力ってそんなに強いのか？」

ディアナに無理やり連れてこられた地下室。

何か準備するものもあるのか、魔具やら魔術書らしき物が雑多に詰め込まれた棚を引っ掻き回しているディアナの背中に問いかける。
「つむ。そうだな、お前の世界ではどつだつたか知らんが、こちらでは魔力の保有量でランクが付けられている」

ランクはSからEまでの六段階で表される。

「細かい説明は省くが、Aランク以上、つまり、魔力総量五千以上の者を上級魔法師と呼ぶ。その数は全魔法師の一割程度、この学園では私と健吾、それに爺くらいのものだな。それに対してお前の魔力は……」

棚から魔具らしき物を取り出したディアナは、振り返つてそれを俺に向けた。

しばらくして「ピッ」と音がすると、ディアナはそれを覗き込む。

「……八千弱、といったところか。魔力保有量に限つて言えば、お前はこの世界ではなかなかの力を持っているといえるな」

「ディアナの魔力はどうくらいなんだ？」

「私が？私は、そうだな……四万弱、位だろ？」「

「よ、四万……」

「ふん、私は吸血鬼の真祖だぞ？人間と一緒にするな

ディアナは用済みだと言わんばかりに魔具を放り捨て、別の物を引つ張り出した。

見ると、その中には中央に周囲を海に囲まれた宮殿のような物の模型が入つてあり、その上を半透明のドーム状の物が覆つている。ディアナそれを部屋の隅に置かれていたテーブルの上に置くと、手招きをした。

「こいつに手を置いて目を閉じろ」

言わされた通りにすると、ドームの上に置いた右手が引っ張られるような感覚を覚えた。

「力に逆らひつな、身を委ねる」

その言葉を信じて体から力を抜く。

すると、地下の停滞していたはずの空氣が流れるのを感じた。

「もう眼を開けてもいいぞ」

ビロが楽しげな、悪戯の成功を目前にして喜びを隠しきれない子供のような声に、何があつても驚かないと子供じみた決意をして目を開く。

「なつ」

抜けるような青い空、時代錯誤な巨大な宮殿、振り返れば広大な石畳の広場、その向こうには彼方まで続く海。

「ビロだ？」

その声に隣を見ると、腕を組み、ビロだとばかりに胸を張るティアナがいた。

「お、おい、ティアナ？」「は、ビロだ？」

「一種の結界だ。あのアーティファクトを見ただろう？　の中だ」

なんて出鱈田。

「ここの中での一日が外の一時間に相当する。長い間使つていなかつたから、若干不安はあつたが、大丈夫そうだな」

「ここにきて改めて魔術と魔法の違いを思い知つた。
魔術でこんな理不尽なことはできない。」

「おい、いつまでそんな所にいるつもりだ？」

呆然と辺りを見回していると、ディアナの呆れたよつた声が聞こえた。

すでに宮殿の入り口付近にいるティアナに慌てて近づくと、ディアナはそう言えど、と口を開いた。

「統也、お前の戦闘スタイルはどんなものだ？」

「そうだな……さつきも言つたように使える魔術が少ないから、森でティアナと戦つたときみたいな形だな」

「つまり、魔法剣士タイプ、といつことか……」

「魔法剣士タイプ？」

「ああ。魔法師は大きく二つのタイプに分類できる。それが魔法使いタイプと魔法剣士タイプだ。前者は従者に前衛を任せ、自身は後方で詠唱に専念する。それに対して、後者は自身も前線で戦いながら詠唱を行う」

「ああ、そうこうとか」

確かに向ひつでもそつまつのはあつたな。

「向ひのじゅ、単純に前衛、後衛としか言わなかつたけど。

「魔法剣士タイプといふことは、何か得物があるのか？それともあの時のように徒手空拳か？」

「向ひのじゅはすつと日本刀を使ってたな」

「日本刀、か……用意しておかなければならぬか……」

「いや、たぶん必要ないと思ひや？」

「どうこひことだ？」

不思議そうに首をひねるティアナから少し距離をとる。
右手を左手首に添え、意識を集中する。
目を閉じてイメージするのは鍔のない、抜き身の刀。

「玉兎」

左手首にほのかな熱を感じ目を開く。

右手を握り込むと確かな感触。

そのまま右へ振りぬくと、鍔のない、白木造りの日本刀が握られていた。

「ほつ」

感心したようなティアナの声を聞きながら軽く数回振つてみる。
違和感はない。

「かなり高度なアーティファクトだと思っていたが、そういうこと

か。ところどころは、右手首のものも同じか？」

ディアナの問いに首を横に振つて答える。

「これはちょっと違うんだ」

右手首のリストバンドを左手で軽く握りながら空を見上げる。

「これは、俺の父さんの形見なんだ。顔も覚えてないけど、初めてこれをつけてくれたときのこととは覚えてる」

視線を下してディアナを見ると、難しい顔をしてこちらを見ていた。どことなく気まずそうに佇むその姿に苦笑する。

「そんな顔するなって。案外まだどつかで生きてるかもしないしそれに……」

「それに？」

「……俺があの人の子供だつてことは変わらないしさ」

じつと俺の顔を見ていたディアナは、ふんとばかりに顔をそらした。

「楽天的だな」

ちらちらとこちらを窺いながら憎まれ口を叩いても、一いちじりとしては苦笑するしかない。

「ああ、俺は楽天的なんだよ」

ディアナは付き合こきれん、と呟いて肩を落とした。

「まあいい。やつやつと始めるぞ。」

そう言い残して宮殿の中へと消えていくディアナの後を追う。右手に提げた玉兔が幻想の陽光を浴びて輝いていた。

本当にJRの駅は出鱈田だ。

目の前で中級魔法『魔弾の射手』を繰り返し撃ち出す統也を見ながら嘆息する。

ようになるとは思わなかつた。

ある程度予想していたとはいえ、どんな男を弟子にしたものだ。

「ケケケ、樂シソウジャネエか、ゴ主人」

傍らに置かれた人形の言葉にはうとする。

どうやら、知らず笑みが浮かんでいたらしい。

「うるせーぞヴァル。……お前から見て、あいつはどうだ？」

「ナンダ御主人、珍シイジヤネエ力。俺ノ意見ヲ訊クナントヨ。モマア、ソコラノ雑魚トハ違ウンジヤネエ力?」

ケケケ、と耳障りな笑い声を上げるヴァルを無視して改めて統也を見る。

「確かにな」

こうしている間にも統也の放つ魔弾の威力は上がってきているし、発動までのタイムラグもほぼ無くなっている。

このままの調子でいけば、防衛戦までにはそれなりの形になるだろう。

もともと、戦闘能力は高いのだ。今までも中の上程度の力はある。

『常闇の吸血姫』^{ダーク・ブリュンヒルト}の名に懸けて、一流の魔法師にしてやう。

「統也、その辺にしておけ。そろそろ休んだ方がいい

「いや、まだいける」

「バカ者、それ以上やつてもたいした意味など無い。時間の無駄だ」

それを聞いて不服そうな顔で戻ってくる。

こいつはこちらが黙つていれば、一日中でもやつていたのだろう。熱心なのはいいことだが、こいつの場合は行き過ぎているような気がする。

「ケケケ、ヤケニ熱心ジャネエカ、侍」

ヴァルが喋るのを聞いても別段驚いた様子はない。それどころか、興味深そうに観察している。

「ディアナ、お前、人形遣いだったのか？」

「驚かんのだな」

「まあな、こんな出鱈田な空間があるへりいだ、もつひとつやらつとのことじや驚かないさ」

「出鱈田ツテイウナラ、侍ノ方ダト思ウガナ」

「そうか？」

「ソウダゼ。マア、ヨロシクナ、侍」

「ああ、よろしくな。とこるでティアナ、こいつの名前は？」

「ヴァルだ。それにしてもお前ら、軽すぎるだひつ」

「どうか？」と首をひねる統也とヴァルにがつくりと肩を下す。

「もういい、好きにしろ」

顔を見合わせる一人と一体を置いて歩き出す。

後ろから聞こえる話し声に無性に腹が立つて魔弾を打ち込んでやつた。

突然の一撃に慌てるバカ者たちに、口元がほこりぶ。

なぜだか知らないが気分がいい。それを、突然目の前に現れた不思議な異邦人のせいにして、歩を進めた。

第四話

「ひかりの世界へやつてきた翌日（体感的には3日目だが）、学園長に会うために学園長室へとやつてきた。

隣にはディアナ、そして頭上にはなぜかヴァルがいる。

ディアナの結界空間『樂園』^{アワロン}内で会つたばかりだが、びっくり俺はヴァルに気に入られてしまつたらしい。

ディアナ曰く「こいつが人間を気に入るのは初めて」らしい。素直に喜べないのが正直なところなのだが。

「爺、入るぞ」

昨日と同様、尊大な態度で扉を押しあけたディアナに続いて扉をくぐる。

「おお、待つておつたぞ。では早速始めようかの」
学園長は俺たちに気がつくと数枚の書類を持つて応接用のテーブルへと移動する。

その途中、俺の頭上にいるヴァルに気付き声をかけた。

「おや、珍しい物がついてきたのう。元気にしておつたか？」

「ウルセーヴ、爺。サッサトシヤガレ」

「残念じゃのう、久しぶりに一献どうかと思つたんじやが

「日本酒力？」

「もちろんじやとも。わしの秘蔵の酒じや」

「ケケケ、話ガ分カルジャネエカ」

その会話に、ディアナは「だから連れてきたくなかったんだ」と肩を落とす。

「おこ、爺。やつやとしろ」

ディアナの言葉に学園長は、仕方がないのう、と呟いてソファに腰を下ります。

そのままに座ると、書類が差しだされた。

必要事項は記入済みとなっていてあとは署名するだけの状態だったが、一応すべての書類に印を通す。問題がないことを確認してから署名すると、学園長は満足げに頷き、数枚のカードを取り出した。

「これば?」

「身分証明書とクレジットカード、その他もろもろ必要になるものじゃ。とりあえず口座には百万ほど入れてある。必要なものはそれでそろえて置いとくれ」

「ずいぶん羽振りがいいじゃないか」

「何、統也君に逃げられるのは敵わんしのう。そくならんためにも誠意を見せとおぐべやじやうひつ」

ほつほつほつ、と笑つ学園長が苦笑する。

「では、ありがたく頂いておきまく」

「よひし。しかし、君は不思議じゃな

「なにがですか？」

「まだ若いというのに、四百年以上を生きる大吸血鬼『常闇の吸血姫』に対してもなく、動きの一つ一つに隙がない。差し支えなければ話を聞かせてくれんかのう？」

「爺つ、何を言つて、……と、統也？」

学園長に食つて掛かる『ディアナ』を押しとどめ、困惑気味に俺を見るディアナの目を見つめる。

「いいんだ。流石に何も話さないわけにはいかないからな

それに、と続けると、ディアナは不思議そうに首をかしげた。

「ディアナには知つておいてもらいたい

そう言って笑うと、ディアナは頬を染めてそっぽを向いた。ディアナの反応に首をひねつて頭上にいた『ヴァル』が騒ぎ始めた。

「ケケケケケ。オイ、御主人、ナニ照レティヤガルンダ」

「う、うるさい」

ディアナは『ヴァル』を掴むと一切の容赦なく、その小さな体を床に叩き付けた。

「イテ ジャネエ力」

「おじ統也つ、こんな奴は放つておじて、さつさと始めるぞつ」

抗議の声を上げるヴァルを無視して詰め寄るティアナに「分かつた、分かつた」と言って、目を閉じる。

俺の中にある最古の記憶を引っ張り出す。

一度は記憶の奥底に封じ込めた、忌まわしき日々。そのすべてを一切合財、嘘偽りなく曝け出すために。

最初の記憶は、とても温かなものだつた。

母さんはいなかつたし、父さんの顔を思い出すことも出来ないけれど、それでも『家族』の温かみを感じることができた。

俺にとって父さんは英雄だつた。

強くて、優しくて、たまに怒るととてもなく怖かつたけど、それでも俺を叱る言葉の端々に愛情を感じることができた。

そんな平穏な生活の終わりは唐突にやつてきた。

俺が四歳になつたばかりの冬の夜、俺たちの住んでいた家に、漆黒のロープをまとつた男たちが突入してきたのだ。

父さんは呆然とする俺を抱えて家を飛び出した。

走つて、走つて、走り続けて、追つ手を振り切つた時には父さんはボロボロになつていた。

森の中に逃げ込み追手がいないかあたりを見回した後、父さんはとこうじこう破れたコートのポケットから革製の腕輪を取り出すと、それを俺の右手首にあてがい何かを呴いた。

すると腕輪は俺の手首に巻きつき、外れなくなつた。

「統也、これを外してはいけないよ?」これが君を守つてくれる。も

う少ししたら父さんの友達が来るから、それまでじでじつとしていなさい」

父さんはそう言い残して、来た道を引き返して行つた。

俺は父さんの言いつけを守つてその場でずっと隠れていた。

暗くて、寒くて、すごく怖かつた。たまに風が吹いて周りに生えていた木の葉っぱがざわめくと、悲鳴を上げてしまいそうになるのを必死に押し殺して。

どのくらいそうしていたのか分からぬけど、不意に見上げた空に、いつも父さんのそばにいた使い魔の鳥が飛ぶのが見えた。

そのすぐ後に一人の男の人が来て、「もう大丈夫」と言つてくれた。

俺は声を上げて泣いた。

なぜか分からぬけど、もう父さんに逢えない気がした。

その人は父さんの友達で、父さんの使い魔に導かれて来てくれたらしい。

それが俺と師匠の出会いだつた。

それから俺は師匠の下で魔術を学ぶよつになつた。

師匠は最初、それに反対した。理由は俺には素質が全くと言つていほどのなかつたから。

それでも俺は師匠に頼み込んで、ようやく師匠も納得してくれた。幸い魔力は十分にあつたから、身体強化の魔術さえ覚えてしまえば何とかなつた。

自分の体を強化し、接近戦で戦う今のスタイルはこのじろには確立していた。

師匠のつてで、格闘技や剣術を習い、初めて魔術師としての仕事に出たのは一四の時。すべての始まりから十年の月日が経つていた。初仕事は師匠についての吸血鬼退治。ある山間の寒村が一体の吸血鬼によつて死都になつた、ということだつた。

俺はこの日のために師匠からもつた日本刀を携え、師匠の後を追

つて目的の村へとたどり着いた。

そこにいたのは、もとは村人だったであろう大勢の亡者。師匠と一緒にでそれらを薙ぎ払いながら進んで行った先で、まだ血を吸われていない双子の少女を見つけた。

師匠の制止を振り切つて彼女たちを救おうとした俺は、多数の亡者に囲まれ孤立してしまった。俺は一人を背後にかばい、剣を振るつた。

必死だつた。生きるために、何より背後で震えている一人を守るために。ただがむしゃらに迫りくる亡者の群れを斬り伏せた。

何度も亡者の攻撃を食らい、それでも戦い続けていた俺は体力も集中力も限界だつた。

気付いた時には双子の片方の首に、討ち漏らした亡者が噛み付いていた。

首に噛み付いた亡者を斬り伏せた時には、すでに手遅れだつた。

理性の光の殆ど消えた少女は、ふらふらと立ちあがつて俺に近付いてきた。

「コロシ……テ……。ハヤ…ク。この子を…殺して…しま…つ前に…」

「…」

わずかに残つた理性でそういう彼女を、俺は斬つた。俺はその時初めて、人を、殺した。

俺の意識はそこで途切れた。

次に目を覚ましたのは翌日の夜。傍らには一人の少女がいた。

俺の眠つていたベッド傍に椅子を置き、そこに座つてベッドの上に突つ伏して眠つている少女は、あの村で出会つた少女だつた。

彼女が生きていたことに安堵して、すぐに自分が彼女の姉か妹を斬つたことを思い出した。

彼女は何のためにここにいるのだろうか。俺を責めるため?それと

も姉妹の仇を討つため？そんなことを考えていると少女が目を覚ました。

俺の顔をボーッと見る彼女の澄んだ紺碧の瞳を見返すことができず、俺は目を逸らした。

直後、胸に軽い衝撃を感じた。見ると柔らかな金髪。

「ミコアは、笑つて、いました。とても、穏やかに。……つぐ。だ、だから、貴方も、笑つて、笑つてください。あなたが、苦しんでいたら、ミコアは、悲しみます。……つぐ。だから」

俺の胸に顔を押し付けて、声を押し殺して泣く少女に救われた。

「君、名前は？」

「……アリア」

顔を上げて答えた少女は目を赤く腫らしながらも、しつかりとした口調だった。

「アリア、君は、俺が守る。」

その日から、俺と師匠の一人きりの生活に、アリアという新たな家族が加わった。

俺はより一層魔術、体術の訓練に力を注いだ。守ると決めた命が一度と、この手から零れ落ちることが無いように。

それからは多くの仕事をこなし、大きな仕事をも単独でいくつかこなした。

かなり無茶もしたし、死にかけたことは一度や一度じゃない。

それでも、わずかでも救える命がある限り、俺は戦い続けた。

救つた命に感謝されることは稀だつた。多くの場合、化け物と罵られ迫害された。

ともに戦つた魔術師に裏切られて死にかけたことも、数えきれない程あつた。

それでもよかつた。それは、守れた命があつたということだから。笑つていたから。家族や友人、恋人の生存を喜ぶ人たちがいたから。笑つていたから。家族や友人、恋人の生存を喜ぶ人たちがいたから。魔術師鷹司統也の名もそれなりに有名になり、同業者から『銀門』の一いつ名で呼ばれるようになつたころ、俺の下にある依頼が舞い込んできた。俺が十九の頃だ。

魔術師として難易度^{ターゲット}としてはそれほど高くはないものだつた。

内容はある魔術師の捕縛。数名の魔術師を制圧し、標的^{ターゲット}を確保する。標的^{ターゲット}が拠点としている一軒家に侵入し、邪魔者を死なない程度に痛めつけ、最深部へと向かう。そしてそこにいたのは、漆黒のローブをまとつた男。その手に握られていたのは、父さんがいつも持ち歩いていた白木造りの一振りの日本刀。

ああ、そうか……。こいつが、父さんを…… したのか。

気付くとすべてが終わつていた。

足元には虫の息の標的^{ターゲット}。

依頼主に連絡を入れ、落ちていた抜き身の刀を拾つてその場を後にした。

家に着くと、俺の姿を見たアリアが師匠を呼び、師匠は俺の持つていた日本刀を見て息をのんだ。

そのあと師匠から、父さんを襲つた連中のことを聞かされた。父さんが教会に狙われていたこと。あの日俺たちを襲つたのは、教会の実働部隊だつたこと。父さんの子供である俺も同様に狙われていたこと。

そして、今回の一件で、連中に俺の正体がばれたかもしれないといふこと。

その日からの師匠の行動は早かつた。

父さんと共同で行っていたといつ研究の成果を組み合わせ、ある術式を作り出した。

それが世界の枠を越えるという、前代未聞の大魔術だった。

「そして俺は、この世界にやってしまった」

そう聞いて口を開き、懐かしむような笑みを浮かべる統也に声をかけることが出来なかつた。

こう言つては何だが、この世界にかかる以上、そういうことがつても何ら不思議はない。

それでもこの男は異質だつた。それほどの経験をしてながら、後悔することも、自責の念に囚われることもなく、笑つてなんでもなことのよがり言つて。

「なるほど、やつこいつじやつたのか」

爺の言葉に、意識を思考の海から引き揚げると、統也が照れくわやうに頬を搔いていた。

「まあ、それほど珍しい話じやありませんけどね」

「やつこいつでない、確かによくある話じやが、かとこつて監が監がんな経験をしてくるわけでもあるまじこ」

爺と話す統也の顔を見ていると、それに気付いた統也が声をかけてきた。

「ティアナ、どうかしたのか？」

「ふん、なんでもない。ほら、ちゃんと行くべや。昨日の続きだ」

「あ、おい、待てよ」

立ち上がり歩きだした私に慌ててついて来る統也を見ながら嘆息する。

「どうやら、この男は相当歪んでいるらしい。それとも、ただの変人か。

隣を歩く統也を見上げる。

銜え煙草でヴァアルとじやれているその姿からは、なにも窺い知ることはできない。

視線を前に戻すと、見慣れた一軒家が見えてきた。どうやら、いつの間にか家のすぐ近くまで来ていたらしい。

玄関を開け中に入り、リビングのソファの上に身を投げ出す。ヴァアルを頭の上から降ろし、てきぱきと紅茶の準備をする統也を眺める。

「オイ、御主人。コノ後ハドウスルツモリダ?」

「適当に魔法書でも『えでやれば、あとは自分で何とかするんじやないか?』

「ナンダ、エラク投ゲ遣リジャネエカ」

怪訝そうに聞いて来るヴァアルを無視して、統也を呼ぶ。

「どうした?」

「私はやることがある。修業は自分でやれ、地下室にある魔法書を好きに使っていいぞ」

「そつか、分かつた」

ありがとな、と言つて地下へ降りていく統也を見送つて、統也の入られた紅茶を口に含む。

美味い。

こんなに美味しい紅茶を飲んだのは何年振りだろうか。
思い返してみれば、最後に誰かと一緒に暮らしたのはもう一十年近くも前のことになる。

そう言えど、あの男はどうしているだろうか。

どこからともなくふらりと現れ、この私を完膚無きまでに叩きのめした若輩者の吸血鬼。

たかだか百年ほどしか生きていらないにもかかわらず、私のことをガキと呼んだ銀髪灼眼の無礼者。

そう言えど、あの男はどこか統也に似てこよくな気がする。

髪の色も田の色も、世界さえも違うといふのに、愚かなまでに樂天的で、そのくせ瞳に強い意志の光を宿しているところなどそつくりではないか。

「何ニヤニヤシテンド、御主人。氣持チワリイゾ」

無意識に口元が綻んでいたらしい。統也が来てからこいつことが多すぎる。

時計を見ると、統也が地下へ行つてからすでに一時間近くが経過していた。

「ヴァル、統也はどうした?」

「知ラネエゾ? マダ戻ツテネニミテエダナ。張リ切リ過ギテ、ブツ倒レテンジヤネエカ?」

「なんだと?」

ケケケ、と笑うヴァルを無視してソファから立ち上がり、地下室へと走る。

『樂園』内に入ると、広場の中心付近で倒れている統也を見つけた。駆け寄つて様子を見ると、苦悶の表情で荒い息をついている。明らかに魔力の使い過ぎだ。

統也の魔力はおよそ八千。中級魔法程度ならば、よほど乱発しない限りそう簡単に死きるものではない。いつたいどれほど無茶をしたというのか。

「バ力者がつ」

魔力で体を強化して統也の体を担ぎあげると、体温が尋常ではなかつた。

熱すぎる。

ゲートを通して『樂園』から出る。そのままリビングまで駆け上がり統也の体をソファへと横たえた。

「オイ御主人、ドウシタンダ?」

「うるさいつ」

魔力は魔法師にとって生命力と同義であり、魔力が尽きた者に魔力を供給してやらなければ死ぬことになる。

魔力を供給するには、魔力を多く含む血液を飲ませるか、ラインを繋ぐしかない。

後者を行うには圧倒的に時間が足りない。かといって、吸血鬼である自分の血を飲ませれば、統也が吸血鬼化してしまう。どうすればいい。

何が四百年を生きる大吸血鬼だ、何が『常闇の吸血姫』だ。弟子の

ダーク・ブリュンヒルド

一人も救えずに、何を自惚れていたんだ私はつ。

「御主人。オイ、御主人、聞イテンノカ?」

「黙れヴァルつ。うるさいと言つてゐるだろつ!」

「落チツケヨ御主人。ラシクネエゾ」

「つ……。そうだな……」

確かに少々取り乱し過ぎたか。

統也を見ると、幾分落ち着きを取り戻していた。

魔力の回復が早すぎる気はしたが、とりあえず危険は去つたようだ。まだ息は荒いものの、表情が和らいでいるから心配はいらないだろう。

とはい、このままにしておくわけにもいかない。大量の発汗に、シャツが濡れて肌に張り付いている。このままでは風邪をひくことになるだろう。

体をふいて服を着替えさせようとシャツのボタンをはずして絶句した。

はだけたシャツの下から覗く引き締まった身体。

そこに残る無数の傷。

縦横に走る刀疵。いたるところに見える銃創。引き攣れている火傷の痕。何かに貫かれたような刺傷。

傷のないところを探す方が難しい位に刻まれ、一つの傷の上にもう一つの別の傷が重なつているようなところがいくつもある。

袖を捲くつてみると、手首より上は上半身と同じようになつていて、足の方も同様だろう。

背後から攻撃されたのか、完全に貫通している傷跡もあつた。

顔や手首から下には傷が見当たらないことから、傷を消す術はあつ

たのだろう。特に顔の傷は人込みの中でも目立つ。それはつまり、敵対する者に素性を知られる恐れがあるということだ。

ということは、服の下に隠された傷跡は、統也があえて消さなかつたものなのだろう。

「そういうことか……」

同時に頭に直接流れ込んでくる映像。
目の前で失われる命。すべてが終わつた後、自らの無力を嘆き絶叫する統也。

裏切り、背後から凶刃を振り下ろす背中を預けた仲間。自嘲の笑みでそれを受け入れる統也。

理解出来ない力を恐れ、化け物と罵倒する者たち。それを甘んじて受け入れる統也。

そのたびに体に、心に傷を負いながら、笑つてそれを受け入れて。弱音を吐くことも、誰かを恨むことさえなく。ただ、誰かのために。これは刻印なのだ。統也が傷つけ奪つた命を、統也が守り切れなかつた命を背負い、自身を戒めるための。

同時に、守ると決めた命を、全てを賭けて守り抜くという誓いでもあるのだろう。

だからあの時、過去を語つた統也は笑みを浮かべたのだ。
世界を越えてなお、統也はすべてを背負つて生きることをやめない。すべてを背負つて、その上でさらに戦い続けるつもりなのだ。
だからこそ、魔力が死せるほど修行に明け暮れたのだろう。

「まったく、お前は大バカ者だ」

本当に救いようがない。

誰かを守るために戦い、そのために全身に数えきれない傷を負い。助けた相手に迫害され、背中を預けた仲間に貫かれ。

それでも誰かのために、決して砕けることなく。自分のことなど顧みず。

まるで子供がそのまま大きくなつたかのように、どこまでも純粋で。これ以上無く歪んでいながら、誰よりも真つ直ぐで。そんな矛盾を抱えながら、ただ前だけを見据えて戦い続ける。

「本当に、大バカだ」

呼吸も落ち着き、穏やかな寝息を立てる統也の髪を梳ぐ。時間を確認しようと視線を巡らすと、無言のままにちらを見つめるヴァルと田が合つた。

「ヴァル？」

「御主人、ソンナ顔モ出来タンダナ……」

「なんのことだ？」

「イヤ、ナンテーカ、ガキヲ寝カシツケル母親ミニテーナ」

「なつ」

ヴァルの言葉に顔が熱くなるのを感じる。

「バ、バカ者！」

「ケケケケケ、イイモノ見セテモラッタゼ。侍二ハ感謝シネエトナ

「だまれつ」

愉快そうに笑うヴァルに制裁を加えようと、その小さな体躯を掴みあげ振り被る。

そのまま床に叩き付けようとしたところで、小さなうめき声が聞こえた。

「ん、んん？……何やつてんだ、お前ら」

「気が付いたか？」

手の中でもがくヴァルを放り投げ、ソファから身を起した統也に近づく。

「ああ。……あれ、俺、なんでここに？..」

「魔力切れでぶつ倒れたんだ。覚えてないのか？」

腕を組み、記憶を辿っているのだろう、ぶつぶつと呟いていたが、あ、と声を上げた。

「そうか、気絶したのか。ディアナが運んでくれたのか？」

「ああ、いつまでたつても戻つてこないから様子を見に行つてみれば、広場のど真ん中で伸びているじゃないか。分かつてているのか？かなり危険な状態だつたんだぞ？」

「あ、ああ、悪い、無茶しすぎたかもしれない。……ん？」

そつと頭を下げたところで、着ている服が変わっているのに気が付いたのか、視線で説明を求めてくる。

「かなり汗もかいていたし、そのままにしておくわけにはいかないだろう？」

「見たのか？」

あの傷跡のことか。

軽く頷くと、そうか、と呟いて黙り込む。

「まったく、お前は大バカ者だな。他人のためにあれほど傷を負つて、いつまでもそれを刻みつけたままにして。それでお前が死んだらどうするつもりだ？ 本当にバカだ、大バカだ」

「そうかもしれないな」

その顔に浮かぶのは笑み。しかし、すぐにそれは穏やかなものへと変わった。

「それでも、笑つてた人が、喜んでた人が居たんだ。だから、きっと間違いじゃなかつたんだって、そう信じてる。確かに納得できないうともあつたけど、過去を否定することは俺に託された想いも、今の自分も否定することになるからさ。今を精一杯生きることが、死んでいった人の供養になるのなら、俺は笑つて生きるだけだ」

だからそう簡単に死ぬ気もないさ、と笑うその姿に、頬が熱くなるのを感じた。

この顔は反則だ。そんな顔をされでは、その歪な生き方を否定することなどできないではないか。

どうも統也が来てからペースを乱されっぱなしだ。

「それにしても……、そうか、知られちゃったか……。このことを

知つてたのは師匠とアリアだけだつたんだけどな。ん？……といつことは、つまり……」

何を考えているのか、難しい顔で黙り込んだ統也は、じばらくして顔を上げると、じつらの予想の斜め上を行く言葉を口にした。

「うん、そうだな。ディアナ、お前は今日から俺の家族だ」

「こいつは今何と言つた？

家族、家族と言つたのか？

「ヴァルも見てたのか？」

「アア、ソウダゼ」

「じゃあ、お前も家族だな。改めてよろしくな、ディアナ、ヴァル」

勝手に話を進めていく一人と一体に何か言つてやううと思つたが、思考が混乱して言葉が出ない。

家族だとなぜそういう話になるもちろん嬉しくないわけではないが違うそうじゃない私は何を言つてているんだ家族が楽しそうだなだからそうではないしつかりし私。

何か言おうと焦れば焦るほど思考が混乱し、それによつてさらに焦ることになる。

何一つ言葉を発することも出来ず、顔に血が集まつてくるのを感じていると、ヴァルと話していた統也がこちらを向いた。

「そりいえばまだ言つてなかつたな。……ありがとう。」

だからそれは反則だと言つていいだろう。

微笑みながらそう言われて、私の思考は完全に停止した。

「あ、おい、ディアナ」

ふらふらと倒れこんできたディアナを支えながら問い合わせるが反応はない。

顔が赤いが、風邪でもひいたのだろうか？

いや、吸血鬼が風邪をひくなどとこういうことがあるのだろうか。少な
くとも俺は、そんな話を聞いたことがない。

「なあ、ヴァル。こっちの吸血鬼って風邪とかひくのか？」

ヴァルに説明を求めるが、ヴァルはやれやれとばかりに首を振つて
いる。

「ソソナワケネエダロ。侍、お前鈍イツテ言ワレタコトネエカ？」

む、なぜこいつがそんなことを知つているんだ？

「御主人モ苦労スンナ」

何のことかは分からぬが、とりあえずディアナは風邪ではないよ
うだ。しばらく休めば起きるだろう。

時計を見ると、すでに午後6時を回っていた。今から準備すればち
ょうどいい頃だろう。

ディアナにはいろいろ迷惑かけたみたいだから、今日はディアナの
好きなものでも作るとするか。

「ヴァル、ディアナの好きな物つて何だ？」

ヴァルは呆気にとられたように口を開けたまま静止していたが、やがて。いつも通りケケケ、と笑った。

「御主人ノ好キナモノカ？ソソナモン、血ニ決マツテンドロ
分カツテルツテノ。御主人ノ好キナモノハ美味イモノダ。アトハ
自分デ考エナ」

ヴァルから聞き出すのはあきらめ、一番自信のある『ビーフストロ
ガノフ』を作ることにする。
指定席だといわんばかりに俺の頭に乗ったヴァルとともにキッチン
へ移動し、下へじらえを始める。

「オイ、侍

いつもとは違い、真剣なヴァルの言葉に手を止める。

「才前ニトツテ『家族』ツテノハ、ナンド？」

「俺の居場所であり、何に代えても守り切るものだ」

「ソノ結果、才前ガ死ヌコトニナツテモカ？」

「……家族と自分、そのどちらかしか生きられないといつのなら

ヴァルが何を思つてこの問いを投げかけたのか。それはわからない。
それでも、ヴァルが俺に何を望んでいるのかはわかる。
それは俺と同じ想いだから。

「もちろん、そんな状況は作らせないし、仮にそうなつても簡単に諦めるつもりはない。みつともなく這いつくばつても、みんなで生き延びる道を探すさ。残される怖さ、一人の寂しさはよく分かつてるから……。だから、『ディアナが望む限りそばにいる。あいつを一人にはしないさ。』

頭上からさかさまに俺の顔を覗き込んでいたヴァルは、ケケケ、といつもの愉快そうな笑い声をあげて、俺の頭をぽかぽかと叩いた。

「カツコイイコト言ウジャネエカ、トーヤ。ソノ台詞、御主人ノ前
デ言ツテヤレヨ」

「なんだよそれ」

言つて、気付いた。

知り合つて初めて、ヴァルが俺の名前を呼んだことに。

「ようやく認めてもらえたつてことかな……」

「ナニカ言ツタカ、待？」

どうやら、まだまだ認めてはもらえないらしい。

ヴァルがどれほどの間ディアナと共にいたのか、それを知るすべはない。本人に聞けばわかるのだろうが、おそらく教えてはもらえないだろう。今までにディアナの過去の話はほとんど聞いていないのだから。

どちらにせよ、俺などより遙かに長い年月を共にしているはずだ。当然、ディアナの過去もそれなりによく知っている、もしくは関わっているだろう。

今日の昼間ディアナたちに話した俺の過去もかなり省略しているが、すべてを話したところで、ディアナのそれには遠く及ばないだろう。もちろんディアナに同情するつもりなど無い。ディアナ本人もそんなことは望まないだろう。

いずれ話す時が来るのかもしれないが、少なくともその時が来るまでは話すつもりはないし、ディアナもそう考えているはずだ。少し寂しい気もするが、話したくないことを無理やり聞き出すなどという無粋な真似はしたくない。ディアナは家族なのだ。故に俺のすることはただ一つ。

ディアナを守り、何があつても共に生きる。いずれ時が来たときにディアナのすべてを受け入れる。
それが、多くの人を傷つけ、その血に塗れた俺に出来る唯一のことだから。

食欲をそそる香りに目が覚めた。

上体を起こし辺りを見回すと、見慣れたリビングの風景が広がっていた。自分はソファで眠つていたらしい。

何があつたのか思い出そうとして赤面した。

『樂園』で倒れていた統也をここまで連れてきて、その汗にまみれた身体を拭いてやろうとしてその身に刻まれた痛々しい傷跡を目の当たりにした。

そして統也の信念を、戦う理由を聞き、不覚にもその穏やかな笑顔に見惚れてしまった。

これだけでも相当恥ずかしいといつのこと、問題はそのあとだ。こともあらうに、統也は傷跡を見た私たちを『家族』だと言つたのだ。

その一言にパニックを起こし、続くありがとうという言葉に完全にやられた。ＫＯだ。ノックアウトだ。あの笑顔を思い出すだけで、どんどん顔が熱くなつていく。出来ることなら今すぐ大声を上げてのたうち回りたい衝動に駆られる。

吸血鬼の真祖ともあらう自分が、なんという体たらくだ。

自己嫌悪に打ちひしがれないと、その原因である居候がキッチンから顔を覗かせた。

「あ、起きたか？」

自分のしでかしたことの重大さを全く認識していないその態度に、ふつふつと怒りがこみ上げてくる。

「そろそろ夕飯が出来るから、もう少しあと待つてくれ

そう言つてその姿をキッチンへと消した統也が去り際に浮かべた微笑に、鼓動が速くなるのを感じた。

まずい。これはまずい。非常にまずい。

この感情の名は知つてゐる。それに浮かれる者たちを嘲笑つたものだ。

しかし、まさか自分が経験することになるとは思つてもみなかつた。共に感じる、正体の分からぬ漠然とした不安。

吸血鬼として覚醒して以来多くの時間を一人で過ごしていた。

むろん、しばらく行動を共にした者もいたが、その誰もが自分を置いて去つて行つた。

初めのころは寂しいと感じたこともあつたが、いつしかそんな感情は消え去り、一人でいることが普通なのだと、自分はそういう存在なのだと思うようになった。

この学園で広域監査員として働くようになり、今までとは比べ物にならないほどの繋がりを得ても、一人で生きていくのだという考えが変わることはなかつた。

それがどうだ。たつた一人の『異邦人』^{イレギュラー}の出現で、今まで信じて疑わなかつた物がいとも容易く打ち砕かれてしまつた。

鷹司統也という男は、まるでずっと昔からそうであったように、自分の生活の一部となつてしまつたのだ。

自分で自分が分からぬ。

もしも統也が目の前から消えてしまつたら、私を置いて行つてしまつたら、自分はどうなるのだろうか。

ああ、そうだつたのか。

そこまで考えて、ようやく自分が感じてゐる漠然とした不安の正体が掴めた。

恐怖。今の自分は、統也が消えてしまうことを恐れてゐるのだ。

私が吸血鬼だと知つても態度を変えることなく、むしろ、より馴れ馴れしく接してきたあの男が、いつか私を置いて行つてしまふのではないか、と。それどころか、今さつき自分が見たのはただの幻覚

で、そんな男は初めから居なかつたのではないか、ただの夢だつたのではないか、と。

気付けば震えていた。ただただ、統也がいなくなつてしまつのが怖かつた。一人になるのが恐かつた。

いくら自分に言い聞かせても震えは一向に収まらない。

いつ自分しゃべの物にしてしまえ

もう一人の自分の囁きを全力で否定する。

それだけは出来ない。吸血鬼の真祖『常闇の吸血鬼ダーク・ブリュンヒルド』として、何より統也が家族だと言つてくれたのだ。それを裏切るような真似は出来ない。

どうせあいつもお前を捨てるのだ

そんなことはない。あいつは私を捨てたりしない。

なぜそつ言い切れる？ あいつはお前とは違つ。あいつもいつかお前を恐れ、蔑み、去つていくに決まつてゐる

もうやめもうつ、やめてくれつ。

お前が受け入れられることなどあり得ない。お前は吸血鬼、化け物なのだから

脳裏に浮かぶ光景。

家族が、友人が、旅の途中で出会つた者たちが叫ぶ。

「ば、化け物つ」

「いっうちに来るなっ」

「た、助けてくれっ」

化け物化け物化け物化け物化け物バケモノバケモノバケモノバケモノ
ノバケモノバケモノバケモノバケモノバケモノバケモノバケモノバ
ケモノバケモノバケモノバケモノバケモノ。

「ヤメ口オオオオオオオオオツ」

「ディアナ？」

いつの間にか田の前に立っていた統也の細身ながら引き締まつた体
に、恥も外聞もなくしがみつく。

「ディ、ディアナ？」

「と、統也っ、お、お前もっ、私の前から、消えてしまつのか？」

「……」

「私を、置いて、いなくなつてしまつのか？……私を、一人にする
のか？」

「ディアナ、俺は、お前を置いて消えたりはしない」

「ほ、本当か……？」

「ああ、本当だ。……約束する。俺はお前を置いていなくなつたり
はしない。お前が望む限り、こつまでも傍に居てやる。……お前を

一人にはしない。絶対にだ」

その言葉を聞いた途端、どれだけ抑えようとしても決して収まらない
かつた体の震えが、嘘のよう收まつた。

泣いた子供をあやすように背中を撫でる統也の手の暖かさにひびく
安心する。

先程まで頭の中に響いていたもう一人の自分の声も、今はもう聞こ
えない。

そして確信した。私はヴァルを従えて、一人で生きていくことなど
出来ないと。そんな必要はないのだと。
未来は誰にも分からぬ。それでも、統也の言つたことなら信じら
れる、そつ思えた。

「落ち着いたか？」

統也の声に、その胸に顔を埋めたまま頷く。
それを聞いても、統也は私を引き剥がすことにはなかつた。私の気が
済むまでこうしていてくれるのだ。うつ。
このままずつとこうしていて困らせてやろうか、とも思つたが流石
にそれはやめておく。
体を離すと、視界に広がつたのは統也の優しい笑み。

「もうすぐ準備できるから。顔、洗つとけよ？」

いたずらっぽく笑いながら軽い調子で言つ統也を睨みつけると、朗
らかに笑いながら立ち上がる。

「お前のことを受け入れないような奴は放つときや艮いんだよ。そ
んな奴らは相手にするだけ無駄だ。少なくとも、俺やヴァル、学園
長はお前の味方だ」

去り際、私の頭を乱暴に撫でながらなんでもない口に言つと、キツチンへ消えていった。

照れ隠しか、足早に去る統也を可笑しく思つたが、それ以上にありがたかつた。

統也に出会つてからたつた一日。

それでも、統也は私にとつてとても大きな存在になつていた。

だから。

たとえ何があるうと傍にいてやろう。見ず知らずの誰かの為に戦い、そして傷ついた統也が幸せになれないなど、そんなことはあつてはならないのだから。

もつとも、統也は自分を不幸だなんて思つていらないのだろうが。

夕食を済ませた俺たちは『樂園』内に来ていた。

ことの発端は、夕食の席でディアナの発した言葉だった。曰く、「お前に一人でやらせていてはどんな無茶をするか分かつものじゃない。これからは私の監視の下で鍛錬をしろ。もし一人でやつたりしたら……分かつているだろうな?」ということだ。

無茶をして心配をかけた、という自覚がある以上逆らうことなど出来るのはずもなく、ディアナの提案を素直に受け入れた。決して、そういつたディアナの浮かべた笑みに恐怖を感じたからではない。あくまで自分の意志だ、……そのはずだ。

今、俺の目の前にはディアナとヴァルがいる。魔法使用なしの模擬戦らしい。

俺は大丈夫だと言つたのだが、つい数時間前に魔力切れになつた奴の言つことなど信用出来ないとばつさり切り捨てられ、魔法の講義は無しになつたのだ。

ディアナは魔法使いタイプらしいのだが、こうやって向かい合つてみると魔法など無くともかなりの実力の持ち主だということが分か

る。

ヴァルもかなり手強そうだ。ディアナの従者である以上、魔法なしの近接戦闘ではディアナ以上かもしれない。

どちらにせよ、気を抜けば一瞬で終わってしまうだろう。もちろん負けるのは俺だ。

それでも簡単に負けてやるつもりなど無い。やりよじによつては十分勝機もあるのだから。

「統也、準備はいいか？」

不敵に笑うディアナに軽く頷くことで答え、全身から不要な力を抜き自然体で構える。

ディアナが上空に発生させた氷の塊が、重力に引かれて自由落下を開始する。それが地面に到達した刹那、ヴァルが突っ込んできた。自身の身の丈をはるかに上回る大型のナイフを左右に一本ずつ持ち、軽々と振り回す姿はまさに暴風。下手に近付けばたちどころに切り刻まれ、物言わぬ肉塊と化すだろう。

予想より数段速いその動きに虚を衝かれるが、それも一瞬。あちらが速いのなら、それ以上の速さで迎え撃てばいい。

息つく暇もない連撃を捌きながらディアナの位置を確認すると、初めての位置から一步も動いていない。手を出すつもりはないのだろう、実質的な一対一だ。これでヴァルに専念できる。

左からの袈裟切りを左前方に踏み込むことでやり過ごし、裏拳の要領で繰り出される横薙ぎを身を沈めることでかわす。再び右手のナイフが迫るより早く、左の掌底がヴァルを弾き飛ばしていた。

器用に空中で回転して足から着地したヴァルが楽しそうにケケケ、と笑う。

「ナカナカヤルジャネエカ」

「褒めたつて何も出ないぞ？」

再び突っ込んで来るヴァルの上段からの一線を半身になつてかわし、
続く刺突を仰け反つてやり過ごす。伸びきつた腕を掴み、そのまま
地面に引き倒す。呼び出した玉兎の切つ先を突き付けたところで、
ヴァルが口を開いた。

「ドウヤラ、俺ノ負ケミテエダナ」

「やうだな。……ところで統也、なぜ獲物を最後まで使わなかつた
？」

玉兎を消し、ヴァルを頭の上に乗せた俺にディアナが言つ。

「なぜ、つて言われてもなあ……。単にやりづらかつただけだ。玉
兎を持つたまま、ヴァルの攻撃を防ぎきる自信はないからな」

「なるほどな。しかし、それだけでもないだろ？？」

正直に話せとばかりに半眼で睨むディアナに、肩をすくめて答える。

「別に嘘を吐いてるわけじゃない。ヴァルの間合いじや、長刀なん
てまともに使えないからな。まあ、もう一つ理由を挙げるとすれば、
下手に玉兎を使うと、ヴァルをぶつた斬つちまうかもしれないから
れ」

模造刀でもあればいいんだけど、と言つて苦笑する。

玉兎を持つて対峙した相手は、一切の容赦なく切り捨てる。俺にと
つての玉兎はそういうものだ。故に玉兎を修練に使う気にはなれな
い。

「つまり、模造刀を用意しる、といつわけか」

「いや、別にそこまでしてもらわなくても……」

「今日はこれで終わりだ。統也、近いうちに模造刀を手配しておぐ。
それまでは組み手はなしだ。……分かったな？」

「……分かりました」

決してティアナに気圧されたわけではないが、素直に従つておく。
本当だぞ？ 師匠の言つことは素直に聞くべきだからだぞ？

「来たれ雷の精。神速の矢となりて敵を討て。魔弾の射手、散弾、雷の一十三柱」

放たれた二十三条の雷が同数の異形を貫き、眩い閃光と共に無に帰す。

巻き上がる粉塵を目くらましにして、いまだ残る数体の異形に接近。最も近くにいた一体を袈裟に斬り伏せ、別の一體が振り下ろした剛腕を身を捻つてかわす。

手当たり次第に異形を斬り裂く。袈裟掛けに叩き斬り、横に薙ぎ、上段から打ち下ろす。背後の異形を振り向きざまに両断し、左から迫る一體に掌底を叩きこむ。

「火龍掌」

発勁の要領で吹き飛ばしつつ、至近距離で炎弾を撃ち込む。燃え上がる異形を尻目にその場で跳躍。袈裟に振り下ろされた拳をかわし、最後の一體を脳天から股下まで一直線に切り裂いた。

「ふう、これでラスト、かな？」

玉兎を消しながら呟く。

あたりを見回しても、さつきまで闘っていた異形の姿はどこにもない。

「それにしても、鬼つてのは面倒だねえ。概念武装さえあれば消滅させることも出来るんだろ？けど、そんなもん持っていないしなあ……」

また近いところに現れるであろう鬼たちに肩を落とす。

この世界に来てから一週間、学園の防衛に参加し始めてから三日が経つた。

その間もティアナの監視の下で修練を積み、魔法を併用しつつの戦闘にもようやく慣れてきた。先ほどの火龍掌もその成果の一つだ。玉兔の使い難い至近距離での戦闘のためにティアナが考案したもので、魔弾の射手を掌底に乗せて発勁による打撃と共に叩きこむ、というのだ。無詠唱となるため多少威力は落ちるが、殴り合いではなくなり使い勝手がいい。

しばらく周囲の気配を探つてみたが、これ以上魔物はいないようだつた。

一仕事終えて帰ろうと踵を返す。煙草を取り出し火をつけてから、歩き出す前に背後に潜むそれに声をかけた。

「で、いつまで隠れてるつもりだ、お一人さん？」

「おや、ばれていたのか」

「流石ですね」

振り向くと、そこに居たのは両手に大口径の銃を携えた長身の少女と野太刀を携えた小柄な少年。ともに敵意はないようだが、直踏みするような無遠慮な視線を向けてくる。

「あなたが鷹司統也ですか」

「そつこつお前らは誰だ？見たところうちの側の人間のようだが……」

…

言葉遣いこそ丁寧だが、疑念を隠そともしない少年の言葉にそのまま返すと、銃をホルスターにしまった少女が口を挟んだ。

「涼、そんなにあからさまに疑うのは感心しないよ。……すまないね鷹司さん。私は菊川氷雨、こいつのちつここのは弟の涼。一人ともこここの生徒だよ」

氷雨と名乗った少女はもともと細い眼を更に細め、にこにこと笑いながら涼と呼ばれた少年の腕を捻り上げていた。

「それで、俺に何の用だ？」

どう反応すればいいのか分からなかつた俺は冷や汗をかきながら、顔が引き攣らぬよう気に気を付けつつ無難な質問を選んだ。

「いやね、彼の大吸血鬼『常闇の吸血姫』ダーク・ブロウ・ヒルダが弟子をとつたと聞いたものでね。気になつて見に来たというわけさ」

「なるほどね……。そつちの少年はそれだけじゃなさそうだけど?」

いまだに親の仇でも見るような目つきでこちらを睨む菊川弟を視線で示しながら言つと、肩を竦めて弟の頭を小突いた。

「私たちは退魔の家系の出身でね、私はそれほどでもないんだが、こいつはどうもそういうのに敏感なんだ。鷹司さんから人外の臭いがするつて聞かなくてね」

「ああ、そういうこと。……まあ、いろいろと事情があつてさ。涼君、だつけ?俺はこの学園に害になるようなことはしないつもりだから、大目に見てくれないか?」

「『気安く呼ばないでください』

「どうやら徹底的に嫌われたらしく。にべもなく言われ、肩を落とす。

「それにしても、いつ気付いたんだい？仕事がら『気配を消すのは得意なつもりだつたんだけね』

「最初から見られてる『気はしてたさ』。特に弟君の方は、あからさまだつたし」

そう言って菊川弟に目をやると、うつ、とばつが悪そうな顔で俯いてしまった。その様子に苦笑していると、突然顔を上げて先程までよりもなお強い視線で、挑むように叫んだ。

「あんた、何しに来たんだよ！何が目的なんだよ！あんた達は、また僕から大切なものを奪つていいくのか！」

「涼つ……」

暴れる弟を押さえ付ける菊川に、身振りでそれをやめさせる。銜えていた煙草を捨てその火をもみ消してから、憎悪に顔をゆがませながら俺を睨みつける菊川弟を見据え、静かに口を開く。

「君に何があつたのかは知らないし、知るつもりもない。仮に俺が普通の人間じゃないとして、君はどうするんだ？俺を殺すかい？」

「……」

「殺したいのならかかってこよ。もつとも、簡単には殺されてや

らないけどな」

薄く笑いながらそう告げると、菊川弟は一步後ずさり、なぜ後ずさつたのか自分でも分からなによつた顔をした。その後ろで菊川も顔を凍りつかせている。

俺は歩み寄りながら続ける。

「言つて置くけどな、復讐なんて楽しいもんぢやないぞ。そんなことしたつて、得られるものなんかありやしない。時間の無駄だよ」腰を抜かしてへたり込んだ菊川弟に目線を合わせるよつてしゃがみ込む。

「まあ、口を挟む権利なんて、俺はないんだけどな。結局のところ、決めるのは他の誰でもない、君自身だ」

頭をぽんぽんと叩きながら、俺を不思議そうに見つめる一人を残し、立ち上がりて踵を返す。

「もう夜も遅いから、早く家に帰れよー」

振り向かずに手をひらひら振つて歩き続ける。

二人の姿が完全に見えなくなつたころ、頭上から聞きなれた声がした。

「ずいぶんな御高説だつたな、統也」

見上げると、すぐそばの木の一際太い枝の上に、ヴァルを従えたディアナの姿があつた。

「なんだ、いたのか

皮肉のこもった台詞を受け流すと、少し不満げな表情を見せ、すぐ目の前に音もなく着地した。当然といつかなんというか、ヴァルは俺の頭の上に乗っている。

「いつから聞いてたんだ？」

「いつまで隠れてるつもりだ……、のあたりからだな

「最初からじやねえか……」

俺の呟きなどどこ吹く風とばかりにこわいと笑うティアナに嘆息する。頭上からはケケケ、といつ心底愉快そうな声も聞こえる。

「あれもお前の経験からくる忠告か？」

「そんなんじやねえよ。ただ、あんな子供がそんな下らないものに身をやつすのを見てられなかつただけだ

「ふん、相変わらずお人好しだな」

「ほつとけ」

一週間ほど前の家族宣言以降、俺たちの間にあつた無用な遠慮はどんどんなくなってきた。俺の口調が変わったのがその証だろ。俺としても変に遠慮されるよりはこの方が気が楽でいい。ティアナたちに言わせれば「変な奴」らしいのだが、そもそも堅苦しいのは好きじゃない。記憶の片隅に僅かに残る父さんの影響もあるのだろうが……。

「ところで、こんなところにいていいのか？学園長と話があるって言つてただろ？」

「ああ、それならもう済んだ。統也、明日はお前も爺のところに行くぞ」

「まじかよ……」

行きたくねえ……。

あの爺、もとい学園長の性格はこの一週間で嫌といつほぞ思ひ知られた。

三日前に引き合わされた広域監査部長の森崎さんの「子供みたいな人だから」という言葉の意味がよくわかる。あの時の森崎さんの哀愁に満ちた表情を忘れることはないだろう。

「まじだ。詳しい話は爺に聞けばいい」

「はあ、分かつたよ……」

「ケケケ、マア頑張レヤ」

ヴァルのどう考へても楽しんでいいとしか思えない励ましに、気分が沈んでいくのが分かる。

拭いきれない不安を抱えたまま、前を歩くティアナを追つて帰途に就いた。

「爺、入るぞ」

いつものように学園長室の扉を開けて中に入つていぐディアナに続いて足を踏み入れる。初めのころはこの言葉遣いに苦笑していたものの、学園長の人となりを知つた今では、別にいいじゃん、といった感じだ。俺も敬語使うのやめようかな……。

部屋の中には、いつものように重厚なデスクの向こうに悠然と座る学園長、丹森孝造。その斜め前に立つ温和な顔立ちをした三十代半ばの長身の男、広域監査長を務める森崎健吾の姿があった。

「おお、待つておつたぞ」

「やあ、ディアナ、統也君。」

「森崎さん、こんにちわ。学園長、俺に話つて何です?」

「わしには挨拶はないのかの?」

「やつこつ」とは自分の行動を鑑みてから言つてぐだぞー

俺の言葉に、ディアナと森崎さんが頷く。それを見て落ち込む学園長に仕方なく声をかける。

「分かりましたよ……。」

「んこひは、学園長」

「さて、揃つたところで本題に入らうかの?」

打つて変わつて機嫌よく切り出す学園長の切り替えの早さに呆れながら、学園長室の空気の変化に合わせて意識を魔術師、いや魔術師としてのそれへとシフトさせる。

「今日集まつてもらつたのは他でもない、十日後に迫つた学園防衛戦について話すためじゃ」「

そこに先ほどまでのふざけた様子はなく、圧倒的な存在感を放つ大魔術師の姿があつた。

初めて目の当たりにする日本魔術協会の重鎮としての姿に魂が震える。

「統也君は知らんじやろつが、此処学園都市霧生の周囲を囲む結界は、一年に一度、人々の煩惱が最も高まる大晦日の晩に極端に弱体化してしまうのじや。もちろん一般人を守るために最低限の結界は維持するが、靈脈の起点となる『大樹』を守り切ることは出来ん」

そう言つて学園長は視線を窓の外へと向ける。その先にそびえるものこそ、霧生のシンボルであり、日本最大の靈脈の起点である巨木『大樹』。

その大きさは、霧生市のどこに居ても望むことができるという事実からも窺い知ることが出来る。霧生市民にとつてなくてはならないものだ。

「わしらは全戦力を以て『大樹』を守らねばならん。統也君にも防衛線の一角を受け持つてもらいたいのだが、どうじやろうか」「

学園長の言葉と共に、三人の視線が俺に集中する。森崎さんとディアナの様子から察するに、二人にはあらかじめ伝えられていたのだろう。すべては俺の返答次第、というわけだ。

三人の顔を見回した後口を開く。

「防衛戦に参加することについては異存はありません。それが俺の仕事ですし、今の俺は霧生の住人ですから。……ですが、一つ聞いてもいいですか？」

学園長が頷くのを確認して続ける。

「俺は今回が初めてですか？よくわかりませんけど、何かいつもと違つことがありまするんじゃな」ですか？」

「どうこう」とじや？」

「だつてやうでしょ。さつきも言つたように、霧生を守ることは俺の仕事の内です。本来なら有無を言わせず参加させるんじやないですか？実際、四日前はそうだつたじやないです。にもかかわらず、わざわざ呼び出して俺の意思を確認している。それを疑つなつて方が無理な話ですよ」

肩をすくめて見せると、静かに聞いていた学園長が諦めたよつて息を吐いた。

「その通りじゃ。どうも今回は例年とは様子が違つ

「どう違つとです？」

「それが、わしらもよく分からんのじや」

「どうこう」とです？」

「結界の揺らぎが例年以上に大きくなつたるのは確かなんじやが、その原因も、それによって何が起こるのかもさっぱりなんじや」

そういうことか。確かに気にはなるが……。

「ふん、何があらうがやることは変わらん」

「ディアナの言う通りだ。僕たちにできることは警戒を怠らないことと、万が一の時は全力を尽くすことだけさ」

二人の言葉に頷き合い、異変を察知した場合は直ちに連絡するように徹底することで落ち着いた。

対策というのもおこがましい常識レベルのものだが、何が起こるか予想できない以上、後手に回らざるを得ない。もどかしさを感じながら、それは皆同じなのだと無理やり納得させる。

やり切れない思いのまま防衛戦時の各関係者の配置についての話を聞く。ふとテーブルの上に広げられた見取り図の中に気になる名前を見つけた。どうやらあの一人も参加するようだ。

結局、俺は他のメンバーとの連携が難しいだろう、ということで遊軍的な位置付けになることが決まった。ほかのメンバーには申し訳ない気もするが、異変が起きた時点ですぐさま行動に移れるというのは精神衛生上非常にありがたい。

「ディアナ、健吾は言うに及ばず、統也君もこの学園内ではトップレベルの魔力の持ち主じや。お主ら三人が実質的なこちらの主力である以上、負担も大きくなるじやう。勿論最優先でフォローはさせるが、万が一の時はお主らが矢面に立つことになるはずじや。気を引き締めてかかってくれい」

神妙な面持ちで告げる学園長に、俺たちは囁らずも不敵な笑みを浮

かべた。

それを見た学園長もまた相好を崩し、その威儀を霧散させた。

学園長室から「ティアナの家へ向かう途中、人だかりができていたのを不審に思つて近付いてみると、どうやら喧嘩のようだつた。普通街中で喧嘩が起きていれば見て見ぬふりをするものではないのかと思いながら、広域監査員としての職務を果たすためにティアナの先に帰つておくように言つて輪の中へと入つていく。

密集する人込みを苦労してかき分けながら中心近くにたどり着いた時には、すでに一触即発。

何やらやけに熱くなつてゐる十人余りの男子高校生と、その正面に立ち不敵な笑みを浮かべる女子中学生。明らかにおかしい。つーか止めるよ、野次馬ども……。

「はいはい、そこまで。何があつたか知れないけど、天下の往来でこんな」としてんじやねえよ。俺の仕事が増えるだろうが

ぱんぱんと手を叩きながら、めんじくそいつに言つ俺に周囲の視線が集まる。

「あ？てめえ誰だ？邪魔すんじやねえよ！」

そう言つて問答無用で殴りかかつて来た一人の顎にカウンターの掌底を打ち込んで黙らせる。舌噛んでなきや良いけど。

「つるせえつての。先生の言つことは素直に聞いた方がいいんじやねえの？」

ため息をつきながらやれやれと肩をすくめると、完全に標的をこじ

らに切り替えたのか取り囲み始めた。全部で十一人。

怪我させるのはまずいよなあ、と考えていると一斉に殴りかかってきた。これなら何もしなくてもいいかも、と四方八方から迫る拳を上体の動きだけでかわす。痛そうな音とともに数人が倒れる。カウンター気味に味方の拳を受けた五人が脱落。あと六人。

同士討ちに唾然としている連中の顎を掌底で打ち抜く。後に残ったのは折り重なるように伸びている十一人の少年とその中心に立つ俺、少し離れたところで呆然としている少女と何が起つたのか分からずキヨトンとする野次馬連中。

ぼーっとしたままの少女に近付き声をかけると、びくつと身をすくませた後こちらを見た。

「で、なんでこうなったのか聞かせてもらえるか？」

「え、えーっと、あ、あははは、なんでかなー？」

冷や汗を流しながら、ぎこちなく笑つて首をかしげる少女に笑いかける。

「聞かせてもらえるか？」

「はつ、はいつ、一から十まで包み隠さず話させてもらいますです！」

顔を引きつらせながら、やけに早口で言つ少女を不思議に思いながら話を聞く。心なしか顔色が悪い気がするが、気のせいだろうか？ 少女の話を要約するところだ。

彼女の名前は水瀬夕夏。女子空手部部長を務めており、先ほどの連中は男子空手部の部員。男子空手部と女子空手部は仲が悪く、その上水瀬が男子空手部員を軽くのしたことから、事あるごとにリベン

ジマッチを申し込まれている。それは一種の名物と化しており、それ故に先ほどの騒ぎでも誰も止めに入らなかつたのだといつ。

「なるほど、喧嘩じゃなく試合ね……。

「やつ、 うのつ、 あの人たちに吹つかれられて仕方なく

「それにしても、 うのつ、 あの人たちに吹つかれられて仕方なく

「うつ……」

「それにあんなことひでやるな、 やるなら道場でやれ。 俺の仕事が
増える」

はーい、 と元気に返事をする水瀬に、 本当に分かっているのか不安
になる。 それにしても、 うのつ、 あの人たちに吹つかれられて仕方なく
力し合つていることもあることながら、 それに関係のない生徒も戦
闘力が高すぎる。 どうなつてゐるんだこの学園は。

「うのつ、 先生? は名前なんてゆーの?」

「ああ、 俺は鷹司統也。 一応指導教員つてことになつてゐる。 もつと
もまだ一週間くらしかつてないけど」

指導教員とは、 広域監査員の表向きの名称だ。 そんな物が必要なの
か、 とも思つたが、 あくまでこことは学園都市。 広域監査員も書類の
上では学園の教員の一人になつてゐるのだから、 物騒な名称は流石
にまずいらしい。

「へー、 そつなんだ? つてゆーか、 先生いくつ?」

「ん?十九だけど?」

「ええひへひそひ」

「嘘なんて言ひでどうすんだ。正真正銘十九歳だぞ、俺は」

「そんなに若かったんだ……」

そんな反応されると流石に凹むぞ。俺ってそんなに老けて見えるのか?自分では結構な童顔だと思つてたんだが……。

「……まあ、いい。とにかく、街中で騒ぎは起こすなよ?」

そつと、煙草を取り出しながら水瀬に背を向ける。野次馬たちはいつの間にかいなくなつており、代わりに不機嫌そうなティアナの姿があった。律儀に待つていてくれたらしい。

職務を果たしただけになぜ半日で睨まれなければならないのか、とも思つたが、せつかく待つていてくれたティアナにそれを言ひ気にはなれず、とつあえず礼を言ひておく。

「待つてくれたのか?ありがとな」

「う、うるさい。手をどけろ!」

くしゃくしゃと頭を撫でたのが悪かったのか、顔を真っ赤にしたティアナに怒られた。素直にティアナの頭から手をどけると、恨めしそうに睨みつけてくるティアナを促してティアナ宅に向かつ。周囲の喧騒を横目に見ながら、最後にこんな平和な日常を過ごしたのはいつだつたかと思考を巡らす。断片的にしか思い出せない自分に自

嘲の笑みが浮かんだ。

銜えたまま火をつけていなかつた煙草に火をつけ、紫煙を深く吸い込む。もし平和な世界で生きていたら、煙草も吸つていなかつたのだろうか。

「くくっ、ばかばかしい……」

くだらないことを考えた自分の愚かしさに嫌気がさす。
過去は変えられない。

それはよく分かっているはずなのに。過去を否定することは今まで関わってきた多くの人も否定することになると、嫌になるくらい分かっているはずなのに。まったくらしくない。

視線を落とすと、顔をしかめてこちらを見るティアナと田が合つた。

「また下りたことを考えているのか？」

「まあ、そんなとこだ」

「余計なお世話かも知れんが、後悔しても何も得るものはないぞ？
もつとも、そんなことはお前が一番分かっていると思つがな」

「別に後悔してるわけじゃないさ。ちょっと感傷的になつてたのは否定しないけどな」

そう言つて肩をすくめると、ティアナは面白くなさそうに鼻を鳴らした。

「ふん、まあいい。やつと帰るぞ。今日からは今まで以上に厳しくこくからな」

「げつ、まじかよ……」

「ああ、まじだ。確かにお前の魔法の成長には目を見張るものがある。それでも私や健吾に比べればまだまだ。小物を相手にする限りでは問題ないが、高位の悪魔や鬼神クラスが出てくれば苦戦することになるだろう。そうならないためにも今日からは上級魔法の修行も入れていく。気を抜けば、死ぬぞ」

「最後のは聞かなかつたことにしたいが……、まあ、よろしく頼む」

満面の笑みで告げるティアナに、とてもなく嫌な予感がするがそれを気にしたら負けだ。いくらティアナでも、命にかかるような無茶な修業はさせないだろう。……多分。そう信じたい。

とたんに上機嫌になつたティアナの後を追いながら、内心の不安を隠すように新たな煙草に火を付けた。

「はあ……。相変わらず数だけは多いんだよなあ」

後ろで拳を振り上げる鬼を振り向きざまに斬り捨て、周囲を見回しながら肩を落とす。ざつと数えただけでも、まだ二十体近く居る。一体一体は大したことはないが、数が集まれば厄介になる。実際今までに何度もひやりとさせられる場面があつた。

「つたぐ、三十体以上倒したつてのに、まだあんなにいやがる。これも結界の揺らぎのせいだろ? って話だつたけど、今でこれつてことは、当田はどれだけ出るんだよ」

今までに戦つたことのない数の集団につきぎりする。まだまだ余裕はあるが、それでも疲れる事に変わりはない。

「あー、もう、めんどくせえ。まとめて吹つ飛ばすか。魔弾の射手、散弾、雷の十三柱」

最も密集している地点に、無詠唱で打ち出せる最大数の魔弾を叩きこみ、自身は逆方向へと走り出す。接近する俺に群がる六体の鬼の内、突出してきた二体を一刀で斬り伏せ、その後ろから続く三体をまとめて薙ぎ払う。そのまま反転し背後から迫る最後の一体に渾身の掌底を叩き込む。

「ヒーヒーラスト、雷神掌!」

掌底と共に打ち出された雷にてその身を苛まれ、消えていく鬼を見つめながら煙草を取り出そうとして煙草が無いことに気が付いた。

「あれ、どこかで落としたかな?」

「探し物はこれかな?」

ふいにかけられた声に振り向くと、そこには煙草の箱を持った菊川姉の姿があった。相変わらず笑顔を浮かべている。あれが地なのだろうか?

「ああ、やっぱり落としてたか」

「む、驚かないのかい?」

「お前が見てるのは知つてたからな。そいつを渡してくれないか? 一仕事終えた後の一服が楽しみなんだ」

肩をすくめて言つと、クスッと笑つた後、唐突にその姿が搔き消えた。

「おこいひ、いきなり何するんだ。驚くだろ? が

下ろした視線の先で驚きの表情を見せる菊川を半田で睨む。いきなり至近距離で銃口を突き付けるとは、なんてことをするんだ。

「まさか、見えていたのかい?」

「まあ、じつちもいりこりあつたんでな。それにしても瞬動術なんて使えたのか。……ほんとに中学生かよ」

昼間の水瀬といい、どうなつてゐんだ。

「ん？ 夕夏を知ってるのかい？」

ため息交じりに漏れた咳きに、菊川は首をかしげる。

「眞間ひよりとあつてな。知ってるのか？」

「知ってるも何も、私の数少ない友人だよ」

「……ひよつとして他にも……、いや、なんでもない。ところで、何しに来たんだ？ 落とし物を届けに来たくれたわけでもないんだろ？」

ほかにも常人離れした奴がいるのが気になつたが、それを聞くと俺の中にある常識が打ち碎かれそうな気がして話題を変える。銃を突き付けているのとは逆の手に持つていた煙草を奪い取り、一本取り出して火をつけると、なんだか虚しくなつた。

銃をしまい俺から離れた菊川は、わずかに躊躇つた後口を開いた。

「昨日はうちの弟が迷惑をかけたね。あいつは良くも悪くも真つ直ぐなんだ。許してやつてくれないか？」

「なんだ、そんなことか。別に気にしてないさ。何か事情があるんだろう？ 自分で言つのもなんだけど、そんなことをいつまでも根に持つほど性格は悪くないつもりだ」

そう言つて笑いかけてやると、菊川は安堵の息を吐いた。

「それを聞いて安心したよ。学園長の言つていた通りの人物のようだね」

「学園長がなんて言つてたのかは非常に気になるが……、安心してもらえたならいいや」

菊川は珍しいものを見るような視線を向けた後、愉快そうに笑いだした。

いつたいあの爺は何て言つたんだ？

時折聞こえてくる単語から推測すると、かなり心外な内容だったのではないだろうか。

ほんとにあんな人が学園長をやつしていくて大丈夫なのかと不安に思つたが、魔法師としての実力は俺なんかより遙かに優れているのだから大丈夫だろう、と無理やり納得させる。

「本当に鷹司さんは変わつてるね」

ひとしきり笑つてそつこつ菊川に視線を戻すと、田の端に涙を浮かべていた。

「……褒められてる気がしないのは俺の気のせいだろうか？」

「気のせいだよ。少なくとも私はそう思つてるよ。もし鷹司さんみたいな人が近くにいたら、涼はあんな風にならなかつたかも知れない。私には無理だったみたいだけね」

そう言つて寂しげに笑う菊川の姿を悲しく思つた。如何に常人離れた実力を持つても、菊川はまだ中学生だ。普通ならこんなに苦しむ必要など無いはずなのに。

「昔はあんな風じやなかつたんだよ。人懐っこい子でね、一族のみんなにも好かれてた。私は落ちこぼれだつたけど、あの子は才能も

あつたしね。……一年前のことだよ。私が里から離れているときに私たちの里は、ある人外の集団に襲われてね。私が里にたどり着いた時には、里は燃え、蹂躪されていた。涼はその光景を、みんなが死んでいくのを目の前で見ていたんだ」

自分の無力を嘆くように唇をかみしめて続ける。

「私は涼を連れて逃げたよ。どうあがいても時間の問題だつたからね。そして霧生にやつてきた。そのころからだよ。涼の人外に対する反応が過敏になつたのは、私はそれを見ていことしかできなかつた」

駄目な姉だろ？と、力ない笑みを浮かべる菊川に、首を振つて笑いかける。

「そんなことないだろ？俺にも似たような経験があるけど、結局乗り越えるのは本人の意思なんだ。周りの人間がどんなに頑張つても、本人が過去にどうわれ続ける限り解決にはならない。……俺もそうだつたからさ」

空を見上げる。空には蒼く輝く上弦の月。

「それでも、その痛みを理解して見守つてくれる人がいればそれは大きな支えになる。大丈夫だよ、彼は。こんなに彼を大事にしてる姉がいるんだ、必ず乗り越えられるさ。彼の眼は、まだ死んじやしないんだから」

「そうだね。いい人だね、鷹司さんは」

「よせやい」

無性に照れくさくなつて菊川の頭を乱暴に撫でると、くすぐつたそ
うに手を細める。

しつかりしろよ、菊川弟。お前にはこんないい姉がいるんだから。

「鷹司さん、あまりそういうことはしない方がいいよ。勘違いして
しまつかもしれないからね」

「ん? なにが?」

「はあ、無自覚みたいだね……」

「だからなにが?」

「なんでもないよ……。それより、私のことは氷雨でいいよ、菊川
が一人じや混乱するだらうからね」

「そりやありがたい。実際混乱しかけてた。俺のことも統也でいい。
そっちの方が気が楽だ」

「それじゃあ、やうやくせめてもらひよ。……おや、もうこんな時間が
私はそろそろ失礼するよ。じゃあね、統也さん」

「ああ、おやすみ、氷雨」

時計を確認して、あわただしく去つていいく氷雨を見送つて煙草に火
をつけた。

見上げた空には、相変わらずの蒼い月。

「彼の眼は、まだ濁りきつちゃいない。だから大丈夫さ。あの頃の

俺とは、違つんだから

呴いたその言葉は、誰に聞かれる事もなく夜の森に消えていった。

「来たれ氷の精。神速の矢となりて敵を討て。魔弾の射手、集束、氷の一九九柱」

ディアナの手から放たれた一九九の鋭い氷柱が、獲物を打ち抜かんと殺到する。単発で巨岩を粉碎する氷の弾丸が着弾するたびに、前方に突き出した右腕に重い衝撃を感じる。

「つ、なんて威力だよ、まつたくつ」

全力で障壁を展開することおよそ十一秒。ようやくおさまった氷弾の雨にほつと一息つく。

間違いなく、今までの人生で最も長い十一秒だつただひつ。もし途中で障壁を破られれば、それは命に関わるのだから。

「ほう、これも受け切れるか」

「おいこいら、何意外そうな声出してんだよ……。止め切れなかつたら死んじまつじゃねえかつ」

驚いたように言うディアナに、流石に腹が立つた。

確かに、気を抜けば死ぬぞとは言われたが、止められるかもわからぬようなものを食らうなんて聞いてない。ぎりぎり止められたからよかつたものの、駄目だつたらどうするつもりだつたんだ。

「今のは結構本気だつたんだがな……」

「…………もうこいや」

「マア、頑張レヨ」

悔しそうに囁くティアナに肩を落とし、半ば投げやりに言つた俺をヴァルが励ましてくれる。

ヴァルは口は悪いが良い奴なんだと気付いたのは、ティアナとの修行が激化してからすぐのことだった。こうして励まされたのは、もうはや数えるのも面倒な回数に上っている。

「ソレニシテモ、アンナニ樂シソウナ御主人ヲ見タノハタシブリダゼ」

「あれが楽しそう、なのか?」こつちとしてはかなりきついんだが…」

「御主人ハ氣ニ入ッタ相手ニシカ感情ヲ見セネエカラナ」

そう言つてティアナを見るヴァルの顔は、人形である以上表情こそ変わらないが、とてもうれしそうに見えた。

「おい、統也。誰が休んでいいと言つた」

「ああ、わりい」

ヴァルを頭の上に乗せ、ティアナに近付く。

「まったく、出鱈目だなお前は。時間の流れの遅い『樂園』内で修行しているとはいえ、まだ一週間だぞ。そんな短期間で私の本気の魔弾の射手を受け切るとは」

「お前ね、かなりぎりぎりだつたんだぞ。お前は俺を殺す気か？」

「うう……。お、お前が悪いんだ！」

「ケケケケケ、嫉妬力ヨ御主人。ミシトモネエゾ」

「つぬせ」つ、このボケ人形が！」

からかうように笑うヴァルに制裁を加えようとディアナは俺の頭上に手を伸ばすが、いかんせん身長差があるせいで手が届かない。それを見てヴァルが笑い、ディアナの怒りをさらに煽る。

「お前ら、いい加減にしろつて」

ぴょんぴょん飛びはねるディアナの頭を撫でながらヴァルの頭を小突く。抗議の声を上げる一人と一体を無視して、脱線しかけた話を元に戻す。

「いくら頑丈だつていっても、全魔力注ぎこんでこれだぞ？あんまり意味ないんじやないのか？もし破られたらすっからかんだもんよ

「まあ、それはそうだな。だが、障壁の展開に慣れてくればより少ない魔力で効率的な形成が可能になる。魔力量を増やすのは簡単なことではないが、経験さえ積めば効率的に使えるようになる。今の段階でこの強度ならかなりのものだ」

「そんなもんか」

「……さて、そろそろ次の段階へ進むぞ。防御面は上々、魔力量も少しづつ増えてきている。あとは攻性魔法のバリエーションが増え

れば、晴れて一人前だな

「攻性魔法、ねえ。あんまり柄じゃないんだよなあ、ああいう放出系のつて」

「バカ者、確かにこれから教える上級以上の魔法は魔力の消費量こそ多いが、使いどころを誤らなければ、下手に中級以下の魔法や体術で戦うよりも遙かに消耗の度合いが小さくなるんだぞ？」

「それは分かつてるんだけどなあ……。まあ、仕方ないか、使えるないよりは使えた方がいざつて時に役に立つだろうじ」

「そういうことだ

ディアナは呆れたように言つて、足元に置いてあつた分厚い魔法書を手に取つた。

「お前の使える属性は、火、雷、闇、と言つたところか。攻性魔法に関してはどの属性もそれなりに使えるようだが、威力、効率の点ではこの三つが抜きんでている。逆に、補助系統の呪文は属性に関わらずほとんど使えるようだがな」

こんな所も出鱈目だな、と眩ぐディアナに苦笑するしかない。

ディアナの言う通り、俺の特性は攻性魔法に偏つてゐるらしい。初日に魔弾の射手が使えるようになつたのも、これが関係しているのだろう。もつとも、補助系統の魔法がほとんど使えない以上、誰かのサポートがなければ長時間戦うことは出来ないのだが。

「とりあえず、この三つの属性に絞つていぐぞ。といつても、防衛戦までに修得できるのは一つか二つだけだろうがな。統也、希望の

属性はあるか?」

「そりだなあ、ディアナから見て一番短期間で行けそりなのはどれだ?」

「適正から判断するなら、火、だらうな」

「だつたら、火でいくか。中途半端になるよつは、少しでも完成度を上げた方がいいだらうし」

「ほつ、珍しく真つ当な意見だな」

「変ナモンテモ食ッタンジヤネエノカ?」

「どいつもこいつも好き勝手言いやがつて。俺だつてそれくらこのことは考えてるつての。」

「オイ、それじやあ俺がいつもバカげた」とぱつかり言つてゐた
いじやねえか」

「ふん、私が気付いていないとでも思つてゐるのか?」この修行以外に一人で隠れてやつてゐるような奴が言つても、説得力の欠片もないぞ」

「うう……」

半眼で睨まれ、思わず言葉に詰まる。

「気付いてたのか……」

「当たり前だ。まったく、お前は修行と苦行を勘違いしてゐんじゃ
ないのか？この間のように魔力切れで倒れても知らんぞ？」

追い打ちをかけられ、両手を地面に突いてうなだれる。

「まあ、今更何を言つたといひで聞かんのは分かつてゐるが、そん
なことを続けていたら近いうちに死ぬぞ？」

「ついでつき殺しかねない攻撃を仕掛けた奴のセリフとは思えんね」

「うるさい」

せめて一矢報いようと放つた一言も、ティアナの一睨みであっさり
斬つて捨てられた。

師匠、アリア、俺はこの吸血鬼な金髪少女には勝てないようです。

「ほら、こつまでそんなことをしてくる。やつやくと始めるわ。……
まずはこのあたりから行つてみるか」

そう言つて魔法書を開いて見せるティアナに、気を取り直して立ち
上がり、ティアナの示すページに視線を落とす。何やら小難しそう
な事が書かれているが、全部読むのはめんどくさいので重要そうな
ところだけに目を通す。

「えーと、なになに。燃え盛る浄化の炎」

「なつ、おこ、よせつ……」

「我が手に宿りて其を食らい尽くせ。紅焰つ

ディアナが何か言つていたようだが、無視して詠唱を完了させる。頭上に掲げた右手を振り下ろすと、かなりの魔力が吸い出されいくを感じた。しかし何も起こらない。首をかしげていると、ぽかんとしていたディアナとヴァルが噴き出した。

「ぐぐぐぐぐ、あつはつはつは。な、何をしているんだ?
?ぐぐぐ……」

「ケケケケケケケ、面白スギルゼ侍ツ」

笑い続ける一人と一体にムツとして、先ほどよりも生きよいよく右腕を振り下ろした。すると肘のあたりを起点として、右手が紅蓮の炎に包まれる。そのまま地面に叩き付けるように振り抜くと、炎が爆発的に肥大化し巨大な火柱を形成した。

「なつ」

ディアナの驚愕の声を無視して、しなりながら振り下ろされた火柱が大地に叩きつけられた瞬間、轟音とともに土煙が舞い上がった。

「「ごほつ、」」ごほつ。な、なんだこれ……」

「ば、バカ者つつつ！殺す氣かつつ！」

呆然と呟いた俺に物凄い勢いで掴みかかってきたディアナが、目に涙を浮かべながら今にも泣き出しそうな声で叫ぶ。

「そ、そんな」と言われたって、俺だってこんなことになるなんて……

「……」

目の前の大地に穿たれた巨大なクレーターを開いた口がふさがらない。上級魔法の桁違いの破壊力に言葉が出ない。この世界の魔法師と呼ばれる連中は、こんな恐ろしいものを使つていうのか……。

「……お前、本当に人間か?」

「ディアナがこぼした弦きに、一瞬体が強張る。

「本当に、どこまで出鱈田なんだ……。初めて使つた魔法でここまでの破壊力を吐き出すなど。信じられん……」

単純に驚いているだけのような様子に、思わず安堵の息を吐く。そんな俺の様子を不審に思つたのか、ディアナが不思議そうに見てくるのに気付かないふりをして、何事もなかつたように口を開く。

「一体何だつたんだ? 一回田は何も起こらなかつたのに……」

ディアナはそれ以上追及することもなく、思案顔で顎に手を当てた。

「ふむ、一回田の段階で発動したのは確かだろ。問題は、なぜその時すぐに放出されなかつたのか、ということか……。統也、何か気付いたことはないのか?」

「気付いたことつていうか、一回田は一回田よりも強く腕を振り下ろしただけなんだよな……。そこに何があるんじやないか?」

一回田と一回田の違いといえば、それくらいしか思い当たらない。

「分からん以上は仕方がないな。こいつを使うときは可能な限り強く腕を振る、か。こんなケースは初めてだぞ。本来魔法の発動に外

的要因は関係ないはずなんだがな……。まあ、そもそも出鱈田なんだ、この程度の例外は気にするだけ時間の無駄だな

「人の」と出鱈田出鱈田言つなよ

「実際お前は出鱈田なんだ、事実を言つて何が悪い

「ディアナの呆れたような物言いに反論できない。認めたくないが、ディアナの反応を見る限り俺は本当に出鱈田なのだろう。ヴァルも最初に会った時に同じようなことを言つていたわけだし。どうやら、俺はどこまでも異端らしい。

「消費した魔力量と威力から見れば、まあまあと言つたところだな。もつとも、威力を調節できないようでは実戦では使えんが。とりあえず、こいつをある程度コントロール出来るようになるまで次はお預けだな」

そう言つて今日の修行の終わりを告げたディアナを追つてゲートへ向かう。

その途中、先程自分で作ったクレーターを見て、背筋が寒くなつた。上級魔法であれだけの威力を生み出すのだ。もし純粹な魔力が暴走したらどれほどの破壊をもたらすのか、考えただけでもぞつとする。無意識に右手首のリストバンドを握りしめていた自分に苦笑する。何を恐れているんだ。これを使わなければならぬような事態になれば、それ以外に選択肢はないということ。そんなことになる前にけりをつけねばいい。そのための修行なのだから。

胸にわだかまる不安を押し殺し歩き出す。今は自分に出来ることをするしかない。それが、俺を送り出してくれた師匠やアリア、この世界で俺を受け入れてくれたディアナたちに報いることになるはずだから。

防衛戦が一週間後に迫った朝、いつものように体術のトレーニングをしていると、背後に誰かの気配を感じた。すぐそばの木の枝にかけたタオルを手に取り汗を拭いながら、上着のポケットから煙草を取り出し火をつける。その気配はある程度まで近づくと足をとめた。こちらに気付いたらしい。敵意を含んだ鋭い視線が背中に突き刺さる。しばらくこちらを窺つた後、再び動き出した気配に向き直りながら声をかける。

「つれないなあ、挨拶くらいしてくれてもいいじゃないか」

突然かけられた声に驚いたのか、びくりと動きを止めた人物に苦笑する。

「早朝練習か？ 精が出るな」

「……僕より早い時間からやっている人に言われたくないません」

相変わらずの口調とそこに込められた敵意にため息を一つ。嫌われているとは分かっていても、ここまで露骨に嫌そうな顔をされると流石に凹む。気を取り直して出来るだけ何でもない風を装つ。

「あんまり無理するなよ？ 姉さんが心配するぞ」

「あなたには関係ありません」

「そりやそりや。……ただな、あんなにいい姉さんを悲しませてみろ、俺がお前をぶつとばしてやる。てめえだけが不幸見てえな面し

てんじゃねえぞ、ガキ」

思わず口調が乱暴になってしまったことを反省しながら、怒りに震える菊川弟の様子に、結果オーライだったといふことにしてもおく。

「……つ。あんたに、あんたに何がわかる!」

あの時と同じように突然口調が変わり、憎しみが渦巻く相貌に眉をひそめる。

「何も知らないくせに!俺たちがどんな目に遭つたか、何も知らないくせに!偉そつなことを言つな!」

「ああ、お前に何があったかなんてしらねえよ。けどな、お前の姉さんは別だ。お前、あいつがどんな思いでお前を連れて逃げたのか分からねえのか?お前はいいよな、里を襲つた人外を恨んでりゃいいんだから。あいつが誰を恨んでるか知つてるか?」

「え……?」

「あいつ自身だよ。逃げることしか出来なかつた自分を、復讐に走るお前を止められない無力を。憎んでると言つてもいい。お前はそれでいいのか?」

呆然と立ち尽くす菊川弟の姿に胸が痛む。

自分の言つた言葉が、どれほどこいつを苦しめているか、それは分かっている。それでも言わなければならぬ。復讐を果たすかどうかに関わらず、このままではこいつにとつても氷雨にとつても良い事など何もないのだから。たとえ俺が恨まれることになつても、放つておくことなどできはしない。

「よく考える。自分がどうしたいのか、何をするべきなのか。俺が言えるのはそれだけだ」

そう言い残し踵を返す。どんな答えを出すのか、それはすべて菊川弟次第だ。どんな答えを出したとしても、俺に口を挟む権利はない。そこから先はあの一人の問題なのだから。

「どの口がそんなことを言うんだか。人のこと言えた義理じゃないってのに」

らしくないことをした自分に苦笑する。自分のしたことを棚に上げて何を偉そうに。

「はあ、とんだ道化だよ、俺は」

「まつたくその通りだな」

予期せぬ返答に驚いてあたりを見回すと、五メートルほど離れた所に生えた木の枝に腰かけるディアナの姿を見つけた。向こうにも俺と同様に驚いたような顔をしている。

「なんだ、気付いていなかつたのか」

「ああ、全然気付かなかつた。……もしかして、聞いてたのか？」

「何のことだ？」

にやにや笑いながらからかうような聲音でそうこうつてディアナを見て確信する。

絶対聞いてやがつた。

次に飛んでくるであるづからかいに肩を落としている、いつの間にか目の前まで来ていたディアナが口を開いた。

「相当なお人好しだな、お前は」

皮肉るわけでもなく、しようがないといわんばかりに苦笑を浮かべて言う。ディアナに思わずその柔らかそうな頬をつねる。

「い、い、いやにやにする！」

暴れるディアナの頬から手を離すと、赤くなつた頬を抑えながら涙目で睨みつけてくる。

「痛いだらうがつ、一体何のつもりだ！」

「わ、悪い。ディアナが珍しいこと言つもんだから、これは夢なんじやないかと……」

「く、お前が私をじうじう田で見ていたのかよく分かつた」

どうやら怒らせてしまったようだ。もつとも、涙目で上目遣いに睨みつけられても全く怖くないのだが。とはいえ、怒らせたままでは後が怖いので、妙に微笑ましい光景に後ろ髪引かれながらも機嫌を直す努力をすることにした。

「まあ、余計な御世話だつてことはよく分かつてゐるんだけどな。あいつらはまだ子供なんだ。復讐なんてものに囚われるなんて可哀相だろ。子供が子供らしく暮らしていけるようにするのが大人の仕事だ。もつとも、俺なんかじや力不足もいいところだらうけど」

何やうとも恥ずかしい事を言つた気がして照れくさくなつた。
正直、子供らしい暮らしなんて言つても、それがどんなものなの
分からぬ。それでも、少なくとも、そこに復讐なんてものは必要
ないはずだ。

「やはりお前はお人好しだ。それもどびきりのな

呆れたよつて言つて『ティアナは歩き出した。

「ほら、早く来い。腹が減つた、朝飯にするぞ」

振り返りもせずに言つて『ティアナの後を追つて歩き出す。
さてさて、あの無愛想な少年は一体どんな答えを出すのだろうか。

「しつかり悩めよ、少年」

眩いた俺に向けられた不思議そつな視線に気付かない振りをして歩
く。

「何をニヤニヤしてこる」

じと目で見てくる『ティアナに笑つてみせる。

「別に何でもないさ。それより『ティアナ、朝飯は何がいい?」

「ほら、珍しいな、お前が私の希望を聞くなど」

口調はいつも通りだが嬉しそうに目を輝かせてこる。これが犬なら
千切れんばかりに尻尾を振つていることだらう。

「なんとなく気分がいいからな」

「うして、この姿だけを見れば、とてもではないが数百年の時を生きた大吸血鬼には思えない。」

ディアナもまた、理不尽な世界に翻弄された被害者の一人なのだ。こいつらが笑つて生きて行ける世界の為なら、降りかかる火の粉の盾になろう。

手を汚すのは大人の仕事だ。傷つくのは俺だけでいい。こいつらが笑つてくれれば、それだけで俺は笑つて生きていくのだから。

楽しそうにはしゃぐディアナを見ながらそう思った。

昼過ぎ、ディアナに押しつけられた見回りの為に、ヴァルを頭に乗せたまま街へ出た。

相変わらずの賑わいを見せる街中を適当に練り歩く。頭上に居座るヴァルのせいか、やけに視線が集中している。確かに、二十歳前の男が頭の上に人形を乗せているというのはかなりシユールな光景だろ。かなり居心地は悪いが、これも仕事のつちだ。

「あれー？鷹司先生じゃん。こんなところで何してるの？」

背後からかけられた声に振り向くと、数日前にひと騒動起こした少女、水瀬夕夏が居た。その隣には氷雨の姿もある。なるほど、二人が友達だというのは事実だつたらしい。

「仕事だ仕事。どこかの誰かさんが問題を起こさないようにな

どこかの誰か、という言葉に冷や汗を流す水瀬を無視して氷雨に声

をかける。

「よし、氷雨。弟君の様子はどうだ?」

「どこのお人好しおかげで大いに悩んでいるみたいだよ。一体どこの誰に何を言われたのやら」

いつも通りの笑顔で肩をすくめる氷雨の様子から察するに、俺のお節介は無駄にはならなかつたようだ。

「え、あれ? お一人さんってばひょとしてお知り合い? どう関係?」

せわしなく俺と氷雨を交互に見る水瀬に苦笑する。氷雨を見ると同じように苦笑しながらこちらを見ていた。どうやら俺に説明しようと言いたいらしい。面倒事を押し付けられた気がしないでもないが、初めて笑顔以外の表情が見られたということで良しとする。

「ここに共通の知り合いがいてな。その関係で俺がここに来てすぐ位に会うことがあったんだよ。言つておくが、お前が期待しているような関係じゃないぞ」

思つた通り無粋な推測をしていたのだろう、水瀬の目が泳ぐ。まあ、ここに位の年頃なら、色恋に並々ならぬ興味があつてもおかしいことではない。むしろ、全く無関心な方がおかしいくらいだ。

「そ、それにしても背高いよね。いくつ?」

あからさまにわざとらしく誤魔化し方だが、わざわざ指摘するまでもないだろう。

「んー、一八〇ちょい、つてどこじゃないか？測つてないからよく
分からんけど」

「それくらいだらうね、私が確か一七六だから」

「いいなー、私なんか一五六だよ？」

自分で振つておいて勝手に沈んでいく水瀬。

「いやいや、普通そんなもんだと思つぞ？氷雨がおかしいんだ」

「統也さん、流石にそれは酷くないかい？でもまあ、その通りだろ
うね。夕夏の場合はこれからまだまだ伸びると思つよ」

「やうかなあ……」

不安そうに言う水瀬に、顔を見合させて苦笑する。

中学生らしげ事柄に頭を悩ませる水瀬を尻目に、中学生らしからぬ
長身を誇る氷雨が口を開いた。

「ところで統也さん、その頭の上の人形はなんだい？」

氷雨よ、そういう話は一般人のいないところでしてくれ。下手に『
こちら側』のことを口にするわけにはいかないのだから。もつとも、
その手の質問に対する答えは用意してあるが。

「こいつか？こいつはただの人形じゃないぞ？」この大学院で作ら
れた人工知能を搭載したロボットだ。ヴァル、自己紹介

「オイ侍、ドウシテ俺ガソソナコトシナクチャナラナインダ」

「うわ、しゃべった……」

いつの間に復活したのか、目を丸くして、ヴァルを眺める水瀬とは対照的に、氷雨はなるほど、と呟いている。どうやらヴァルの正体が分かつたようだ。まあ、こいつの御主人たる金髪少女の正体と性格を知つていれば、すぐにでもわかることだろう。

ちなみに、先ほどの説明は決して嘘ではない。ヴァル自体は遙か昔から存在していたが、ディアナがこちらへ来てから、大学院で開発されていたロボットの素体にその魂を移し替えたのだという。もつとも搭載されているのは人工知能などではなくディアナが作り出した人工の魂だし、動力もディアナの魔力なのだが。

「オイ小娘、ジロジロ見テンジャネエゾ」

「……小娘つ？」

ヴァルに小娘呼ばわりされた水瀬は、どんよりとした影を背負つていじけてしまった。お氣の毒に。ヴァルの毒舌は慣れていない者は少しばかりきついだろう。

「ああ、水瀬？ 気にするな。こいつ照れてるだけだから

「オイ侍、勝手ナコト言ッテンジャネエ。バラスゾ」

「うるさい。今のはお前が悪い。そもそもお前にそんなことができるのか？」

一度も俺に勝つたことのないヴァルは悔しげに沈黙した。ヴァルが言葉に詰まるのは珍しいが、分が悪いことを悟ったのだろう。

視線を向けると水瀬が再び沈みかけている。憐れだ。

「と、統也さん、仕事の方はいいのかい？」

氷雨の言葉に時計を見ると、担当時間は五分ほど前に過ぎていた。それにしても、氷雨がどもつたのは初めてではなかろうか。妙に感慨深かつた。

「いや、もう終わりだな」

「やうなのがい？ そつこねば、少し喉が渴いたね」

そつ言つて俺を見る。俺に奢れと言いたいのだろうか、このとんでも中学生は。見れば、先ほどまで沈んでいたはずの水瀬も目を輝かせて頷いている。立ち直りの早い娘つこだ。つーか早過ぎだ。どうやらこの一人の中では、俺に奢らせることがすでに確定しているらしい。

「はあ、分かった、奢つてやるよ」

なんだかんだ言つてもやはり中学生。言い終わるか終わらないかのうちに相談を始めている。

年相応の様子に笑みが浮かぶ。

不思議なものだ、楽しそうにしているのを見るところひまでも楽しくなつてくるのだから。

急かすように手招きする一人を追つて歩き出す。

改めて再確認。これがあるから生きていける。

何故こんなことになつたのだろうか。

霧生の商業区にあるとある服屋。田の前には楽しそうにあれこれ物色する水瀬と氷雨。

事の発端は一人に連れられて入つた喫茶店での会話だった。回想開始。

『統也君って、いつもに来てそんなに経つてないんだよね?』

『そつだな、まだ一週間ちょっとか』

『でも珍しいね、こんなとひひで働くなんて』

『こんなとひひで……、自分で言うか?まあ、確かに自分で選んだわけじやにけど成り行きでな。着のみ着のままつて奴だ』

『え、そつなの?ってことは私服とかもなかつたりするの?』

『ああ、そつと言えば買つてないな。仕事用に多少は買つたけど、私服なんて買つてる暇なかつたからなあ』今思えば、この一言が余計だつたのだろう。

『へえ、そつのかい?』

『此處に来てから』つちかなり忙しかつたからな』

『なるほど……。氷雨』

『そうだね、夕夏』

『というわけで、これから統也君の私服を買いにいこーー。』

『さ、統也さん、行くよ』

以上、回想終了。

何が、というわけではなのは分からぬが、突然テンションの上がつた二人連れられこの店に入ったのが二十分钟のこと。それからというもの、二人は俺そっちのけで服選びに興じているというわけである。

「なんだかなあ……」

その呟きが聞こえたわけでもないだろ？が、一人はくるりと振り返つた。

その手には数ある商品の中から選び抜いたであらう数点の服。

「とりあえずこれ、行ってみよー」

とりあえず？

水瀬のセリフにうすら寒いものを感じたが、普段の五割増しで笑う氷雨に試着室へと追いやられる。

仕方なく着替えて外に出てみれば、揃つて頷く二人の姿。周囲の視線も心なしか集まっているような気がする。

「なあ、つかぬことを聞くが、まだやるつもりか？』

二人の様子を見る限りでは無駄な問いかけだろ？ それでも一縷の望みを託して口にした問いに対し、二人はとてもいい笑顔で頷い

た。

その後も着せ替え人形のごとく何着もの服を着せられ、結局解放されたのはそれから一時間後。途中、とてもではないが着る気にはなれないような派手なものまで引っ張り出してきたときは、全力でお断りした。その時不満そうにしていた二人が恐ろしい。

二人の気が済み、店を出た時には俺の財布は悲しいくらいに軽くなっていた。原因は会計の時に一人が当然のよう上乗せした数点の服。多分間違いない。

二人の惜しみない協力は今までの人生で一日に使った最高金額を大幅に更新してくれた。

疲れた体を引きずつてたどり着いたディアナ宅で待ち構えていたのは、非常に不機嫌な吸血鬼な少女だった。その日の修行は想像を絶するものだったことを追記しておく。

いつも通りの時間に目を覚まし、すぐ日付を確認する。

十一月三十日。

防衛戦を翌日に控えた今日の午後、学園全体を覆う結界を居住区、商業区などの一般人の生活区域まで縮小することになつていて。つまり、それから年が明け結界が元の強度を取り戻すまでの間、学園に住む魔法関係者は『大樹』を目標す魔物の大軍を相手に戦い続けなければならない。

ディアナを起こし、朝食を済ませてから儀式の行われる学園区の中央広場へ向かう。ヴァルは留守番だ。

俺たちが到着した時には、すでに防衛戦に参加する人達の大半が集結していた。

今回参加するのは総勢二二二名。ほとんどが指導教員だが、中には氷雨のような学生もいる。

たったこれだけの人手で丸一日以上戦い続けなければならないのだから、まともな休憩時間など得られないだろう。

その上俺は遊撃隊。此処にいる参加者の中でもかなり負担は大きくなるはずだ。消耗を抑えるような戦い方をしなければならないだろう。

防衛戦の過酷さを想像して肩を落としていると、森崎さんがやつてきた。

「やあ、調子はどうだい？」

「悪くはないと思いますよ？」

「当たり前だ、誰が鍛えたと思つていてる」

腕を組んでふんぞり返る「トイアナ」にそろって苦笑する。

「見ての通り人手が少なくてね。期待しているよ」

「まあ、出来る限りのことはしますよ。変に気負つて下手を打つのは嫌ですから」

あたりを見回しながら話す森崎さんにそう答え、ほかの参加者の様子を窺う。

どの参加者も一様に落ち着かない様子で、視線を彷徨わせている。彼らも結界の揺らぎについては聞かされているのだろう。少し離れたところにいる氷雨の表情からもわずかに硬さが見て取れる。

広場の中央には巨大な魔法陣が描かれており、その中に学園長以下数名の魔法師が円を描くように佇んでいる。足元の魔法陣から立ち上る燐光に照らされたその姿は、古の神話のワンシーンを連想させる。

ふいに元の世界での最後の光景が目に浮かび、目を逸らした。見上げた空は鈍色の雲に覆われている。夜になつて気温が下がれば雪が降るかもしれない。

「どうやらそろそろのようだ」

森崎さんの氣負いの感じられない言葉に視線を戻すと、魔法陣から燐光が溢れ出し広場一面に広がつていた。

学園長による詠唱が始まり、一層輝きを増す。目も眩むような閃光に手をかざす。

それが収まつた時、『大樹』へと向かう膨大な数の微細な魔力をとらえた。

広場に集まつていた参加者たちが次々に担当地域へ向かう中、それに続こうと走り出し、言い知れぬ圧力を感じ足を止めた。

見れば森崎さんやティアナ、高位の魔法師と思われる数名も同様に立ち止まっている。

相変わらず感じ取れる魔力は小物ばかり。それでもこの圧力には心当たりがあった。

恐怖。

生物のとしての本能に刻み込まれた、抗い難い感情。

視線を向けるティアナに頷き返し気を引き締める。

どうやら一筋縄ではいかないらしい。

心を落ちつけるべく息を一つつき、人気のなくなつた学園区を駆け出した。

「はつー。」

裂帛の気合とともに、眼前に迫つた鬼を袈裟に斬り、そのまま反転、勢いを殺すことなく背後の鳥族を横薙ぎに両断する。

魔物たちの第一波を退け、ようやく周囲から気配が消えた。結界の縮小からおよそ四時間。周囲は薄闇に覆われている。これまでに斬り伏せた魔物の数は百以上。

今のところはほぼ例年通り。大したダメージもなく、体力的にも何ら問題はない。

しかし、結界が縮小された瞬間から感じる得体の知れない圧力が気にはかかる。

今迄に感じたことのあるものとは違つ。茫洋としてあやふやでありながら、一切の偽りなくそこにいる。いることは分かっているのにその姿を見ることは叶わない。そんな存在感。

堂々通りを繰り返す思考にため息をつく。

そこでふと思つた。あの男はどうしているのだろうかと。

鷹司統也。突如霧生に現れた素性不明の魔法師。『ダーケ・ブリュンヒルト常闇の吸血鬼』の弟子。

そして何より、人でありながら人外の臭いを放つ男。初めて会つたあの日、対峙した際に見せた薄い笑み。思い出すだけで体が震えだしてしまう。

しかし、そこには一切の敵意も殺意も含まれてはいなかつた。否。なにもなかつた、と言つべきか。

殺意、敵意は言うに及ばず、人間らしい感情の一切が削ぎ落とされたような、そんな笑み。

かと思えば、人の生き方に口を挟み、よく考えると言い残して去つていく。

あの時の彼の眼には、間違なく感情が宿つていた。人として無くてはならない物が決定的に欠けているにも拘らず、どこまでも人間らしく振舞おうとする。

分からぬ。故に恐ろしい。

それでも、信じてもいいのかもしない。根拠もなくそう思つ。

あの男は言つた。自分には関係ない、だが姉さんは違うだろうと。あの日以来よく考えた。経験したことがないくらい悩んだ。そして氣付いた。

あの男の言葉に嘘はなかつたのだと。

姉に連れられて逃げた夜、自分は何を考えていた? ただ震えるだけで、何も考えられなかつた。焼けた里を目の当たりにして、姉が何を思ったのかも。

その時のこととを今でも悔いでいることにも氣付けなかつた。いつも変らぬ笑顔の裏で自分を責め続けていることも、その笑顔が時々自嘲するそれに変わることを知つたのもあのあとだ。

知らず知らずのうちに姉を苦しめていたことに愕然とした。

それを教えてくれたのはあの男なのだ。自分のためなどではなく、姉の為に。

その上で言つたのだ、考える、と。

穏やかな微笑を浮かべ、弟子の成長を見守る師のよつた眼差しで。深い悲しみを押し殺して。

そこで気付く。あの男の態度は父のそれに酷似していたことに。父も僕に何かを強制することはなかつた。僕に才能があつても、修行をするかどうか、父の後を継ぐかどうか、最後まで僕に考えさせた。

自然と笑みが浮かぶ。なるほど、それなら納得がいく。

「涼、大丈夫かい？」

背後から聞こえた声に答えながら振り返る。

「うん、大丈夫だよ姉さん。そつちは？」

姉さんは一瞬驚いたような顔を見せてから、いつものように笑った。

「いつも問題ないよ」

「いまやらになつて思う。姉さんは口調と表情が一致していない気がする。どうでもいいのだけれど。

そう言えども、姉さんはあの男を好いていたつ。そう考へるとなんだか面白くない。

だから笑つてみた。あの男のよう。

もう一度姉さんを悲しませないよう。

「ふむ、今のところは問題なし、かな」

「そうみたいですね。どうも順調そうですから

各所に設置されたモニターの映像と定時連絡の内容に耳を通しながらの言葉に、対面に座る統也君が答える。

ここは学園区の中心部に置かれた、日本魔法協会本部内の一室。遊撃隊の本部として割り当てられた部屋だ。

今この部屋にいるのは、僕ら一人を除いて十三人。全員が僕ら同様、報告の内容に目を通し、些細な異常も見逃すまいと目を光らせている。もつとも、時々統也君を窺うような素振りを見せてはいるのだが。当の本人はそんなものはどこ吹く風、といった様子で次々に報告書の束を捌いている。

その仕事ぶりは流石としか言いようがない。何しろ、敵の第一陣をほぼ損害無しで撃退できたのは彼の働きによるところが大きいのだから。

敵のわずかな動きを見逃さず、防衛員の配置を変更することで、孤立を防ぎつつ効率よく撃退していく。時に纖細に、時に大胆に。それも、単純に命令するわけではないのだ。あくまで判断は防衛員に任せ、必要な情報と助言によって自身の求める回答を導かせる。こうすることで反発を防ぎつつ、相手に自分の存在を認めさせる。実際に上手い。

もちろん僕にも同じようなことは出来る。しかし、それは『こちら側』で二十年近く生きてきた経験によるものだ。

聞けば、統也君が『こちら側』で活動を開始したのは十四の時。今のが十九だから、まだ五年ほどしか経っていないことになる。無論、彼の話が事実だという前提に基づいての話ではあるが、外見から察するに今現在十九歳であることは事実だろう。つまり、どれほど長く見積もっても『こちら側』で生きて来た年月は十年余り。僕の半分程度だ。

真剣な眼差しで報告書を読む統也君を見る。

実力、経験ともに僕に匹敵するであろう青年は、どれほどの修羅場を潜り抜けてきたのだろうか。その横顔から窺い知ることは出来ない。

「ん？ これは……」

眉をひそめて呟く統也君のただならぬ様子に思考を断ち切る。

「どうかしたのかい？」

統也君は顔を上げると、険しい表情のまま報告書を差し出す。

「何の根拠もないんですけど、何か引っかかるんですよ……。
嫌な予感っていうか、胸騒ぎっていうか」

受け取った報告書に目を通す。しかし、これと黙って不審な点はな
いように思えた。

「考えすぎじゃないのかい？」

「やつだといいんですけど……」

答える声も歯切れが悪い。おそらく、今もめまぐるしく思考を巡ら
せているのだろう。

残念ながら僕には感じられないが、彼はある程度確信しているのだ
ろう。これから何かが起こるだろうとこうことを。
何ら根拠はないが、報告書と映像といつても限られた情報から敵の
動きを的確に把握した彼の勘ならば、信じてみる価値はあるかも知
れない。

「じゃあこうしよう。行動中の遊撃隊に警戒を促す、これならば僕
らの権限だけで事足りる。それに防衛員の不安を煽ることもないだ
うからね」

その提案に不承不承ながら頷く統也君に苦笑する。内心では居ても

立つても居られないのだろう。先ほどまでの落ち着きが嘘のようこそわそわしている。

「やう言つわけだから、統也君、ディアナに伝えに行つてくれないか？下手に携帯を使うと、ディアナの周りに誰かいたときに不安がらせてしまうかもしないからね」

そう言つて笑いかけてやると、あからさまにその表情が明るくなつた。しかし、すぐに険しい表情に戻る。

「でもそれじゃあ……」

「この中で一番機動力があるのは君だ。もし何かあつたらすぐに駆け付けられるだろ？」「

しばらく悩んでいた統也君だったが、こちらの意図を読み取つたのかしつかりと頷いた。

「分かりました、ここはお願ひします」

頭を下げてから部屋を飛び出していく後姿を見送る。

実際のところ、先程の理由は後付けのものだ。ディアナの性格上、誰かと行動を共にすることは考えにくく、では本当の理由とは何か、簡単なことだ。

統也君は自分と関わりのある者が傷つくことを酷く恐れている。本人から直接聞いたわけではないが、先程の様子を見ていればすぐに分かる。もちろん、それを気にするあまり仕事が疎かになるようなことはないだろうが、精神状態が効率に及ぼす影響は決して小さくない。

残念ながら、今の霧生に彼ほどの実力者は数えるほどしかいない。

いまだに不審な点の残る統也君がここにいることがそれを証明している。ここで彼が潰れてしまえば、不測の事態が起こった時にかなりの犠牲が出てしまうだろう。そのための休息であるという面が大きい。

実力、経験ともにかなりの物ではあるが、彼はまだ若い。考え方のリスクは可能な限り取り除くべきだらう。

「余計なお節介なのかもしれないね……」

呟き、苦笑する。先程から様子を窺っていた数人に、何でもないと手を振つて報告書に視線を戻す。

ちらりと田をやつたモニターに映つた漆黒の青年を見ながら思ひ。そう言えど、彼の戦闘を見たことはなかつた。

統也君の実力を見る機会に恵まれたことに年甲斐もなく心を躍らせながら、田の前に積まれた書類の山から新たな報告書を手に取つた。

最初にそれに気付いたのは涼だつた。

「姉さん、来るよ。かなり多い」

珍しく焦燥を隠そつともせず告げられたその言葉に、拳銃を握る両手に力が入る。

「どのくらいだい？」

「分からぬ。ただ、じつに向かつての奴だけでも百や一〇〇じやきかないと思ひ」

涼の魔力探知能力は私などより遙かに高い。おそらく学園内でも制

度、範囲ともに最高水準だろ？

その涼を以てしても捉えきれない数の魔物が向かっている。それも、涼の口ぶりから察するにここだけではないのだろう。

はつきり言つて百や一百なら私たち一人だけでじうにでもなる。涼もそれは分かつてゐるはずだ。にもかかわらず、涼は明らかに動搖している。そこから導かれる結論は一つ。

かなりますい。

どれほど力があつても、獵の得物は一振りの野太刀のみ。私も両手に構えた拳銃だけだ。数で押されれば、いずれ各個撃破の憂き目に遭うだろ？

「考へても仕方ないか。涼、行けるね？」

「 もちろん

前方を見据えながらのたつた一言の肯定。

目を凝らせば木々の向こうに蠢く影が見える。確かに多い。私が探知できるだけでも百を越えている。その先にはより多くの異形がいるのだろう。

神経が研ぎ澄まされる。

邪魔なノイズが消え去り、視界が薄い蒼に染まる。

風の動きさえも手に取るように見通せる世界に、一発の銃声が響いた。

それを合図に涼が駆ける。

瞬く間に距離を詰め、上段から一閃。崩れ落ちる鬼には目もくれず、さらに奥深くへと切り込んでいく。

涼の死角から迫る異形を両の拳銃で片つ端から薙ぎ払う。

風の流れの変化に振りかえり、眼前に迫つた鳥族に至近距離から銃弾を叩き込む。

唸りを上げる剛腕を左の銃把で受け流し、上段の回し蹴りを叩き付

ける。

「撃つだけが能だと思わないでくれるかい？」

銃弾を撃ち込み、回し蹴りで薙ぎ倒し、銃把で殴りつける。際限なく現れる異形に容赦なく銃弾の雨を降らせていく。

「ちっ、弾切れかっ」

舌打ちと共に駆けだす。銃が使えない以上、涼との距離を詰めなければならない。

立ちふさがる鬼に焦燥が募る。

涼を見れば、眼前の鬼を袈裟に斬り伏せたところだった。背後には別の一体。涼は気付いていない。涼の胴よりもなお太い剛腕が掲げられ、唸りを上げて涼に迫る。そこでようやく自身の窮地に気付き飛び退こうとするものの、背丈よりも長い野太刀を振り切った態勢である涼にそれが出来るわけもない。

涼との距離はおよそ十メートル。とても間に合ひ距離ではない。

私は涼まで失つてしまうのか？あの日以来修行を欠かしたことは無かった。必死に鍛えたところで、才能のない私に涼を守ることなど出来ないのか？

絶望が心を支配する。

そして、剛腕が振り下ろされた。

「本当に出鱈目な奴だな、あいつは」

眼前で蠢く無数の異形を薙ぎ払いながら嘆息する。
統也が警戒を強化するように言つてきたのはほんの十数日前。
その必要はないと思っていたが、従つて正解だつたようだ。
各方面に総勢千を超える大群が現れ、どこもかなりの乱戦になつて
いるらしい。

大半は下級の鬼や鳥族のようだが、数体の中級妖魔も確認されたと
いつ。

どちらも近年、少なくとも、私がここに来てからは無かつたことだ。

「それにしても嫌な予感、か……」

嫌な予感。統也が警戒の強化を命じた理由がそれだ。
確かに、長年『こちら側』で生きてきた者は、少なからずそういた
不穏な空気を感じ取ることが出来る。いや、それが感じ取れない者
は早々に散つていぐ、と言つた方が正確かもしない。

しかし、これは些か行き過ぎではないだろうか。

数百年の長きにわたり『こちら側』に携わってきた私にも、統也の
言う嫌な予感は感じられなかつた。それはこの霧生にいる魔法師や
傭兵も同じだらう。

統也の持つ、いわゆる第六感というものがすば抜けている、と言つ
てしまえばそれまでかもしけないが、仮にそうだとしてもここまで
都合良く行くものだらうか。

「まあいい、私には関係のないことだ」

鷹司統也という人物が一体何者なのか、ということに疑問を感じないと言えば嘘になる。あの男には謎が多くさうるのだから。

それでも、それは今考えることではないだろう。

あいつは、私が信じるに足ると認めた数少ない人物の一人なのだから。

それに、私は……。

自分の考えに顔が熱くなるのを感じた。

二度三度と頭を振り、思考を切り替えようと試みるが、一度頭に浮かんだ考えは簡単には消えてくれない。むしろ、一層思考が加速する。

周りに鬼どもがうじやうじやいるという状況で何をしているのか……ん？ 鬼ども……うじやうじや……？

「なんだ、簡単なことじやないか

思わず笑みが浮かぶ。

視線の先には何も知らぬ哀れな亡者ども。

「

貴様らに踊つてもらおうか。くくつ、せいぜい楽しませてくれよ?」

背後に迫る剛腕に気付いたあの時、死を覚悟した。

野太刀を振り切り、完全に動きの止まつた僕にそれをかわす術はない。

絶望に塗り潰された思考の中で、姉に謝つた。ごめん、と。しかし実際はどうだ。

無様にも尻餅をついた僕の視線の先、そこにあるのは漆黒の背中。なぜ彼がここに？

「生きてるか？菊川弟」

僕をこんなふうに呼ぶのは一人しかいない。しかし、彼は今本部にいるはずだ。

「どうして、あなたが？」

何とか絞り出せたのはそれだけ。それでも闇色を纏つた彼、鷹司統也は笑つて答えた。

「どうも嫌な予感がしたんでな。無理言って出てきたらこれだろ？
流石に焦つた」

その間も休むことなく群がる異形を屠つていく。

一切の無駄なく、この場に存在するすべてを見通しているかの”と
く縦横無尽に刀を振るつ。

その動きは止まることを知らぬ流水の如し。銀の剣閃が煌くたびに、
数体の異形が断末魔の叫びを上げて崩れ落ちた。

「あー、とりあえず手伝ってくれねえか？流石に一人を守りながら
じゃきつい」

そう言われて初めて気が付いた。呆然とする僕の周囲にいた異形は
駆逐され、姉さんを取り囲んでいたモノたちも消え去つている。

「そ、そうだね。でも、残念ながら弾切れなんだよ

「やうなのか？」

まいつたな、と頭を搔きながら一元一体斬り捨てた。そのちぐは
ぐな姿に笑つてしまつ。

「じゃあ、ここで使えるか?」

差し出されたのは今まさに異形を斬り捨てた日本刀。かなりの業物なのだろう、美しい刀身がわずかな光を受けて輝いている。

かすかだが魔力も感じられる。アーティファクトだろうか?

「あ、ああ、一応使えるよ……?」

だつたら使うといい、と日本刀を地面に突き立て背を向ける。

「それは俺の父さんの形見だ、切れ味は保証する」

「統也さんはずいぶん大きい?」

刀を引き抜きながら尋ねる姉さんに、握った拳を掲げて笑う。

「心配しなさんな、俺にはこれがある」

右足をわずかに下げる半身の態勢で、両腕はだらりと下げたまま。構えらしい構えをとることもなく、一見すると隙だらけだ。しかし、細められた漆黒の瞳は前方に蠢く異形を射殺すかのよつて鋭い。

「おー一人さん、準備はいいか?」

剣呑な眼差しとは違い、何ら氣負いのない聲音。

「こつでもこつよ」「こつでもどつぞ」

ほぼ同時に発せられた僕と姉さんの声に「それじゃあ、行きますか」と言つてわざかに腰を落とす。

「無理はするなよ」

その言葉を残して鷹司統也の姿が消える。

直後、大地を揺るがすような踏み込みと共に一体の鬼が爆散した。刀を振るつていた時とは違い、立ち塞がるものを悉く叩き潰すかのような拳打の嵐。

そこに巻き込まれた鬼達は、見る間にその数を減らしていく。

「圧倒的だ……」

大半が鷹司統也に群がり、僕たちの方へ向かつてきたのは三割にも満たない。

数十の異形に囲まれてなお、その顔から余裕が失われることはなかった。

掌底が、拳打が、蹴撃が叩き込まれるたびに、炎に焼かれ、雷撃に苛まれ消え去つていく。

わずかな停滞もなく、暴風のごとく異形の群れを薙ぎ払う。

その動きが止まつた時、この場に居たのは僕たち三人だけだった。

「ふう、これで一段落かな」

百近い数の異形を殲滅した直後とは思えない軽い口調に気が抜ける。

「そつみたいだね」

姉さんも口調こそ普段通りだが、その口元がわざかに引き攣つたのを僕は見逃さなかった。

鷹司統也は背を向けたままポケットから携帯を取り出し、どこかに連絡を取っている。おそらく遊撃隊の本部だろう。他地区の状況を尋ねているようだ。

やがて安堵の息とともに携帯をしまい、振り返った。

「……は俺が受け持つから、お前らは今のうちに休んどけ。特に氷雨、弾切れじゃまずいだろ」

正直に言つて疲労はかなりのものだ。時間を確認すると午後六時過ぎ。配置に着いてからすでに六時間が経過してこることになる。深夜から明け方にかけて最も忙しくなることを考えると、そろそろ休息を入れた方がいいかもしね。

視線を向けてきた姉さんに領きを返す。

「せうだね、せうさせてもひつよ」

「ゆつくつ休めよ。まだ長いんだからな」

「あなたに言われるまでもあつません」

やつぱり姉さんと鷹司統也が話してると面白くなっこ。苦笑する鷹司統也に背を向けて歩き出す。

途中で一度だけ立ち止まり、振り返る「となく言つ」。

「……あ、ありがと、『じゃこました』

口に出してから後悔した。

ただでさえ恥ずかしいといふのに、そのあと沈黙がさらに羞恥を煽る。

ちらりと背後を窺つと、呆気にとられたような一人。

沈黙に耐えきれなくなつて足早に立ち去つたしたが、鷹司統也が口を開いた。

「そんなこと氣にしてたのか？」

思わず振り返ると、困つたような苦笑いを浮かべながら続ける。

「別にいいさ、そんなこと氣にしなくて。俺達は仲間だろ？仲間を助けるのに理由なんかいらない。しいて言つなら、俺がお前らを死なせたくなかつたからだ。まあ、それで弟君の氣が済むなら、礼は礼として受け取つておくけど」

そう言つて笑う姿に、姉さんが惹かれた理由が分かつた気がした。鷹司統也という人物は今まで出会つたどんな大人よりも純粹なのだ。子供がそのまま大きくなつたように純粹で、自分のことなど顧みず。おそらく、誰かを守ることで自分が傷つき倒れても、笑つてそれを受け入れるのだろう。

「……涼」

「ん？」

気付けばそう言つていた。

聞き取れなかつたのか首をかしげる鷹司統也に、もう一度はつきりと言づ。

「涼でいいです」

呆気にとられる鷹司統也。視界の端で苦笑を浮かべる姉さんに気恥

ずかしさを感じる。

視線を逸らしてしまってから、これではまるで照れ隠しではないか、と気付く。余計に恥ずかしくなった。

「ち、先に戻ります」

逃げるよひに歩きだしたといひで呼び止められ、仕方なく足を止めた。

「あ、おい、待てよ。俺の「」とも統也でいい……といつても、呼びたくなれば別にいいけど」

「そなな」というひに呼び止めるなよ、僕は早くここから立ち去つたいの」。

こちらの内心のことなど露知らず、と言つた様子で嬉しそうに微笑む姿にため息一つ。

恥ずかしがつてこる自分が馬鹿みたいだ。

「分かりました、では、統也さんと」

もういい、開き直った。

「ああ、分かった。しっかり休めよ?頼りにしてるからな、涼」

やつ言つて笑う鷹……統也さんに僕も笑つて返す。

「ええ。それでは、先に休ませてもらいます。統也さんもお気を付けて」

驚きを隠せないのか、姉さんが目を瞬かせているが、気にしない。

手を振る統也さんに軽く頭を下げる本部の仮眠室へ向かう。
妙に心が軽かつた。

これは認めてもらえたと考えていいのだろうか？

初めて年相応の笑顔を見せて立ち去る涼の背中を見送りながら思つ。

「お、驚きだ……」

「何が？」

呆然と呟いた氷雨に尋ねると、半ば予想通りの答えが返つてきた。

「涼が自分から名前で呼ばせるなんて、あの日以来なかつたんだよ。しかも、他人を名前で呼ぶなんて……」

あの日。それは一人の生まれ育つた里が燃えた日のことだろう。なるほど、と嘆息する。

今の涼の年齢が十二歳。つまり、ただ一人の姉を除く全てを奪われた時、涼はまだ十歳だった。俺の初仕事が十四の時だったことを考えると、彼の心の傷の深さは計り知れない。

俺のように、頼ることのできる大人がいれば良かつたのだろうが、当時彼の傍に居たのは姉である氷雨だけ。故に涼はその傷を抱え込まざるを得ず、他者に対して心を開くことが出来なかつた。

無論、氷雨にその責を押し付けるのは酷な話だ。彼女もまた被害者であり、何より子供なのだから。気を揉むのは大人だけでいい。と言つても俺自身まだまだ若造だが。

「へえ、快挙じゃないか。だったら、次は親しみを込めて『兄さん』とでも呼ばせてみるか

重くなりかけた空気を払拭すべく、殊更に明るく言つと、氷雨は驚いたように田を見開いた後、顔を赤くして俯いてしまった。熱でもあるのだろうか？

見えているのか疑問に思えるほどどの線田を見開く氷雨を微笑ましく思いつつやることを考えていると、これまた珍しくほほえと咳く。

「……これも無血覚なんだらうね。はあ、もう少し自分のことを理解してほしこものだ」

何かまさこじとを言つたのだろうか？

ちらちらと俺を見ながら顎に手を当てて呟く氷雨の様子に首を捻る。次に氷雨が顔を上げた時、その顔にはいつも通りの笑みが浮かんでいたものの、ビビが慄然としているようにも見えた。

「それじゃ、私もそろそろ行へよ」

「おつ、じつかり休んどけよ」

「……」

去り際、何かを呟いた氷雨だったが、それを尋ねる前に逃げるよう瞬動を使って立ち去ってしまった。

「ありや、嫌われちやつたかな？」

戦闘時でもないのに瞬動術を使ったことから考へても、さう考えるのが妥当だらう。

思わずため息が出る。

今までに拒絶されたことも忌み嫌われたことも数えるほどある。

それでも、やつぱり人に嫌われるのには辛いものだ。

「まあ、仕方ないのかもしれないな」

咳き、自嘲する。

仕方ない？何を馬鹿な。 そうなるべくしてそうなったのだ、これは当然のこと。

そう、当然なのだ。 光の中で生きる資格など俺にはないのだから。だからこそ、思う。

嫌われるのならそれでいい。 いくらでも嫌われてやろう。この手はすでに血に汚れているのだ。 妖魔と呼ばれる存在のそれではなく、紛れもなく人間のそれ。

そんな俺が今更何を躊躇う？

血に塗れた手に刃を握り、返り血にどす黒く染まつた外套を纏い戦場を駆ける。

俺に出来るのはそれだけ。

ならばそれを全うしよう。 光の中で生きるべき、彼女等の為になるのなら。

知らず、拳を握りしめていたことに気付き、苦笑する。

目を閉じ、深呼吸を一つ。

目を開くと、視線の先には無数の異形。 中級妖魔の姿も見受けられる。

中級妖魔が約二十。 下級に至っては数えるのも面倒だ。 この集団を相手取るにはあの二人では少々力不足。 単独で相手に出来る者はこの学園に十人もいないだろう。

そのうえ、一際大きな存在感を放つ鬼が一体。 上級妖魔だ。

左手首に右手を添え、一息に横に薙ぐ。 右手に玉兔の重さを感じながら両足に魔力を込める。

一息で距離を詰め、手近な一体を左の掌底で消し飛ばす。 身を翻し玉兔を一閃。 迫る数体の妖魔を両断する。

一瞬の停滞もなく、圧倒的な物量で襲いかかる妖魔を薙ぎ払つ。

「ほう、人の身でよくやると思っていたが、なるほど、そういうことだったか。気配が薄すぎて詳しくは分からんが、お主、混血だな？」

「それがどうした」

突然かけられた上級妖魔の声にこたえ、その巨躯を見据える。

三メートルに迫るうかといふその体躯からは、濃密な暴力の気配が漂つている。

その禍々しい空気に嫌悪を感じていると、後方に控え、指示を出すことに徹していた上級妖魔が下級妖魔の壁を割つて出てきた。それに呼応するように下級妖魔たちは後ろに下がり、円陣を形成。内側に残つたのは俺と上級妖魔だけ。

「何の真似だ」

「何、大したことではない。少しばかり手合わせをしてもらいたいだけだ。人間界に来るのも久方ぶりなのでな。計画の発動前に強者と一戦交えるのもまた一興と言つたところよ」

「計画？」

「こいつが今回の襲撃の首謀者か？」

あわよくば情報を得ようと口にした疑問の答えは、虚空から現れた大剣の一閃だった。

「些事に拘るでない。戦場に敵対する強者が一人あらば、する」とは一つ。違うか？」

「一騎討ち、か」

「メートルを超える大剣を携えおぞましい笑みを浮かべる大鬼に口角がつり上がるのを感じる。

それを了解と取つたのか、喜びを隠そつともせず大剣を振り回す大鬼。

「それでは始めよう。我が名は茨木童子。酒吞

4・童子が第一の配下なり」

「酒吞童子に茨木童子、ねえ。まさか実在していたとは……」

酒吞童子。鬼の姿をまねて略奪の限りを尽くした盗賊の名だったはず。

茨木童子に至つては、御伽草子の一節『酒吞童子』に登場する鬼だ。

どちらも空想上の妖魔だと思っていたが、少なくともこちらの世界では実在したらしい。歴史等に関しては、元の世界の知識は役に立たないようだ。

とにかく言えることはただ一つ。

「厄介な奴が出てきたもんだ」

下級、中級妖魔はともかく、上級妖魔は一種の概念存在だ。概念存在はその性質上、存在に対する信仰や恐怖が強いほど強大な力を持つ。

元の世界ではそれほど知名度は高くないが、こうして目も前に存在している以上、この世界ではそれなりに知られているのだろう。

そして、先程の名乗りに酒&#amp;#21534・童子の名が出来た以上、茨木童子の後には酒&#amp;#21534・童子が控えているとみた方がいい。

茨木童子でさえそちらの妖魔とは一線を画す力を持っているのだ。それを従える酒&#amp;#21534・童子の力とは一体どれほどのものなのだろうか、想像もつかない。

「考えるだけ無駄か」

「どうした、怖氣付いたか？」

「まさか、むしろ楽しみなくらいだ」

俺に出来ることは誰かの為に障害を排除することのみ。考えるのは専門外だ。

右手に携えた玉兎を茨木童子に突き付け、名乗りを上げる。

「俺は鷹司統也。霧生学園中等部の新任指導教員だ」

自分でもどうかと思つ名乗りだったが、意外にも茨木童子は気に入つたらしい。驚きをあらわにした後、天を仰いで豪快に笑いだした。

「がはははは、お主、なかなか面白いではないか。まさか名乗り返してくるとは。やはり人間界に出てきて正解だったようだ、お主のよつやな愉快な女子に会えるとは」

「……貴様、今何と言つた？」

聞き捨てならない言葉を聞いた気がするが、俺の勘違いかもしだい。

「愉快な女子、と聞こえた気がするが、俺の気のせいいか？」

「それがどうかしたか？お主ほど愉快な女子は初めてだ」

どうやら聞き間違いではなかつたようだ。

今にも飛び出しそうになる足をあしらひながら踏み止める。玉兔を握る右手に力を込める。

「ん? どうした、何を怒っている?」

いや、俺は怒つてなどいない、とても冷静だ。そもそも怒る理由など無いだろう。

「まあいい。お主、我が勝つたら我が妻とならんか？何、損はさせんぞ？」

「……つざけんなああああああああ！俺は、男だああああああ！」

認めよう。俺は今怒っている。非常に頭にきてる。

る。

手の玉兎をその首筋へと滑らせる。

「なに？！」

頭上からの驚愕の声を聞きながら、仰け反って一閃を回避したこと
でがら空きとなつた胸へ槍の刺突のごとき蹴りを叩き込む。

「ゲンウ！」

踏ん張ることも出来ず後方へ浮き飛ばされる茨木童子に、痺れたままの左手を向け、無詠唱魔弾の射手で追撃。その余波に巻き込まれたのか、数体の妖魔の断末魔の叫びがあがつた。

「おお、いてえ。なかなかやるようだな」

「まつたぐの無傷でよく言つよ、うれしくも何ともねえつて……」

土煙の中から現れた茨木童子の言葉に肩を落とす。

装束こそところどころ焼けているものの、その体は無傷。

先程の魔弾の射手は、無詠唱とはいえ中級妖魔相手なら十分すぎる威力があつたはず。それを受けて無傷ということは、対魔法防御力もかなりのものだ。並の魔法師では、手傷どころか傷一つ付けられないだろう。

体をほぐすように大剣を振る茨木童子の頑丈さに呆れないと、次はこちらの番だと言わんばかりに雷鳴のような咆哮と共に突進してきた。

上段から振り下ろされる大剣を間一髪のところで回避。桁違いの膂力で叩き付けられた大剣は大地を穿ち、砕けた大地が無数の弾丸となつて周囲を蹂躪する。

「ちいっ、何つー馬鹿力だよ」

受けに回らなくて正解だった。あんなものまともに受け止めたら、俺の体は玉兎もろとも粉碎されていだらう。

あれだけの大剣だ、大地に突き刺さればそう簡単には抜けないだろうと踏んでいたが、周囲の大地が砕けるほどの馬鹿力のせいでも望み薄。さらにその馬鹿力による剣速の速さも相まって、正面から打ち合うのは自殺行為だ。

そんな思考に耽っていたのがまづかったのか、距離を取ろうと後ろに跳んだ時には、目の前には人の頭ほどもある巨大な拳が迫っていた。トラックに撥ねられた方がまだましではないかと思えるほどの途轍もない衝撃に、声を上げることすら出来ずに吹き飛ばされる。

「かはつ……」

三十メートルは飛ばされただろうか。

霞む視界にこちらへと歩いて来る茨木童子の姿が映る。
幸いにも玉兎を放すことにはなかつたようだ。

「ぐつ……」

安堵の息を吐きながら体を起こそうとしたところで全身に激痛が走つた。

あばらが数本折れているようだし、咄嗟に胸をかばつた左腕は感覚すらない。まだ付いていることは見て分かるが、おそらく完全に粉砕されているのだろう。ぴくりとも動かない。
それでも気力を振り絞つて立ち上がると、大剣を肩に担いで近付いてきた茨木童子が足を止めるのが見えた。

「ほう、我が一撃を受けてまだ立ち上がるか。さすが混血、脆い人間とは違つようだな」

「へ、ひるせえよ」

ち、目が霞みやがる。

切れた額から流れる血をいくら拭つても、とめどなく流れる血は容赦なく視界を奪う。

立ち上がったまではいいが、折れたあばらが痛むは左腕の感覚が戻

つてきてやつぱり痛むはでとても戦える状況ではない。

こつじしている間にも激痛と出血で刻一刻と体力、集中力が奪われていく。

魔力で代謝を活性化させてはいるものの、そんなものは氣休めに過ぎない。

こんなことなら治癒魔法もまじめにやつておけばよかつた。とは思うが、今更後悔したところで何が変わるわけでもない。

あれをやるしかないのか？

だが、左手がこのままじやそれも出来ない。
どうする……。

「何を考えているのか知らんが、いじませだ。さあ、我と共に来てもらひやぞ」

「……この野郎、俺は男だつてんだろーが」

そう呟いてみるものの、もはや抵抗する力はない。

伸ばされる腕を見遣りながら諦めにも似た感情が湧き上がるのを感じた。

それを押し殺し、必死に打開策を模索する。

ここは奴に従つて、左腕が動くようになるのを待つ。そうすれば何とかなるだろ？

しかし、その場合奴の言つていた計画とやらが発動するまでに間に合つかどうか。

この時期にここへ来るということは、田のは霧生の靈脈だろ？。そうである以上、奴らの計画が発動した場合、少なくともこの霧生市は壊滅。ここに暮らす多くの命も失われることになるだろ？。

それだけは阻止しなければならない。これ以上救える命を失うわけにはいかないのだから。

「はは……、悩む必要なんかどこにもないじゃないか

やる事など既に決まっているのだから。

激痛を堪えて左手を右手首のレザーバンドに繋ぐ。

「リリース・アクセル・イグズイウス」

父さん、ごめん。約束、また破っちゃまつ。許して……くれるよな？

「オーヴァー・ド…つー？」

爆発、閃光、轟音。

突然の出来事に受け身をとることも出来ず、無様に吹き飛ばされる
俺の耳にこちらに来てから聞き慣れてしまった声が聞こえた。

「契約の下、我に応じよ氷の女王」

「ディアナ……？」

「来たれ、永久の暗闇、終焉の序曲。奪い尽くせ『アブソロート・ゼロ凍てつく世界』！」

これは、広範囲殲滅呪文？ディアナの奴、本気だな。当たり前か、
いくらディアナといえど、手を抜いて勝てる相手じゃない。
ディアナの詠唱に応じるように巨大な氷柱が出現し、それを起点に
大地が、大気が凍りつく。

「終わりだ、ゼロ・インパクト！」

神の意に従い、凍りついた世界が砕け散った。

俺のすぐそばに降り立つたディアナは、油断なく崩壊の中心地を注

視している。

「ぐう、お主は『常闇の吸血姫^{ダーク・ブリュンヒルト}』か。なるほど、流石最古の吸血鬼、と言つたところか」

「なつー。」

「ふん、貴様こそ、流石大鬼神。この程度では消せんか」

あいつは化け物か？あれだけの大魔法を受けてまだ生きてやがるー。

「いやいや、さしもの我も直撃を受けていれば危なかつた。ほれ、この通り、左腕を持っていかれた」

「当たり前だ。一撃で消し飛ばすつもりで打ち込んだのだ。それで無傷などと、そんなことがあつてたまるか」

肩口からなくなつた左腕を示しながら笑う茨木童子に、不機嫌さを隠そともせず憮然と言い放つ。

「それで？続きをやるのか？やるといつながら、望み通り消し去つてやるぞ？」

「いや、こゝは退かせてもらひ、こさか興が削がれたのでな。黒き娘よ、お主は必ず我がものとする。それまで待つておれ」

そう言い残し、茨木童子はその姿を消した。
あの野郎、最後までそれかよ。

「ん？ 黒き娘？ 一体何のことだ？」

首をかしげながらそう問いかけるティアナ苦笑で答える。正直体を動かすのも億劫だ。

「おい統也、どうした……つーおい統也っ、しつかりしつっ」

それに気付いたのか、駆け寄つてくるティアナに心の中で謝りながら、出来る限りの笑みを見せる。

「…………」

ティアナが何か叫んでいるが、よく聞こえない。

霞む視界に移つたティアナは顔をくしゃくしゃにして、頬には一筋の涙。

ティアナにそんな顔をさせてしまつたことが悲しくて、こんな俺の為に涙を流してくれていることが嬉しくて。

俺の顔を覗き込むティアナの頬を撫でる。

ティアナ、ごめん。それから、ありがとう……。

ちゃんと言葉になつていただろうか。

そんなことも分からぬまま、俺の意識は闇に落ちた

「「めん。それから、ありがとう……か。まったく、そんなことより自分の心配をしろと言つのに。このバカ者が」

あのあと、謝罪と感謝の言葉を残して意識を失つた統也を抱えて本部に戻つてから六時間。すでに日付は変わり、一年の最後の一日が始まっている。非戦闘要員によつて治癒の魔法が施され、治療が済んだものの、統也は一向に目を覚まさない。

それにしても、と思つ。

あの上級妖魔、一体何者だ？

あの場では知つたようなことを言つたものの、その正体がさっぱりわからない。

統也があそこまで追い込まれたことや私の最大級の一撃を受けてなお平然としていることから考えて、かなりの大物、それも伝説級の妖魔だろう。それはいい。

それよりも問題なのは、私が割つて入る寸前に感じた強大な魔力。おそらく全開の私よりも強いだろうそれから、妖魔の魔力のような邪なものは感じられなかつた。

どちらかと言えば人の物に近い魔力。それが意味するものは一体なんだ……？

「う、うう……」

呻き声に視線を下げると、うつすらと目をあけた統也が間抜けな顔で天井を見上げていた。

「目が覚めたか？」

私の声にこぢらを見た統也は、数回瞬きした後飛び起きた。

「ディアナっ、あいつはっ、あいつはどうしたっ」

私の肩を両手で掴み、これでもかと顔を近づける統也に、思わず顔が熱くなる。

直後、計っていたとしか思えないタイミングでドアが開き、菊川の小娘と小僧、その後ろから健吾が顔を覗かせた。

数秒の沈黙。最初に動いたのは私だつた。

ドアを、正確にはそこに立つ三人を見て呆然とする統也をベッドに突き飛ばし、平静を装つて口を開く。実際のところは心臓がうるさいくらいに早鐘を打つてているのだが。

「と、統也、落ち着け。ここは本部の医務室、あの大鬼は退いた」

わずかに声が上ずつてしまつたが、問題はないだろつ。

にやつく健吾が余計な事を言い出さないうちに菊川のガキどもを医務室に入れる。そのあとについて入ってきた健吾の腹に一撃入れるのも忘れない。

腹を押さえてもがく健吾を不思議そうに見る一人を備え付けの椅子に座らせ、自身も腰を下ろす。

「統也さん、大丈夫なのかい？」

躊躇いがちに口を開いたのは小娘。確か、氷雨と言つたか。その隣では小僧が俯いている。

ああ、そうか。統也があの大鬼と戦つた場所の担当者は、此処にいる一人だつたはずだ。それで責任を感じているのだろう。

「ああ、大丈夫みたいだ。体の方は問題ない」

「そうか。……よかつた」

統也の言葉にあからさまに安堵の表情を見せる一人。それを見て微笑む統也になぜか無性に腹が立つ。

「まったく、あの程度の鬼にやられるとは。情けないぞ」

「う、……すまん」

私の辛辣な物言いにガキどもからの視線が険しくなったのを感じるが、そんな物に怖氣付くほど落ちぶれてはいない。一睨みで黙らせると、統也にあの鬼について尋ねた。

「それで、あの大鬼は何者だ? 何も知らんとは言わせんぞ?」

「ああ、それなら多少は情報を掴んだ。あいつの名は茨木童子。本人が名乗つたんだから間違いないだろ?」

「い、茨木童子! ?」

声を上げたのは涼と氷雨。退魔の出身であるこいつらが驚くのも無理はない。

茨木童子と言えば今なお語り継がれる大鬼神。退魔の一族にとって最も忌むべき存在の一つなのだから。どうやら、私の読みは当たったようだ。

「なるほど、それならあの力も納得がいく。それにしても厄介だな……。あいつだけなら大したことはないが、あいつが出てきたといふことはまず間違いない酒&#21534;童子もいるは

「すだ

「そうだろうな。たぶん、今回の首謀者は酒&#21534;童子だと思う。戦う前に茨木童子が言つてたんだ、計画の発動がどうとかって。……ティアナ、結界の揺らぎが一番大きくなる時間は？」

「そうだな……」

「それなら、明日の午後八時から十一時までの四時間。その中でも、午後十一時半頃だろう。最新の計測結果からの推測だから、誤差はほとんどないとと思ひよ」

いつの間に立ち直ったのか、平然と立つ健吾が口を挟む。もう一撃くれてやろうかと思つたが、おもむろに口を開いた統也に止められた。

「午後九時半からの一時間。向こうも同じ情報を持つているとすれば、この間に大攻勢をかけてくると思つ。たぶん、いや、間違いなく連中の目的は霧生の靈脈。何をするつもりかは分からぬけど、その一時間『大樹』を守り切ればいいはずだ」

「どうしてそう言つて切れるんですか？」

涼が首をかしげながら尋ねる。氷雨も同感のようで興味深そうにしている。

統也を見ればじつとじぢぢを見ていた。私に説明しろと言つたいうだ。

仕方なく軽く咳払いをしてから口を開く。無論、視界の端でこせこせやと笑う健悟に制裁を加えることを心に刻んでからだ。

「確かに奴らの物量は圧倒的だが、それも無限というわけではない。本来妖魔というものは自分の意思で人間界に出てくることは出来ない。今のように大気にマナが満ちているような状況でもなければな。それも上級妖魔に限つた話であり、中級以下の妖魔には出来んことだ。おそらく連中の大半は酒&#21534;童子が大気中のマナを使って無理やり呼び出したものだろ。妖魔の性質上、より力のある者に従う。それが召喚者ならなおさらな。つまり連中は酒&#21534;童子の指示で動いているということだ。そうである以上、むやみに攻めてくることは考えにくい。来ないなら来ない、来るなら……総力戦だ」

わかつたか？と二人に視線を向けると、涼は得心がいったように頷き、氷雨は首をひねつている。

「なるほど、そういうことか……」

「……涼、今ので分かつたのかい？」

「うん、大体はね。……姉さん、分からなかつたの？」

「ま、まさか、簡単じゃないか。うん、はははは……」

涼の疑わしげな眼に冷や汗を流しながら乾いた笑い声を上げる氷雨を見て確信する。
絶対分かつてない。

統也もその様子に苦笑している。健吾も同様だ。

「それにしても……。健吾、今までにこんなことがあつたか？私の知る限りではこれほど組織的な襲撃はなかつたはずだが……」

「そうだね、僕も初めてだよ。……つと、悪い」

私の疑問に頷いた健吾は、携帯の呼び出しに医務室から出て行く。しばらくして戻つてくると、私に学園長室へ行くように言い、三人には今日は休むように伝えて去つて行った。わずかに焦りを見せるその後ろ姿に違和感を覚え、早々に医務室を出て学園長室に向かう。

「ディアナ、もういいのか？」

「ふん、あれだけ焦りを見せておいて良く言つ」

困つたな、と頬を搔きながら苦笑する健吾を促して学園長室へと足を向ける。

健吾は魔法協会の幹部クラスの中では最年少だが、それでも周囲にいらぬ動搖を与えるよう本心を隠す術には長けている。その健吾をして周囲に焦燥を悟らせるような振る舞いをさせる出来事とはどれほどのものなのか。

不穏なものを感じながら足を踏み入れた学園長室で私たちを待つていたのは爺一人。たつた三人？

健吾を動搖させるほどの出来事を話すのにたつた三人だと？ 怪訝に思いながらも手近なソファに身を沈める。

「統也君の様子はどうかの？」

「身体、精神ともに問題はありません。今頃は氷雨君たちと話しているでしょ？」

「そつか、それは良かつた」

「爺、わつわと本題に入つたらどうだ？」

痺れを切らしてそつ切り出すと、爺は楽しそうに笑つ。

「おお、これはすまなんだな。では、本題に入るとしてよ。ティアナも続也君のところへ行きたいじゃうからな」

「う、いわせこつー」

叫んでから後悔する。これでは爺の言つたことを肯定しているようではないか。

「ほつほつほ、まあ落ち着け。……それで、本題といつのはじやな、六時間ほど前、B 27エリアにて確認された魔力についてや」

B 27エリアの魔力。間違いない、あの時のものだ。

たつたそれだけの言葉で、先程までのふざけた空気が霧散した。健吾が体を強張らせていることに気が付いたが、今はそれどころではない。

「計測された魔力のパターンを照合した結果、その魔力を発した人物が特定できた」

魔力を発した人物？

そんなものは決まつてゐるだろ。あの場には続也と茨木童子しかいなかつた……！？

ま、まさか、そんなはずはつ！

「その人物の名は……」

やめひ、その先は……！

「鷹司統也じや」

「バカなつーそんなばはずはないつ、統也にあれほどどの魔力はないんだぞーー？」

「じやが、事実じや。計測された魔力と統也君の魔力。二つの魔力パターンが完全に一致したんじや、疑う余地などありやせん」

そんな……、あいつが、統也があれほどの魔力を……？

「ティアナ、お主に鷹司統也の監視を命ずる」

「学園長、それはつ……」

「何、ある」とは今までと変わらん。じやが、もし不審な動きを見せた時は……」

学園長室での爺の言葉が耳から離れない。頭の中をぐるぐる回って木靈する。

『もし不審な動きを見せた時は……処分せよ』

『見せた時は……処分せよ』

処分。その言葉の示す意味はただ一つ。

それは嫌といつほどわかりきっている。この霧生において、その手の仕事を最も多くこなしてきたのは、ほかならぬ自分なのだから。判断としては間違ってはいない、いや、むしろ、正しい。

あれほどの魔力だ、それを解放した統也の存在は、ただそれだけで脅威だ。処分できるのは私以外には存在しない。それは分かつているのだ。

それでも、出来ない。出来る訳がない。

統也は私を家族だと言ってくれた。最古の吸血鬼として忌み嫌われた私を、無条件に受け入れてくれた。一人にしないと約束してくれた。

その統也をこの手で処分することなど、私には出来ない。

私は弱くなつた。鷹司統也という一人の男とあつたことで、どうしようもなく弱くなつてしまつたのだ。

足を止める。見上げた先には医務室のプレート。

室内に感じられる気配は一つ。まずまずの魔力を内包したそれは間違いなく統也のもの。

あの時は気付かなかつたが、確かにあの強大な魔力は統也の魔力とまつたくの同一。少なくとも、知覚出来る範囲での違いはない。

軽く頭を振つて思考を切り替え、ドアノブに手を伸ばす。

そこで異変に気が付いた。

これは、人払いの結界？

気付かれないように注意しながら結界に干渉し、室内の様子を覗く。明かりはついておらず、室内は闇に沈んでいる。目を凝らすと、中央に置かれたベッドの上に蹲る人影を見つけた。統也？

耳を澄ませば、聞こえてきたのはくぐもつた苦悶の声。

それに気付いた時には、結界を相殺し室内に飛び込んでいた。

「おいつ、どうした……っ！」

その背中に触れてそつとした。

熱い。

こちらへ来てすぐのころに『樂園』内で倒れた時同様、信じられないほどの熱を持つている。

馬鹿な、魔力は十分にある。こんなことになるはずがない。いつたい何が起こっているの！？

「ちつ、ついたえている場合かつ」

とにかく、なんとかして体温を下げなければならない。

原因は分からぬがこれだけの高熱だ、放つておけばまずいことになる。

視線を巡らせれば、部屋の隅に小さな冷蔵庫が備え付けられていた。あの中には氷か何か、体を冷やせるものが入っているはずだ。そう考え立ち上がりうとしたところで腕を掴まれた。

「統也、少し待つていろ。体温が下がれば少しは楽になるはずだ」

そう言つて手を放させようとするが、外れない。

決して強く掴まれているわけではないのだが、どれほど力を入れても指の一本すら外すことが出来ない。

「だ、大丈夫……だから。しばらく……すれば……収まる……」

息も絶え絶え、と言つた様子で、けれど強い意志を込めて言つ統也に、仕方なく椅子に腰を下ろす。

統也の口振りから察するに、この手の症状が出たのは初めてではないのだろう。実際、この部屋に入つた時に比べて、僅かではあるが落ち着いてきているように見える。もつとも、統也がそれを演じていなければ、ということを前提としての話ではあるのだが。それにもしても、といまだに荒い呼吸を繰り返す統也を眺めながら思

う。

こいつに關しては分からぬことが多い。

あの時觀測された膨大な魔力然り、今のこの状況然り。

落ち着いたら一度問い合わせてみる必要があるだう。元よりそのつもりでここへ来たのだ。

そのことに思い当つて頭を抱えたくなつた。

いくら突然の出来事だつたとはいえ、一時でも本来の目的を忘れていたことが、それほどまでに動搖してしまつたことが情けない。

この男が目の前に現れてからといふもの、調子を狂わされてばかりだ。

らしくない。かつて、闇の眷族『常闇の吸血姫』として怖れられた、現存する最古の吸血鬼たる、このディアナ・K・ブリュンビル^{ダーク・ブリュンビル}と、あるいは者が、本当にらしくない。

しかし、同時に思う。こんな生活も悪くはないと。

統也がこの世界に現れてから一週間。たつた一週間だ。それでも統也とヴァルと自分、この二人と一体での生活は、そう思わせるのに十分過ぎるものだつた。ともすれば、この十数年間よりも遙かに濃密だつたと思えるほどに。

口元が緩むのを感じながら目を閉じれば、瞼の裏にこの一週間で目にした様々な光景が甦る。

すべての始まりとなつた夜の森での邂逅（出会い）。そこで見せた桁外れの戦闘力。一転して困つたように笑いながらヴァルと戯れる姿。料理を口にする私を見つめる不安そうな顔。まあまあだと言ってやれば無邪気な笑顔。そして、時折見せる穏やかな微笑。

思い出して、かあつと顔が熱くなるのを感じた。あわてて記憶の反芻をやめ、目を開く。

視界いっぱいに映つたのは、俯き加減の私の顔を覗き込む何とも奇妙な表情を浮かべた統也の顔。

「……何やつてんだ？」

見られたっ！？

何とか誤魔化そつと口を開くが、こんな時に限つて言葉が見つからない。

中途半端に口を開いたまま、ただ時間だけが過ぎていぐ。

その気まずい沈黙を破つたのは統也の方だった。

「ま、いいや。……………」
学園長に呼ばれたらんじやなかつたのか？」

話題をえてくれた統也に、胸中でひそかに感謝。

「や、それはもう終わった。……………」
来たのは、聞きたいことがあるからだ

若干の間をとり、意識を魔法師『常闇の吸血姫』としてのそれに改変する。

それによつて『ひづり側』の問題だと気が付いたのだろう、統也も表情を引き締めた。

「单刀直入に聞く。お前は一体何者だ？」

「……」

その問い合わせる答えは沈黙。一見無反応のよつとも見えるが、ほんの一瞬、表情が強張つたのに気が付いた。

やはり、ここつは何かを隠している。

「今から六時間前、いや、もう七時間前か、お前が酒&#21534;童子と対峙したエリアにおいて、莫大な魔力が観測さ

れた。その総量はおよそ五万

「ここまで語つてもなお、すべての感情を排したかのような無表情に変化はない。否、努めてそうしている、と言つた方が正しいか。しかしそれも無駄なこと。眼光にそれまで以上の力を込めて統也を見据える。

そして、ジョーカーを切つた。

「観測された魔力とお前の魔力、その魔力パターンが一致した。……あれをやつたのはお前だな、統也」

問い合わせではなく確認。

私とてにわかには信じられなかつたが、これは事実。確定事項だ。覆ることは、無い。

統也もその考えに至つたのだろう。ふつと表情を和らげると、困つたように苦笑した。

「はあ、こいつの魔的技術を甘く見てたな、まさかあの一瞬でそこまで分かるなんて。……ああ、そうだ。あれをやつたのは俺だよ、ディアナ」

「何故黙つていた」

「聞かれなかつたから」

「質問を変えよう、なぜあれほどの魔力を隠していた。お前の目的はなんだ」

「……」

固く口を閉ざしたまま、統也は答えようとしない。

その態度に業を煮やし実力行使に出ようかと考え始めた頃、ようやく統也が口を開いた。

「俺は、純血の人間じゃない」

その言葉に耳を疑つた。しかし、同時に納得している自分がいる。

「俺は、人外と人の間に生まれた混血だ」

統也の言つことが事実だとすれば、あの時観測された魔力にも説明がつく。

人間という種は本来脆弱な存在だ。

私たち吸血鬼のような超越種や妖魔と言つた人外の存在は、個体差こそあれ、もともとその体にある程度の魔力を秘めている。もちろんそれは人間も同じだが、一般的な人間の魔力は下級妖魔にさえ大きく劣る。だからこそ、人の身でありながら大きな魔力を宿す者が魔法師などと呼ばれるのだ。

それでも、人間と人外の間には越えられない壁がある。

どれだけ魔力量が多い人間であつても、その上限はせいぜい三万程度。

それに対して、あの時統也が発した魔力から算出された潜在魔力量はおよそ五万。どう考へても人間の範疇を越えている。

統也が人間であるという前提のもとで考えれば異常な数値でも、人外との混血だとすれば充分有り得る話だ。もちろん、驚嘆に値するものではあるのだが……。

だが、そこで疑問が生じる。

統也が混血だとするなら、今まで私が気付けなかつたことがおかしいのだ。

魔力探査はあまり得意ではないが、それでも人間と比較すればその

制度は遙かに高い。詳しい種族の特定は出来なくとも、混血であるということくらいは分かる。そのはずなのだ。
にもかかわらず、私は統也が生粋の人間であると信じて疑わなかつた。

そこであることを思い出す。

いつだつたか、夜の森で菊川の小僧が言った言葉。

『鷹司統也からは人外の臭いがする』

いや、あれをあの場で言つたのは小娘の方だつたか。まあ、そんなことはどうでもいい。

一つだけはつきりしていることは、統也が現れて間もないころにはすでに材料は与えられていたということ。

あまりに無様。あまりに滑稽。

己の不甲斐無さを自覚し頭を抱える。

「ディアナも知つてゐるだらうけど、人間という存在は、妖魔や超越種に比べてその概念が遙かに軽い」

そんな私に気付くことなく統也は続ける。

「本来ならそうすることじやないけど、俺の場合、人外である父親の存在が持つ概念が重すぎたんだ。それを放つておけば、鷹司統也という個人を形成する概念のうち、人外としての概念が人間としての概念を押し潰してしまつ。そうなつたら最後、究極の一たる万物の根源『アカシック・レコード』に記録された『鷹司統也は混血である』という記録と、そこに存在する『鷹司統也』との間に矛盾が生じる。その結果として、混血として生きてきた『俺』という人格に世界の修正力が働き、俺の自我は崩壊。理性という鎖を失つた『鷹司統也』は、本能のままに破壊と殺戮の化身と化す。それ

右手首にはめられた革の腕輪を左手で握りながら言つ統也の横顔は、

穏やかな微笑。

「これには父さんの魔力が込められてる。その力によつて俺の中に潜む人外の血を封印し、浸食を防いでるんだ。つまり今の俺は、ちよつと魔力の多いだけのただの人間、つてことだな。あの時はかなり追いつめられてたからさ、仕方なく封印を解除しようとしたんだ。観測されたのは、たぶんその時に溢れ出した魔力だと思つ」

なるほど、人外の血を封印していたのならば、私が気付けなかつたのも無理はない。

血の薄まつた統也でさえあれほどの魔力を秘めているのだ、その父親となればそれこそ桁外れの魔力を持っていたのだろう。そんな、文字通り次元の違う魔法師、いや、魔術師の施した封印だ。本人から聞かされなければ誰も気付けないだろう。そこでもう一つの疑問が浮かぶ。

「もう一つ聞いていいか?」

「さつきのこと、だろ?」

間髪入れず帰つてきた確認の声に頷く。

「あれは、何て言うか……魔力の暴走、かな」

「魔力の暴走だと?……なるほど、そういうことか。封印を施した状態のお前はあくまで普通の人間。そこに開放しかけた莫大な魔力が取り残されたために、行き場を失つた魔力が体内で暴走した、と

「 いわけか…… 」

「 まあ、 そんな感じだな 」

その言葉を聞き、 思考に埋没した私は気付かなかつた。 それに続く
かすかな咳きに。

それを聞いていれば、 もしかしたら気が付いたかもしない。
苦痛に苛まれながら統也が発した言葉の本当の意味に。
統也の危うさの正体に……。

第十六話

明けて翌十一月三十一日。

人々が目前に迫った新年に思いを馳せる中、重々しい空氣に包まれた集団が居た。

霧生防衛戦において魔法師側の主力とも言える各方面の責任者たちだ。

日本魔法協会本部の一室に集まつた彼らの表情は一様に暗い。幾多の戦いを潜り抜けてきた歴戦の猛者である彼らをこれまでに恐れさせる存在。

伝説級の大鬼神、酒 & amp; #21534; 童子。
その腹心、茨木童子。

彼ら脳裏に浮かぶのは、斬られ、碎かれ、蹂躪される己の姿。何度も試みても二柱の大鬼神と相対した自身を待つのは『死』という事実のみ。

最後に立つているのは朱に染まつた大地を闊歩する異形だった。そしてそれは、こうして彼らの表層意識を覗き見ている自分も同じこと。

一対一なら勝つ自信はある。しかし、二柱が連携して挑んできたら？負ける気はしないが、勝てる気もしない。時間を稼ぐのが精一杯だらう。

隣に座る統也を見遣る。

昨日の戦闘による負傷は完治しており、十分な休養のおかげもあつてか、調子は良さそうだ。

目を閉じ、まるで瞑想でもしているかのような横顔から連想するは、磨き上げられた鏡の如き水面。しかし、水面下では闘志の炎が燃え盛つているような静かな気迫が漲つている。

おそらく脳内では、今までに二柱の大鬼神を相手取り戦つているのだろう。

その場に私はいるのだろうか？
ふと、そんな考えがよぎる。

「報告は以上です」

健吾の声に思考を止める。

腰を下ろした健吾と入れ替わるように爺が立ち上がった。

「聞いての通り、今回の防衛戦は例年になく厳しいものになるじやろう。じゃが、わしらは負けるわけにはいかん。今日一日、なんとしても守り切るのじや、明日という日を迎えるために」

その言葉に全員の士気が上がるのを感じた。

この場に集まつた者は皆、理解しているのだ。

霧生の靈脈、その起点となる『大樹』が妖魔の手に渡つた時、世界にどれほどの被害をもたらすのかを。そして、靈脈の上に広がるこの霧生の街が真つ先にその被害を受けることを。例外もあるだろうが、防衛戦に参加する者の大半はこの街に愛着を持つている。そして、そこには守りたい人達がいる。だから負けられない。負けるわけにはいかない。

こうして、史上最悪の防衛戦が本当の意味で幕を上げた。

「そろそろだな」

室内に設置された時計を見ながら呟くティアナに、ああ、とだけ返事を返す。

時刻は午後九時を少し回つたあたり。俺の予想が正しければあと三十分足らずで大攻勢が始まることはだ。

もつとも、ここまで推移から考えればほぼ確実だろうが。

立ち上がり、傍らに置いていた外套を纏う。

それだけ、たつたそれだけの動作でこの身は万物切り裂く刃となる。

「いくのか？」

「ああ、まだ時間はあるけど、一応な

見上げてくる『ディアナにそう答えると、ディアナもまた立ち上がった。

視線を合わせ、頷きをかわす。

酒&#21534;童子と茨木童子。伝説級の大鬼神。

二体の大鬼を相手にして勝てるかどうかは分からぬ。

今ままでは無理だろう。もしかしたら、この身に秘められた力を解放しても勝てないかもしない。

しかし、そんなことは関係ない。

俺は誓つたのだ。

守ると。ディアナや氷雨、涼。その身に宿された力のせいでも『こちら側』に関わらざるを得なかつた子供たちが、平穏に暮らせりゆうにするのだと。

ならばすべきことはただ一つ。

この手が血に塗れても。この命が燃え尽きようとも。『俺』という存在が消え去るのも。

奴らはこの手で倒す。

それが『鷹司統也』といつ存在に許された、ただ一つの存在理由なのだから。

「姉さん、そろそろみたいだよ」

涼の声に無駄か、と思いながらも周囲の魔力を探る。

そしてやめておけばよかつたと少し後悔した。

魔力探査の苦手な私でもわかる。微弱な、けれど膨大な数の魔力が近付いて来るのが。

正確な距離こそわからないが、その数が今までに相手にしたどんな集団よりも多いことは明白だ。

「こいつを持ってきて正解だつたね」

左手を腰の後ろに回すと、滑らかな木の手触り。あの日、燃え盛る里から持ち出せた唯一の品。今は亡き父が、この世を去る数日前にくれた小太刀だ。

医務室で統也さんの話を聞いた後に自室のクローゼットから引っ張り出したこれは、一族に伝わる靈剣のうちの一つ。

靈刀『白光』。

涼の持つ靈刀『白夜』と並び一族の有力者が持つべきであるはずのこれを、なぜ私に持たせたのか。父の真意のほどはわからない。しかし、一つだけ確かなことがある。

今この場において、弟と並んで最も頼りになるのがこれだということ。

右手にデザートイーグル、左手に白光を携え前方を見据える。見れば、隣に立つ涼も白夜を正眼に構えている。

木々の隙間から無数の妖魔が見え始めたころ、白光に魔力を流し込む。

それに呼応して、その名が示す通りの輝きを発する白光を一薙ぎ。白銀の斬撃が妖魔の先頭集団を蹴散らすのを確認して打つて出る。駆け出した私のすぐそばを白夜から白光と同様に繰り出された斬撃が駆け抜け、数十体の妖魔を消し飛ばした。

耳につけたイヤホンからは、各地で戦闘が始まつたという報告が聞こえる。

戦闘の一体を白光で斬り伏せ、その後続をデザートイーグルで穿つ。昨日の一の舞にならないよう、可能な限り弾を温存しながら迫りく

る妖魔の大群を屠る。

正面の鬼を一閃し、上空から襲いかかってきた鳥族を撃つ。手近な妖魔を片付け、次のターゲットを探そつと視線を巡らせる。そこで悪寒を感じた。

辺りに蠢く妖魔たちは比べ物にならない、濃密な魔力の気配。涼の様子を窺えば、同様に手を止め、険しい表情で周囲を警戒していた。

周囲を取り囲んでいた妖魔たちも、一様に距離を取っている

「あの黒き娘や『常闇の吸血姫』ダーク・ブリュンヒルド の他にも、これほどの使い手が居たとは。やはり人間界は面白い。これもあの御方のおかげか……。感謝せねばならんな」

愉悦を隠しきれない低い声が響く。

木々がざわめき、風が啼く。

姿を現したのは、三メートルを超える大鬼。

「お初にお目にかかる。我が名は酒&#amp;#21534;童子。突然で悪いが、手合わせ願う」

名乗りと共に吹き荒れる爆発的な魔力に肌が粟立つ。

「な、なんだよ、こいつ……」

一步、視界の端に映る涼が後退る。

すぐさま一步踏み出したものの、目の前の鬼に氣圧されていふことは明らかだ。

かく言う私自身、膝は震え少しでも気を抜けば一度と立ち上がるることは出来ないだろう。

左手の白光がかちやかちやといつもくらうに音を立て、体の震え

を如実に示している。

退魔師としては落ちこぼれである私ですらこれなのだ、遙かに感覚の鋭い涼が感じている恐怖はこれの比ではないだろう。

「これが、伝説級の大鬼神の力か……。まいったね、圧倒的だよ……」

私程度では足止めにすらならないだろう。それでも諦めるわけにはいかない。

統也さんがブリュンヒルデさんが来ればなんとかなるはずだ。

その時間が稼げればそれでいい。

見た限り、酒& #21534;童子といつのは伝承とは違ひ生糀の武人らしい。ならばやりようはある。

「涼、本部に連絡を。統也さんがブリュンヒルデさん、森崎先生あたりに来てもらえるようにするんだ」

「わ、わかった」

携帯を取り出す涼を庇うよつて、前に出る。

不思議と震えは止まっていた。

目を閉じ、深く息を吸い、細く吐き出す。

耳障りなノイズが消え去り、集中力が極限まで高まったのを確認して目を開く。

蒼く染まつた視界に映る酒& #21534;童子。その顔に驚きの色が浮かぶ。

「ほう……実に面白い、これほどの魔眼は久しく見ておらん。これは楽しめそうだ」

魔眼？何のことだろ？

「姉さん、統也さんとブリュンヒルデが来てくれるらしい」

「それじゃ、それまでの時間を稼ぐことにしようか」

気になるが、今はそれどころではない。

魔力切れでただの業物と化した百光を鞘に戻し、もう一丁のデザートイーグルを手にする。

デザートイーグルの装弾数は七発。現在の持ち弾は右に三、左に七、予備のマガジンが五本の計四十五。退魔術式を施した五十口径弾とはいえ、大したダメージは与えられないだろう。出来ることと言えば、着弾の衝撃で牽制することくらいか。

いや、それすらあやしい。何せ相手は三メートルを超える巨体。そのうえ、この地球上に存在するどんな生命体よりも頑強な肉体を誇っているのだ。自動式拳銃としては最強クラスの威力を持つデザートイーグルも結局は対人用の銃器に過ぎない。化け物と呼ぶに相応しいこの大鬼神にどこまで通用するか。

魔力量の少ないこの身が恨めしい。せめて一般の魔法師程度の魔力があれば、白光が使えるのだが……。

とめどない思考を打ち切り、正面を見据える。

その先に威風堂々と立つ酒&#21534;童子は攻撃に移る気配を見せない。

こちらの様子を窺っているのか、あるいは……。

「そんな必要もないのか……」

口に出してみても何も変わらない。

白夜を構え前に出る涼に前衛を任せ、後退。直撃を確信し、引き金を絞った。

「どけつ！」

目の前の妖魔を純粹な魔力の塊で吹き飛ばし、開いた道を駆け抜け
る。

今は一秒の時間も惜しい。

つい先程出現した巨大な魔力。昨日対峙した茨木童子をも遙かに上
回る魔力は、疑うまでもなく、妖魔の首領、大鬼神酒&#21534;童子のそれだ。

そしてその傍にある二つの魔力。氷雨と涼、あのエリアを担当する
二人だ。

「くつ」

自分の浅はかな行動に腹が立つ。

二人の実力は確かだが、いかんせん経験が足りない。経験さえあれ
ば、倒すことは出来なくとも時間を稼ぐ方法はいくらでもある。だ
からこそ、俺は二人の担当エリアの近くに配置されていたのだ。

本来ならば、すでに一人の援護に入っていたはず。にもかかわらず
俺は今、こうして走っている。それはなぜか？

予想を上回る中級妖魔の出現により、各エリアが苦戦。そのために
俺やディアナを含めた遊撃隊は支援に追われたのだ。

つまりは陽動。

一部の防衛線の崩壊が即、敗北に繋がる俺たちに対し、これ以上
無く効果的な戦術だ。事実、主力と言える者は皆、件のエリアから
引き離されてしまっている。

酒&#21534;童子の知略を侮っていたがゆえの失態。茨木童子の存在が確認されていないことも気になる。万が一、二体の合流を許してしまえば目も当てられない。数人がかりで挑めば倒せないわけではないが、そうなれば各エリアの機能が低下、結果的

に防衛線は崩壊するだろう。

それを防ぐためにも、一刻も早く酒&#21534;童子を倒さなければならない。それが一人を救うことにもつながる。走る俺を迎撃しようと腕を振り上げる鬼をすれ違いざまに両断。止めのつもりか、行く手を遮る妖魔の壁を強引にこじ開ける。それによつて出来た僅かな隙間が閉ざされるより早く瞬動を発動。一息に駆け抜けた。

重い銃声。鈍い破碎音。そして荒い呼吸の音。それだけがこの空間を支配していた。

もつとも、息が上がっているのは私と涼だけ。負わされたダメージも相まって、こちらの動きかなり鈍ってきている。対する酒&#21534;童子は無傷。呼吸も乱れておらず、その動きも一切鈍っていない。

「ぐう、これは……まずいね」

咳き、歯噛みする。

最初こそは、劣勢ながらも何とか戦えていたのだ。

涼がかく乱し、体制が崩れたところを私が撃つ。それによつて作られた隙を狙つて涼が斬り込む。これ繰り返し、ダメージを与えることは出来なくとも、こちらもダメージを受けることなく済んでいた。しかし、疲労が蓄積し動きが鈍つたところを衝かれた。そこからは一方的だ。

辛くも致命傷は避けているが、涼も私も満身創痍。

このままでは押し切られる。

これまでに感じたことのない死の恐怖が、じわりじわりと忍び寄つていた。

だからだろうか。

淡い月光に照らされた森を染め上げた紅蓮の炎が、とても神聖なものに見えたのは。

「悪い、遅くなつた」

私たちと酒&#21534;童子の間に降り立つた黒衣の

青年。

燃え盛る炎の輝きを受けて煌く日本刀を携え、渦巻く熱風に長い黒髪を靡かせるその姿は、天界より降り立つた天使の様で。対峙する大鬼神の威圧感とは明らかに異なる、けれど、決して劣らぬ静謐な存在感に満ちていた。

「ほお、汝が茨木童子の言つていた黒き娘か。なるほど、これは確かに面白い」

「うるせえ、こつちは面白くも何ともねえんだよ。それから、茨木童子に伝えとけ、俺は女じやねえ」

炎の渦の中から姿を現した酒&#21534;童子の言葉に、統也さんは不機嫌そうに答える。

いや、不機嫌なんてものじゃない。明らかに怒っている。それも、かなり本気で。

確かに、知らなければ女人の人にも見えるか。

などとこの状況にそぐわない思考を始めた自分に苦笑する。

現金なものだ。つい先程まで死の恐怖に怯えていたというのに、統也さんが現れた途端にこれほどの余裕が生まれているのだから。

ふと見れば、涼の表情からも焦りの色は消えている。

「氷雨、涼、まだ動けるか？」

「なんとかね。矢面に立つのは遠慮したいけど

いつの間にかすぐ隣まで後退していた統也さんの声に驚きながらも、なんとかそれを隠して正直に答える。

上等だ、と笑う統也さんに消耗度合いを伝えると、統也さんは何を思つたか私の左手を取つた。突然のことに固まつていると、統也さ

んは大地に突き立てた日本刀の柄に近い部分で右手の親指を切り、その地で私の左手甲に何かを書き始める。

「簡易的なラインを繋いだ。これで、その小太刀も使えるはずだ」その言葉に左手甲をよく見ると、小さな魔法陣のよつなものが描かれている。それと同時に魔力がどこからか流れ込んでくるのを感じた。確かにこれなら白光も使えるだろう。

「俺が前に出る。涼、お前もだ。氷雨は後方から援護。俺が隙を作りながら、一人はそこに全力の一撃を叩き込め。いくらあいつが伝説級の大鬼神だつて言つても、まともに食らえればただじや済まないはずだ」

「でも、それじゃあ……」

抗議の声を上げる涼を制し、頷く。それを見た涼も渋々頷いた。涼の言いたいことも分かる。

確かに統也さんは強い。私たちとは比較にならないほどに。それでも、伝説級の大鬼神という化け物正面切つて戦えば、最悪死に至ることもあり得る。むしろその可能性の方が高いだろう。にもかかわらず、統也さんは選んだ。

自分が生き残ることよりも、酒吞童子を倒すことを最優先とした行動を。

ならば、私たちに出来ることはただ一つ。

「涼、最初の一撃で決めるよ」

酒吞童子に歩み寄つていいく統也さんの背中を見ながら、傍らに立つ涼に言つ。

「初めからそのつもりだよ」

力強く頷き白夜を構える涼に倣い、右のデザートイーグルに最後の予備弾倉を装着し、初弾を装填。左手に握った白光に黒天使から送られた魔力を込め始めた。

「待たせたな」

「何、汝と戦えると思えば、この程度待つたうちに入らぬ

「そいつはびづも。……それじゃ、始めますか」

「応。我が名は酒& amp; #211534;童子。黒き娘よ、いざ
爆発的に巨大化した魔力と共に振るわれる剛腕をかわしづま、その
わき腹に魔力を上乗せした掌底を叩き込む。

「俺は女じやねえって、言つてゐだらうがつ」

「ぬうー。」

わずかに揺らいだ上体を立て直す暇を与えることなく追撃。懷に潜り込み、がら空きの胸にもう一発叩き込む。その衝撃が鋼のような表皮を抜け、体内で暴れまわるのを確かな手応えとして感じた。体がくの字に折れ、間合いに飛び込んできた顎を渾身の力で蹴り上げる。

「がはつ

仰け反つた酒 & amp; #21534; 童子に追い打ちをかけようとして中断。直後、すさまじい衝撃に吹き飛ばされた。

「ぐつ

途轍もない怪力。咄嗟に交差させた両腕が悲鳴を上げている。自ら後方に跳んだからこの程度で済んだものの、一瞬でも反応が遅れていればそれで終わつていただろう。とはいえた防いだことに変わりない。そして、それが数少ない好機を生み出したことも。

「今だ、叩き込めええつ！」

空中で体勢を整えながら叫ぶ。

仰け反りながら俺を殴り飛ばした酒 & amp; #21534; 童子は、その体勢を完全に崩している。
抗いようのない、致命的な隙。

大気中に漂うマナのざわめきを感じながら着地するのと、一いつの斬撃が放たれたのは同時だった。

閃光、爆音、衝撃。

巻き上げられた土煙が晴れた時、爆発の中心にあつたのは、膝をつき大小無数の裂傷を負つた酒 & amp; #21534; 童子の姿だった。

「ぐう……。流石に、やるな……。しかし、我らの勝ちだ……」

その顔の浮かぶのは、驚愕でも悔恨でもなく不敵な笑み。

「黒き娘たちよ、世界樹の袂にて待つ。止められるなら止めてみよ

酒&#21534;童子はそう言い残すと、問いか詰める間もなく周囲の妖魔共々その姿を消した。

「倒した、のかい？」

『惑うよつて言つ氷雨に、それはないだりつと返す。

「確かにかなりの深手は負わせたみたいだナゾ、倒しきるまでには至つてないはずだ。それに、最後の言葉も気になる……」

「世界樹の袂にて待つ……ですか？」

涼の言葉に頷き、本部に連絡しようと携帯を取り出したといひで、タイミングよく着信が入った。森崎さんだ。

「もしもし。ちよつとよかつた、今」

『統也君、報告は後で聞くよ。ちよつとまことになってね』

「まことに、ですか？」

『ああ。……单刀直入に言つ、『大樹』が茨木童子に占拠された』

「なつ！？」

『どうやら酒&#21534;童子も陽動だつたようだ。現に、酒&#21534;童子が茨木童子と合流したという報告もある。周辺に展開していた妖魔も一緒だ。君たちもすぐに向かってくれ』

「分かりましたっ」

「一重の陽動とは、やつてくれる。

まさか古の兵法家、孫子の教えを身をもつて知ることになるとは。

「どうしたんだい？」

「説明はあとだ、『大樹』に急ぐぞ。『大樹』が奴らに占拠された」

そこはまさに異界だつた。

大気に満ちる醜悪な気配。無数に蠢く妖魔の群れ。霧生の象徴たる

『大樹』はもはや、妖魔たちに蹂躪される場所となつていた。

いたるところで妖魔と人の戦闘が展開され、神代の戦争を彷彿とさせる。

「まつたく、きりがないね」

「そりばやくなつて」

眼前の妖魔を斬り伏せ、後続の一体に銃弾を叩き込みながら『四つ氷雨』をたしなめつつ、数体の妖魔をまとめて薙ぎ払う。

「だけど、これじゃ進めませんよ」

野太刀を巧みに操り、群がる妖魔を斬り捨てる涼の言葉に声には出さず同意する。

現在の時刻は午後十一時過ぎ。揺らぎが最も大きくなるまであと二十分程しかない。

たつた三十分の間に『大樹』へとたどり着き、今までに行われてい

る儀式を阻止しなければならないのだ。

こつしている間にも徐々に高まっていく『大樹』の魔力が焦燥を煽る。

「俺が道を開く。一気に抜けるぞ」

そう言って詠唱を始めようとした時、我先にと殺到していた妖魔たちの動きが変わった。

津波の前的小波のよう、周囲の妖魔が一斉に後退。僅かに遅れて『大樹』方向の妖魔の壁が、さながらモーセの渡った葦の海のごとく左右に割れた。

「その必要はなかつたみたいだね」

「みたいだな」

「…………一人とも、何でそんなに落ち着いてられるんだよ…………」

「何で、つてこじ開ける必要がなくなつたんだからいいんじやないか？」

「それはそうですけど…………。腰だつたらどうするんですか」

「その時は…………」

「その時に考えよう」

姉の言葉が追い打ちになつたのか、がっくりと肩を落とす涼。

「それに、儀式を止めれば俺達の勝ちなんだ。時間も人手も足りない、魔力だって無限じやない。迷う必要なんかないだろ。俺たちに

は、他に選択肢がないんだ。向こうが通じてくれるって言ひながら、有り難く通してもらおう

「分かった、分かりましたよ。確かに統計的なのがいいとおっですか
「ら

仕方有りませんね」と肩をすくめる涼に苦笑い。

「それじゃ、行こうか

氷雨の言葉に元気を、田の前に続く道へと駆け出した。

第十八話

「やはりお前達もか、統也」

妖魔たちによつて作られた道の先、開けた場所に出たところでそつ声をかけられた。

「ディアナ、お前もいたのか」

見ると、向かつて右手、五メートルほど離れたところに、腕を組み不機嫌そうに佇むディアナが居た。

「それにしても、一体何のつもりなんだか

「そんなこと私が知るか。ただ一つ言えることは、私たちが『呼ばれた』ということだ。なにしろ連中と直接戦つたのはここにいる四人だけだからな」

「そんな馬鹿なこと……」

言いかけて、涼は言葉を切つた。

そう、決してあり得ない考えではないのだ。

酒&#21534;童子が姿を消す直前の一言。

「『世界樹』の袂で待つ。あいつはそう言つた。『世界樹』と『大樹』が繋がらなかつたからあの時は分からなかつたけど、確かに『世界樹』って呼び方も分からなくはない」

目の前にそびえる『大樹』を見上げながら言つ。

「酒&#21534;童子がそう言つたのか？ならば間違いないだろうな。今でこそ『大樹』と呼ばれているが、昔は『世界樹』と呼ばれていた時期もあつたはずだ」

つまり、俺達は酒&#21534;當時と茨木童子、二柱の大鬼神の意思によつてここに招かれた、といつことだ。

「よく来たな、常闇、黒き娘、若き退魔の子らよ」

「勝負の続きを、いざ」

『大樹』の手前、俺達から一十メートルほど離れた空間が歪み、そこから滲みだすよつに姿を見せた酒&#21534;童子と茨木童子。

理不尽なことに、以前与えた傷は跡形もなく消えていた。ディアナが消し飛ばした茨木童子の左腕も、しつかりとそこに存在している。

「よく來たも何もないだろ」

「まつたくだ、お前らが呼んだんだる。それに何度も言つてるが、俺は女じやねえ」

今すぐにでも戦わんとする茨木童子には言葉を返さず、玉兎を呼び出すことで答えとする。ディアナは相変わらず腕を組んでいるが、魔力が活性化しているのが分かる。

「氷雨、涼、お前らは下がつてろ」

「巻き添えを食らつても知らんぞ」

視線は正面に向けたまま、背後に控える一人にそう声をかける。口調こそぶつきらぼうだが、ディアナも同様にまだ若い一人を気遣っている。

「茨木童子、常闇は任せたぞ。私は黒き娘をやる」

「相分かつた。しかし、殺さんでくれよ？あの娘は我が妻とするのだからな」

「承知しておる」

あいつら、相変わらず人の話聞いてねえな。

「ディアナ、手は抜くなよ」

「ふん、言われるまでもない。お前こそぬかるなよ？」

笑みを交わし、拳を打ち合わせる。

「さあ、やろうか酒&#21533;童子。俺は鷹司統也、
混血の忌子だ」

「行くぞ茨木童子、準備はいいか？」

不敵に笑う二人と一柱。四つの声が重なった。

パーティ
宴の始まりだ

直後、俺達は同時に地を蹴った。

ディアナと茨木童子は右へ、俺と酒&#21534;童子は左へ。

着地の瞬間に空中で瞬動を発動、酒&#21534;童子の着地を狙う。

全体重をかけた渾身の正拳は交差された両腕に防がれた。そのまま振り払われた腕に逆らわず後方へ飛び距離をとる。

遅れることなく追従し、お返しとばかりに振るわれた右腕を交わし、わき腹を狙う。

これも不発。素早く引き戻された肘に止められた。

連続して放たれた、すくい上げるような左のアッパーを右肘を支点にして飛び上ることで回避。そのまま側頭部を蹴りつけさらに上へ。落下速度を上乗せした最速の斬撃を叩き込む。

響く甲高い金属音。

必殺を期して放つた一撃もまた、どこからともなく現れた槍の柄に阻まれた。

槍を力任せに振り抜かれ、吹き飛ばされる。

「ちい、何かあるだろ? とは思つてたけど、よりによつて槍かよ

五メートル近い長さの柄の先に、さらに一メートルほどの穂先。本来刺突用の武器である槍だが、この長さになると斬撃もかなりの脅威となる。さらに、魔力を纏ついていた様子がなかつたにもかかわらず、その柄には全く傷が見られない。あれで殴打されるだけでも、人間にとつては致命傷となるだろ?。

「危ういところだつた。やはり混血だけのことはある、脆弱な人間とは比べ物にならんわ」

「お褒めにあずかり光栄だが、残念ながら今の俺は普通の人間と変

わからないさ。人外の血は封じてるんでな。もつとも、あまり時間がないんでな、解放させてもらひつ」

できることなら使いたくなかった。だが、酒吞童子に隠し玉があつた以上、今までは勝つことなど到底不可能。

もちろん、最悪の場合俺の精神はこの身に潜む人外の本能に飲み込まれてしまうだろう。

それでもやるしかない。このままここで時間を無駄にしていては、多くの人命が失われることになるのだ。

玉兎を前方に突き出し、伸ばした右手の手首に左手を添える。

「リリース・アクセル・イグザイウス」

解放の瞬間に飲み込まれてしまわないよう、『此処にある自分』を強くイメージする。

「オーヴァー・ドライヴ」

そして解放の言葉を口にした。

「すゞい……」

伝説級の大鬼神に対し、一步も引くことなく戦いを挑む統也さんの姿に、隣でそれを見ていた涼が感嘆の声を漏らす。

私もそれに同感だ。有効なダメージこそないものの、こうしてみていの限り統也さんの方が優勢だ。

しかし、一つ引っかかることがある。配下である茨木童子が大剣を振るつて童子に對して酒吞童子は徒手空拳。確かにそれでも強いのだが、上級妖魔ともあろう大鬼が得物を

持たないなどと、いうことがあるのだろうか。

そして、その疑問はすぐに解消されることになった。

酒&#21534;童子が虚空から取り出した長大な槍。その瞬間、統也さんの表情が変わった。距離をとり、酒&#21534;童子に向かって右腕の肩から切つ先まで、一直線に突き出す。左手は右手首に添えられた。

軽く目を閉じ、朗々と言葉を紡ぐ。

「リリース・アクセル・イグズイウス」

聞いたことのない詠唱。しかしそこからは途方もない力を感じる。

「オーヴァー・ドライブ」

その言葉は、そこかしこから聞こえる轟音の中でもかき消されるとなく響き渡つた。

突如巨大化した統也の魔力に思わず振り返る。

「なつ、これは、まさか……」

「ほお、これは見事だ。我らの妖力が路傍の小石に思えるわ」

そう、まさに圧倒的。昨夜感じた魔力が震むほどの魔力の奔流。その静謐でありながら力強さを併せ持つた流水の様な魔力に驚嘆すると同時に、それを解放した統也に不安とそれ以上の苛立ちを感じ

る。

昨夜ですら相当の苦しみを伴つたといつて、これほどの魔力を解放してはどうなるか分かつものではない。

それだけならばまだいい。要は精神力の問題なのだから。幾多の苦しみをその身に受けてきた統也の精神力ならば、その苦痛にも打ち克てる可能性は高いだろう。

問題はそのあとだ。昨夜の統也の言葉から察するに、これが統也の全開なのだろう。つまり今、統也の体内では、普段は封じられている人外の血が活性化しているはず。

これが意味するところは一つ。

こうしている間にも、統也の体はその血によって浸食を被つてゐるといつことだ。

「バカ者がつ……」

解放などせずとも、私がこいつを倒した後、一人で戦えば済む話ではないか。むしろ、私はそうしてしかるべきだと思っていた。

それでは間に合わないと思ったのだろうか。

私は統也にそう思われるほど信用されていないのだろうか。

そう考へると腹が立つてきた。その怒りをぶつけるべく、目の前の茨木童子を睨みつける。

「おお、お主もやる気になつたようだな

「ふん、そんなことはどうでもいい。私は今機嫌が悪いんだ、それと終わらせるが」

そう言つて、返事も待たずに飛び出した。

何とかうまく行つたか。

目を開いた後、最初に浮かんだのはそんな安堵だった。

体には異常はない。意識も、今のところははっきりしている。

体内をめぐる魔力の流れも正常。

懸念していたことが杞憂に終わったことに安堵しながら、田の前に立ち、動きを止めている酒&#21534;童子を見据える。

「それが、汝の力か……」

田を見開き、驚愕をあらわにする酒&#21534;童子は、しばらべの間をおいて心底楽しそうに笑い出した。

「ふ、ふふふ、ふははははは。これはいい、いいぞ、最高だ。我の田に狂いはなかった。この身生まれ降りて数百年、これほど心躍つたことはない」

天を仰ぎ、愉悦に体を震わせる酒&#21534;童子を冷ややかに見つめる。

「お楽しみのところ悪いが、さつきと始めないか。さつきも言ったが、こっちにはあまり時間がないんだ。それで勝ちと出来るほどあんたは小物じゃないだろ」

「無論だ。では、改めて始めよう

「ああ、第一幕の開演だ」

しばらく言葉を発することが出来なかつた。

初めて聞く詠唱によつてもたらされたものは、それほどの衝撃を持つて私たちの目に焼き付いた。

爆発的な魔力の奔流が収まつた後、なおも吹き荒れるマナの嵐の中から姿を見せたのは、月光を浴びて煌く銀髪を靡かせる蒼い左目と紅い右目を持つた青年。

「あれが、統也さん……なのかい？」

よつやく口にした言葉は、そんな気の抜けたものだつた。
しかし、言葉を口に出せただけでも驚きだ。

今までに感じたことのない圧倒的な魔力のせいか、足が震えているのだから。

先に動いたのは酒&#amp;#21534;童子だった。

両手で構えた槍を突進と共に突き出し、その場で反転しながら薙ぎ払う。

その顔が驚愕に歪んだ理由は単純。

渾身と力を込めたであろう薙ぎ払いは、左手一本で止められてしまつたのだ。しかも統也さんはその場から全く動いていない。だだ、

『左手を添えただけ』。

そこからは一方的だつた。

刹那の間で懐に入り込んだ統也さんの掌底でなすすべもなく打ち上げられた酒&#amp;#21534;童子を待つていたのは、上空で左の拳を振り被る統也さん。撃ち落とされた酒&#amp;#21534;童子に追いすがり、墜落の寸前に蹴り飛ばす。

その先には妖魔の壁。数十の妖魔を巻き込みながら吹き飛ばされた酒&#amp;#21534;童子に向け、統也さんは左手を突きだす。そこから迸つた紅蓮の炎弾は、容赦なく酒&#amp;#21534;童子に向かって飛んでくる。

34・童子に体を焼き、周辺に居た多数の妖魔を消し飛ばした。

「ハリハリまで出鱈田だといつそ清々しいな」

その声の方に視線を向けると、口説とは裏腹に不機嫌さを隠そつともしないブリュンヒルデさんが居た。

「茨木童子は、どうしたんだい？」

「ふん、あんな小物、とうの昔に消し飛ばしてやつたわ」

「だつ、だつたら、統也さんの援護につ……」

どうでもいいことのように言つブリュンヒルデさんに、涼が言つ。しかし、ブリュンヒルデさんに睨みつけられ、最後まで言い切ることは出来なかつた。

「あの中に割つて入れだと？菊川涼、貴様は私に死ねと言つつもりか？」

その言葉に絶句したのは私も涼も同じだつた。

よく見れば、僅かとはいえ、ブリュンヒルデさんの体が震えていた。

「悔しいことこの上ないが、今の統也の力は圧倒的だ。下手に近付けば死ぬのは一いちじだ。私たちには、此処で黙つて見ていることしか出来ん」

口惜しげに顔を歪めるブリュンヒルデさんは、酒 & a m p; # 21
534・童子と戦う統也さんの姿をほんの一瞬でも見逃すまいと凝視してゐる。

その視線を辿つて統也さんの姿を目にしたとき、大気のざわめきを感じた。

天に掲げられた左手の上、上空二メートルほどのところに莫大な魔力が集まつていく。

その魔力量は一人の上級魔法師の総魔力量に匹敵する。

「な、なんて魔力だ……」

「あれは……まさか、禁呪！？」

禁呪。それは、あまりの破壊力ゆえに禁忌の呪文と化したいくつかの魔法をさす。

その破壊力は上級魔法をも凌駕する。

その考えを否定したのはブリュンヒルデさんだった。

「いや、違うな。あれは魔法というのもおこがましい、そういう代物だ」

「どういふことだい？」

「本来魔法というものは、詠唱によつて世界に呼び掛け、その力を借りて奇跡を成す。それに対して、あれは全く別物だ。自身の内面から現象を世界に呼び出し、無理矢理世界を上書きする。現実改变、とでも呼ぶか」

「現実、改变……」

その魔力量に危機感を覚えたのか、満身創痍の酒& #21534;童子が駆け出す。

その剛腕が統也さんを捉える前に、直径一メートルほどの大きさに

なった、高密度の魔力を内包した球体が打ち出される。

瞬間、世界が変容した。

天を衝く巨大な光の柱が酒 & amp; #21534; 童子を中心に、半径十メートルほどの空間を消し去る。

その柱から、全周囲に広がった光輪に触れた妖魔が次々に消滅する。後に残つたのは、いまだに空間を漂う燐光と、妖魔の大軍と乱戦を演じていた魔法師達のみ。

数百体の妖魔を一瞬のうちに無に帰した統也さんは、何の感慨も見せることなく『大樹』へと向かう。

術式は完成し、あとはその時を待つのみとなつて『大樹』に手を触れ、何かを口ずさむ統也さんは、いまだに事情を呑み込めていない魔法師達。

『大樹』から手を放した統也さんは、見えない何かを振り払うように一閃する。

それと同時に、ガラスの割れるような音を伴つて何かが碎け散つた。『大樹』の周辺に満ちていた光が徐々に収まっていくのと共に、そこに渦巻いていた魔力が大気中へと霧散していく。

「奇跡だ……」

誰かが呟いた。おそらくそれは、此処にいるすべての魔法師達の総意だろう。

「勝つたんだ、俺達は勝つたんだ……」

『うおおおおおおおーーー!』

囁きがざわめきとなり、最後には歓声に変わる。

それを聞きながら、私たちは示し合わせたように同時に走り出した。

『大樹』の袂に立ち、歓声を上げる人々を穏やかな微笑で見つめる

銀髪の青年のもとへ。

「なんとかなつたな」

視線の先で、抱き合ひ肩を叩き合ひう人々を眺めながら呟く。

「シール・アップ」

再度封印を施しながら、酒吞童子の最後の言葉を思い出す。

『くつくつく、我等を止めたか、流石あやつの子よ。だが、これで終わりと思つなよ。すべては、あの御方の御心にまことにま』

森で戦つた時にも酒吞童子の話にも出た、あの御方といふ存在。そして、あやつの子といふ言葉。

あの御方とは誰なのか。なぜ異世界の鬼である酒吞童子よりも高位の存在だということ。

534・童子が俺の親を知つているのか。

答えは出ない。

しかし、この襲撃の裏に何者かの意思が存在していること。その何者かは、酒吞童子よりも高位の存在だということ。

それだけは確かだ。

「統也ー。」

聞き慣れた声に視線を上げると、一矢に駆け寄つて来る二人の少年少女。

怒つたような表情のディアナ。安心した様子の氷雨。嬉しそうに笑

う涼。

三人を苦笑で迎えると、氷雨と涼は足を止める。
しかし、速度を緩める」となく突っ込んできたティアナには体当た
りされた。

「げえ……」

予想外の行動にまともに食らったものの、何とか踏みとどまること
が出来た。

「おー! ティアナ、何する……」

見下ろしたティアナの様子に、上げかけた抗議の声を呑み込んだ。

「ティアナ……?」

胸に埋めていた顔が上がる、その両目には大粒の涙。

「何故お前はそこまでするんだ。自分の身を削つてまで守る価値が
この世界にあるのか? どうして、お前は……」

それだけ言って、再び顔を胸に埋めるティアナの頭を撫でる。

「この世界にはお前たちがいる。理由なんて、それで充分だ! ・・・
けど、一応謝つとく。約束、したもんな」

「謝るくらいなら最初からやるな

「分かつた、次からは気を付ける」

「本当だな? 約束だぞ?」

「ああ、約束だ」

仕方ない許してやる、と一步下がりながらいつティアナに笑いかけると、ティアナは顔を赤くして顔をそむけてしまった。

なんでだ?と視線で涼に説明を求めるど、「こいつ信じられねえ」とでも言いたそうな顔で睨まれた。視線を氷雨に移すと、こちらは顔を真っ赤にしてやつぱり睨んでいた。

氷雨さん、あなたに睨まれると、とても怖いです。

何ともおかしな空気になってしまったことに内心首をかしげながら、それでも何とかしなければ、と殊更明るい調子で切り出した。

「わつ言えば、お前ら腹減つてないか?わつせと帰つて年越し蕎麦でも食おうぜ」

「統也、お前の手作りだろ?」

「ああ、勿論だ。麵から出汁まで、完全自家製だ」

「統也さんが作ったのかい?」

「それは食べてみたいですね」

「なつ、貴様らも食う気か?」

「「もちろん」」

「ふ、ふざけるなあああつ!」

「おこおこ、落ち着けよ!ティアナ。もともとそのつもりだったんだ。

とても一人で食える量じゃない」

一転して騒がしくなつた三人にほつと一息。

顔を真っ赤にして叫ぶディアナ。それをのらりくらりとかわす氷雨。

そんな一人を苦笑いを浮かべて眺める涼。

こいつらがこんなに楽しそうなんだ。

「おーい、早く行くぞー。遅れた奴には食わせないぞー」

気になることはあるが、とりあえず今は新年を祝おう。

その言葉に、前を歩いていた俺を追い抜いて行く三人を眺めながら

そう思つ。

見上げた空には淡く輝く満月。その明かりは俺たちを見守つている

ように思えた。

だから俺は笑おう。出来る限りの笑顔で精一杯に生きよう。
視線を下げる、二十メートルほど先で立ち止まり俺を呼ぶディアナたちがいる。

俺は急いで追いつき、三人に笑いかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2678g/>

そして彼は月夜に笑う

2011年1月26日01時45分発行